



アンテルナシヨナ
ル・シチュアシオ
ニスト 第9号

シチュアシオニスト・イン
ターナシヨナル

目次

- 1、今、S I
- 2、われわれの語る世界 1、2、3、4
- 3、質問表
- 4、純正ムース
- 5、最も長い月日（63年2月－64年7月） 1、2
- 6、遠方からの手紙
- 7、社会実験芸術センターのアンケートに対する回答
- 8、サイバネティクス研究者との往復書簡
- 9、付属資料 芸術の革命的評価のために
- 10、付属資料 シチュアシオニストと政治および芸術における新しい行動形態
- 11、解説 男の「遊び」と女の労働——フェミニズムから見たシチュアシオニスト 伊田久美子

「それぞれの時代はその時代の人間的機材を自ら作り出す。だから、もしわれわれの時代が理論的作業を真に必要とするなら、それは自らを満足させるために必要な力を自ら創造するであろう。」

ローザ・ルクセンブルク*1、1903年3月14日付『前進』より。

シチュアシオニストがすでに1つの歴史を有し、その活動が最近数年間の文化をめぐる議論において自分に見合った1つの役割——非常に特殊ではあるが確実に中心的な役割——を勝ち得たことが明らかになった今、S Iが成功したとして非難する者もあれば、失敗したとして非難する者も出てきた。

それらの言葉の実際の意味を理解するためには、現状に満足したインテリゲンチヤのS Iに対する見解のほとんどすべてを理解する場合と同様、まず何よりもそれらの言葉を転倒してみる必要がある。S Iが失敗した部分とは、一般に成功と見なされているものである。すなわち、われわれに対して人々が評価し始めている芸術的価値であり、われわれのテーゼのいくつかが入れるにいたった最初の社会学的流行もしくは都市計画的な流行であり、あるいはまた、ただ単に、除名の翌日からあらゆるシチュアシオニストにほぼ保証されている個人的成功である。わわわわか成功した部分——それは、先のものより深遠なものだが——とは、大々的に提供された妥協に対して抵抗したことである。当初の簡素なプログラムにとどまることなく、その本質的に前衛的な性格は、他のいくつかのより顕著な性格にもかかわらず、そのプログラムをより先まで推し進めなければならないということにあることを証明したことである。そして、現在の既存の枠組みのなかでは、まだ誰からも検討されていないことである。

おそらく、われわれにはかなり多くの誤りもあっただろう。われわれはしばしばそれを訂正したり、あるいは捨て去ったりしたが、まさにそこにこそ、成功しかけていた要素があったのだ。あるいは、それらの要素に対してこそ、成功に導くために、最大限の援助が与えられたのである。われわれの初期の刊行物のなかに、欠陥や無駄なお喋り、古くさい芸術家の世界から出て来た奇想や古い政治の類似品を見出すことはたやすい。もっとも、それらが容易に批判できるのは、S Iのその後の結論に照らし合わせてのことなのだが。われわれの書いた物のなかに、これらとは逆向きのファクターが痕跡をとどめていることはもちろんより少ないが、その重圧はわれわれにとってとても大きなものであった。すなわち、ニヒリスト的な棄権主義が存在し、それによってわれわれの多くが、積極的な対話という初期段階のお喋りを超えて思考することも行動することもできないというひどい状態に陥っていた。そのようなものは、ほとんど常に、現実からかけ離れたラディカリズムのこの上なく抽象的で欺隔的な要請にこそ相応しい。

しかしながら、われわれにとって他のどんな逸脱よりも重大な脅威となった逸脱がある。それは、資本主義によって先導されてきたこの新しい社会についての説明と提案を行う現代的な傾向、すなわち、さまざまに異なる仮面の下でこの社会への統合に向かうあらゆる傾向と、十

分に明確に区別されないことの危険性であった。そうした傾向は、コンスタントによる統一的都市計画の解釈以降、S Iのなかで声を上げはじめたが、それは、われわれがあれほど強く批判した古い芸術観よりもけるかに危険である。この傾向はより現代的であり、それゆえ、それほど明確ではなかったが、確かにより大きな将来を約束されていた。われわれのプロジェクトは、統合への現代的傾向と同時に形成された。それゆえ、われわれが実際に同時代にあるという点において、直接的な対立もあれば、また、どこことなく互いに似ているところも存在する。こうした側面に対してのわれわれの警戒は十分ではなかった。つい最近まで、そうだったのだ。だから、アレキサンダー・トロッチの提案*2——本誌の第8号での——を、正反対の趣旨であることは明らかであるにもかかわらず、解体した芸術を「心理劇（サイコドラマ）的」に救済するあの貧しい試みの数々——例えば、この5月にパリで行われたばかばかしい〈自由な表現のためのワークショップ〉はそれを表現していた——と共通点を待ちうるものとして、読むことも不可能ではない。だが、われわれの到達した地点は、われわれのプロジェクトを明らかにすると同時に、逆に、統合のプロジェクトをも明らかにするのである。実際に現代的ではあるが革命的ではない探究の事例はすべて、今や、われわれの第1の敵と見なされて、そのように扱われなければならない。それらの事例は、あらゆる既存の支配装置を強化することになるだろう。

だからと言って、われわれは現代世界の最先端を立ち去ってばならない。その唯一の目的は、いかなる点においても現代世界に類似しないためであり、あるいは、われわれに敵対して使われるものは何1つ現代世界に教えないためである。われわれの敵が部分的にわれわれを利用するようになってきたことは、当然の成り行きである。だが、われわれは現在の文化の領域を彼らに残しておくつもりはないし、彼らと係わりを持つつもりもない。適当な距離を置いたところからわれわれを称賛し、われわれを理解したいと望むその同じ偽善者どもが、自分たちが2番目の者の立場を探るために、われわれに対して最初の者の態度の純粋さを探るようわざと助言するかもしれない。このことは明白である。われわれは疑わしい形式主義は退ける。すなわち、プロレタリアートとまったく同様に、われわれもまた所与の条件のなかで搾取されずにいることを要求することはできない。そうした要求は、ただ搾取者の全責任においてのみなされねばならない。S Iは支配的文化との二者択一、とりわけ、前衛と称されるその諸形式との二者択一のなかにはっきりと身を置いている。シチュアシオニストは、死んだ芸術を、あるいは、分離した哲学的省察を——現在のあらゆる努力にもかかわらず、その屍体を「復元する」には到らないだろう——相続しなければならないと考えている。なぜなら、そうした芸術と思想に置き換わるスペクタクルは、宗教の相読者であるからだ。そして、スペクタクルの批判は、かつて「宗教の批判」（現在の左翼が一切の思想と行動を放棄したときに同時に放棄した批判）がそうであったように、今日あらゆる批判の第1条件である。

人間の活動のすべてを警察的に完全に支配する道と、人間の活動のすべてを無限に自由な仕方で創造する道とは1つである。それらは現代的な発見がたどる同一の道なのである。われわれは必然的に敵と同じ道の上に——たいていの場合、敵よりも前に——いる。だが、われわれは、まったく当惑することなく、敵としてそこにいなければならないのである。より優秀な方が勝利するだろう。

今の時代は、多様な革新を試みることはできるが、それを利用することはできない時代である。なぜなら、この時代はその根底において昔の秩序を保持せざるをえないからだ。社会を革命的に変革する必要があるということこそが、われわれのあらゆる革新的な演説を締めくくる、あの「カルタゴを破壊せねばならない（デレンダ・エステ・カルタゴ）」という合い言葉である。

既存の条件のすべてを革命的に批判することは、確かに知性の独占物ではなく、知性を使用する者が独占すべきことである。文化および社会の現在の危機において、知性のこのような使用法を知らない者は、実際は、識別しうるどのような種類の知性も持ってはいないのである。使われない知性のことをわれわれに話すのは止めたまえ。そうしてくれれば、大変うれしい。哀れなハイデッガー！ 哀れなルカーチ！ 哀れなサルトル！ 哀れなバルト*3！ 哀れなルフェーヴル！

哀れなカルダン*4！ ひと癖（チック）、ふた癖（チック）、なくて七癖（チック）だ！*5 知性の使用法がなければ、革新的な思想——現代の全体を、現代に対してなされる異議申し立てと一体になった運動のなかで理解しうる思想——も、戯画的に断片化されたものとしてしか持つことはできない。そうした思想が既に存在する場所に出くわしたとしても、それを適切に剽窃することさえできない。専門化した思想家たちは、自分の分野から外に出ると必ず、隣の同様に破産した専門分野のお目出たい観客を演じずにはいない。彼らはそれについて何も知らなかったが、流行になったので見物に来たのである。かつての極左政治の専門家は、構造主義や社会心理学と同時に、民族学的イデオロギー——それは、彼にとっては、まったく新鮮である——を発見して驚嘆する。ズニ族インディアンは歴史を持ったことがないという事実が、彼にとっては、われわれの歴史において自分自身が行動できないことを説明する光明に見えるのである（『社会主義か野蛮か』誌第36号の最初の25ページを読んで笑うこと）。思想の専門家たちは、もはや専門化を思考する者以外の何者でもない。誰もが話題にする弁証法をわれわれだけが独占していると主張するつもりはない。われわれが主張するのはただ、弁証法の使用を一時的に独占しているということだけである。

なおも厚かましく、われわれの理論に実践の要請を対置する者がいる。そのようなことを語る者は、それほどまでにひどい方法的錯乱状態にあり、おまけに、ごくわずかな実践にさえも成功できないことを、十分に暴露したのである。革命的理論がわれわれの時代に再び出現して、新しい実践のなかに広がってゆくためにその理論そのものしか頼るものがないとき、そこには既に実践の重要な始まりがあるとわれわれには思える。この理論は、最初は、現在の社会が広めている証明書付きの新しい無知の枠組みのなかに見出される。この無知さ加減は、19世紀よりもはなはだしく根本的に大衆から切り離されている。当然のことながら、われわれはその孤立、その危険、その運命を共有するだろう。

それゆえ、われわれと話をしに来るに際して望まれることは、まず、既に自分自身が危うい立場にいるのではないこと、次に、多くの細部の見通しに関しては一時的に間違いうるとしても、われわれが人物に対する否定的判断において間違ったことは決してないということを知っておくことである。質についてのわれわれの規準はあまりに確かなので、あえてそれについて議論するようなことはしない。したがって、同時代の人物や傾向に対するわれわれの断罪に理論的にも実践的にも同意していないならば、われわれに近づくことは無駄である。現代社会を今になって解

説し、改善しようとしている一部の思想家は、彼らが例えばスターリニストだった時に、もっと古めかしい言葉で、既にそれを解説し、そして最終的に保存したのである。今、彼らは、かつてと同じように初々しく嬉々として、揺るぎない態度で再び社会に参加しようとしているが今度もまた挫折することは明らかだ。その彼らと以前の段階では闘いを交えた者たちも、今は彼らに合流し、新機軸の中で結局彼らと一体化してしまっている。幻想の専門はすべて、一生身分を保障された教壇の上で教えられ、議論されている。しかし、シチュアシオニストはこのスペクタクルの外にある認識のなかに居を構える。われわれは国家によって保証された思想家ではないのである。

事実としても理念としても世界に散り散りに存在する批判的要素と否定的要素の間に、また、意識に上がり始めたこれらの要素とそれを担い持つ者たちの生活の間に、そして最後に、あちこちでこうした知的認識と実践的な異議申し立てのレヴェルに達している人々あるいは最初の集団どうしの中に、われわれは首尾一貫した出会いを組織しなければならない。それゆえ、最も実践的な面での、これらの探究や闘争の調整（新しい国際的結合）は、最も理論的な面での調整（それはシチュアシオニストによって準備中の多くの著作によって示されるだろう）と、現時点においては切り離すことはできない。例えば、本誌の今号は、われわれのテーゼの論考においてしばしば抽象的にすぎたところをより良く説明するために、誰にでも手に入る情報のなかに既に存在している要素を一貫したやり方で紹介することに大きなスペースを割いた。われわれの次の作業は、より豊かな形で表現されねばなくなるだろう。この作業は、われわれがここに自ら企てることのできたものをはるかに超えるものとなるだろう。

現代の無能者たちはここ数年、「20世紀に足を踏み入れる」時代遅れのプロジェクトでいい気になっているが、われわれの考えでは、今世紀を支配し尽くすであろうこの死んだ時間と、さらにはこれを機会にキリスト紀元とに、できる限り早く終わりを告げなければならない。ここでも他の所でも、重要なことは、常軌を越えるということである。われわれの運動は20世紀から足を踏み出すためにこれまでなされてきた最良のものである。

*1：ローザ・ルクセンブルク（1870－1919年） ポーランド生まれのドイツの社会主義者。ドイツ共産党の創立者。89－96年にチューリッヒに亡命、98年ベルリンに移り、ドイツ社会民主党に属し、ベルンシュタインらの修正主義と論戦。1904年から14年、第2インターナショナルで活動し、カウツキーらと論争して左派の指導者の1人となる。16年、リープクネヒトやメーリングらとスパルタクス団を結成、18年、ドイツ革命の勃発にあたってドイツ共産党を創立し、革命の推進に努めたが、19年の1月蜂起の過程で逮捕され虐殺された。1913年の『資本蓄積論』で、マルクスの『資本論』の排他性を批判し、現実の資本蓄積条件が非資本主義的領域と世界市場にまで広がっているとして、帝国主義状況下の列強の対立の必然性を解明した。

*2：アレクサンダー・トロツキの提案 『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第6号「世界転覆の技術」のこと。

*3：バルト フランスの文学理論家ロラン・バルト（1915－80年）のこと。バルトは現在では現代文学の批評家、記号論の理論家として有名だが、60年代初頭には『アルギュマン』誌の編集員を努めるなど、「政治」的立場を鮮明に

打ち出していた。しかし、アルジェリア戦争の際には、「121人宣言」に参加せず、それにある意味で敵対し、アルジェリア戦争の平和的解決を主張する教育者による融和的宣言「アルジェリアの交渉による平和のために」に署名するなどの日和見的な行動を行った。また、彼が最初に注目を集めた批評『零度のエクリチュール』は、「ヌーヴォー・ロマン」に理論的根拠を与えたこともあり、シチュアシニストはバルトを批判していると考えられる。

*4：カルダン 〈社会主義か野蛮か〉の指導者 コルネリユウス・カストリアディス（1922－97年）の偽名の1つ。正式にはポール・カルダン。1959年以降使用。他にも、デルヴォー、ピエール・ショリユ（1946年以降）、ジャン＝マルク・クードレなどの偽名がある。

*5：哀れなルカーチ！　〔……〕　ひと癖（チック）、ふた癖（チック）、なくて七癖（チック）だ！　ロートレアモンの『ポエジーII』の転用の例。元は「詩は万人によって作られるべきである。一個人によってではなく。哀れなユゴー！　哀れなラシーヌ！　哀れなコペー！　哀れなコルネイユ！　哀れなボワロー！　哀れなスカロン！　ひと癖（チック）、ふた癖（チック）、なくて七癖（チック）」という文章。邦訳、『ロートレアモン伯爵／イジドール・デュカス全集』豊崎光一訳、白水社、334ページ。

訳者解題

この「われわれの語る世界」は、新聞・雑誌記事の純粋な引用によって成り立っているが、一見雑多なそれらの引用文も、「孤立の技術」とか「意志と表象としての都市計画」というようなユーモアの利いたタイトルと、S Iによる鋭い解説によって、現代世界の不条理をいろんな角度から暴露するものとなっている。こうした形式は、シチュアシオニスト・スタイルとも言えるもので、S I以前のレトリスト・インターナショナル(L I)の機関紙『ポトラッチ』にすでに「今週のベスト・ニュース」というタイトルでその週のばかげたニュースが毎回掲載されたり、『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌第5号の「S Iについての今年の世論」や第8号の「噂の選集」などでも試みられていた。あるいは、『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌各号の挿し絵(ピンナップ・ガールや核シェルターなど)やワインやTVの広告の転載なども現代社会のスペクタクルを批判的に意識させる優れた装置として機能している。こうしたシチュアシオニスト・スタイルは、既存の要素を「環境のより高度の構築に統合すること」とS Iが定義する「転用」の手法の応用である。「転用」の手法は、絵画や映画、文学などに用いられ、のみの市で手に入れた絵の上に異様な形態を描き加えたアスガー・ヨルンの「転用絵画」や、既存の映画フィルムをつぎはぎして別のナレーションを付け加えた『スペクタクルの社会』などのドウボールの映画、既存の小説の文章を解体して並べ替え、まったく別の物語を生み出すベルンシュタインの『王さまのすべての馬』やシル・ヴォルマンの『私はきれいに書く』などがあるが、「われわれの語る世界」もまた、「転用」の技術を「プロパガンダの方法」として用いた例だと言えるだろう。

われわれの築き上げる新しい理論は、同時代の順応主義者の眼にはどれほど突飛で途方もないものに見えたとしても、新しい歴史的契機の理論以外の何ものでもない。この契機は、すでに存在している現実であるが、厳密な批判の進歩によってはじめてそれを変革しうるのである。「理論への欲求は、ただちに実践への欲求となるだろうか。思想が現実化するを追求するだけでは十分ではない。それ以上に、現実が〔自ら〕思想となることを求めなければならないのである」(『ヘーゲル法哲学批判序説』*1)。シチュアシオニスト的な現実の日常的透視図を手に入れるためには、簡単に入手できる新聞や雑誌のなかでいつでも出会うような情報の解読を手がけるだけで十分である。この解読の手段は、本質的には、事実と、事実を完全に解明するいくつかの主題の一貫性との間に打ち立てるべき関係のなかで存する。この解読の意味は、全面化した詐術の細部から細部へと、ますます悲惨な姿で自己矛盾をおかしてゆくがゆえに、現在いっそう真面目に受け取られている有象無象の思想家たちのでたらめさ(=首尾一貫性の欠如)を明らかにすることによって、逆に立証される。

孤立の技術

現在の社会における技術的発展のあらゆる側面、とりわけ、いわゆるコミュニケーション手段なるものは、個人の受動的な孤立を最大にし、一方通行の「直接的かつ恒久的な結び付き」と、あらゆる種類のリーダーによって広められている有無を言わせぬ扇動によって、彼らをコントロールすることに向けられている。この技術のいくつかの応用例は、根本的に欠如しているものに対するちっぽけな慰め、あるいは、時に、特に、この欠如の純然たる証拠そのものさえ提出するに到っている。

あなたがTVの熱狂的な愛好家なら、かつて実現されたことのない最も驚くべきテレビがあなたの興味を引くことだろう。なぜなら、あなたはそれをどこにでも持ってゆけるからである。アメリカ合衆国のヒューズ・エアクラフト・コーポレーションが製造した、このまったく新しい形のテレビは、頭にのせて持ち運びできるようになっている。このテレビは重さ950グラムしかなく、本当に、飛行士や電話交換手のヘッド・バンドの上に着用できる。それは、片眼鏡のような形をした円いプラスチック製の超小型スクリーンを、1本の支えて、眼の前4センチのところに装着するようになっている（.....）映像は片方の眼でしか見ることはできない。もう片方の眼で、別の所を見たり、さらには字を書いたり、手仕事に集中したりし続けることもできる、とメーカーは言っている。

『ジュルナル・デュ・ディマンシュ』紙、62年7月29日付

炭鉱争議はついに解決され、どうやら明日の金曜日には作業が再開される見通しである。（.....）炭鉱労働者街と採石置場をこの3、4日間ずっと包み込んでいた完璧なまでの静けさを説明するものは、おそらく、こうして議論に参加したいという感情だったのだろう。トランジスタ・ラジオはもちろん、とにかくテレビがあったおかげで、リーダーだちとその委任者だちとの間のこの直接的かつ恒久的な連携が容易に可能になった。と同時に、テレビは、決定的な時間にわが家に帰ることを余儀なくさせた。昨日もまだ、その時間には、組合本部に集まるため、誰もが逆に外出しようとしていたのであるが。

『ル・モンド』紙、63年4月5日付

シカゴ駅に、孤独な旅人たちのための新しい慰めが置かれた。1「クォーター」（1.25フラン）で、蠟製の自動人形があなたの手を握り、こう言う、「こんにちは、おじいさん

。お元気ですか？ お会いできてうれしいです。良い旅を」。

『マリー＝クレール』誌*2 1963年1月号

言葉とその使用者たち

「言葉は生の支配的組織化のために働く〔＝変質する〕（.....）。権力は言葉でできた偽の身分証明書を与えるだけだ（.....）。それは何も創造せず、回収するのである」（『アンテルナショナル・インチュアシオニスト』誌 第8号）。言葉の転倒は、それらの言葉を当てにしてきた異議申し立て勢力の武装解除を示している。世界の支配者は、その時、記号を奪い取り、雷管を取り外し、意味をねじ曲げる。革命という言葉は、広告業界で慣習的に使われる基本語彙になってしまった。『デア・ドイチェ・ゲダンケ〔ドイツ思想〕』誌によって集められた例の中で最もひどいのは、「赤〔＝口紅（ルージュ）〕の革命——レッドフレックスによる革命」という文句だった。社会主義という概念も、フルシチョフからカトリックの司祭たちにいたるまで、たった1つの言葉にかつて集中されたことがないほど雑多な曲解を受けている。労働組合もその役割を完全に変えてしまった。今年のベルギーの医者たち〔のストライキ〕に見られるように、今や、最も有効なストライキを組織しているのは、特権階層の者たちである。新中国派のシネの「無政府主義（アナキスト）的意見」や、さらには、『ル・モンド・リベルテール』誌の無政府主義（アナキスト）的意見からも判るように、無政府主義（アナーキー）の概念もまったく例外ではなかった。

エディンバラ公はつい最近、労働党傘下の英国労働組合会議（TUC）のメンバーになった。このエリザベス女王の夫の所属する映画シナリオ作家ギルドが、実はTUCに加盟したのである。

ロイター、64年4月17日

クメール政権*3の政治体制は社会主義の用語法を発想源としているので、この政権の共和派君主は「サムデッチ・サハチヴィン」すなわち「王子同志（カマラド）」と呼ばれている。

『ル・モンド』紙、64年5月27日付

ローマ法からアフリカ黒人法に戻ることに、土地所有に関するブルジョワ的概念から社会主義的概念に戻ることが重要である。この社会主義的概念は、伝統的なブラック・アフリカ概念なのだ。

演説者のなかには、女性解放に対して明白きわまりない留保を表明する者が幾人かいた。他の演説者は、概ね次のように述べた。アルジェリア女性は解放されて、国民生活の中に再統合されねばならない。だが、まず、彼女らはそのすべての義務を体得し、コーランとすべての戒律をよく知っていなければならない、と。経済と社会に関する決議文には、「われわれの伝統とわれわれの社会主義的選択に合致した家族法が、可能な限り速やかに整備されなければならないと書かれている。

『ル・モンド』紙、64年4月22日付

会議には「社会主義者グループ」が集まっていたが、この一派を横断するさまざまな潮流を、さらに細かく分けることができるだろう（.....）。キリスト教徒の活動家はそのグループに完全に参加していたが、不機嫌さを隠そうとしなかった。というのも、彼らの1人の言葉によると、「社会主義者の洗礼証明書をたえず懇請しなければならないことに、自分たちは飽き飽きしている」からである。

『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌、64年2月13日号

その人物は、本人の言うことを信じれば、アナキストである。彼は、それをあなたにこっそりと打ち明け、「だれでも知っていることだ」とつけ加えさえするだろう（.....）。彼の名はシネ*5で、キューバから戻ったばかりだ。「労働者は革命を理解していますか？——いいえ、それに、彼らはそんなものの理解をけっして手に入れられない方がいいのです（.....）。資本主義者の牢獄はありませんが、革命派の牢獄があります。すべてがうまく行っています。うまく行きすぎているほどです。（彼は、質問者の1人に向かってこう付け加える）そこに行くことは、あなたには、とてもためになるでしょう」。これが、シネ氏のアナキストとしての意見である。

『ル・モンド・リベルテール』誌、1963年9月号

ラヴァシヨル*6とボノ団*7についてのお決まりの物語、それは、『アンビギュ』誌や『グラン＝ギニョル』誌*8のなかにアナーキーを発見したゴシップ記者全員の馬鹿の1つ覚えである。

モーリス・ジョワイユー、

『ル・モンド・リベルテール』誌、1946年4月号

余暇が働く〔=変質する〕

余暇の発展と強制的な消費の発展によって、偽の文化と偽の遊びは、経済の成長部門となった（三連勝式（ティエルセ）〔競馬で上位3頭を当てる方式で、街の場外馬券売場で売られる〕はいまや、売上高でフランス第5の企業だ）だけでなく、経済の目的そのものを表しながら、次第に経済全体を動かす傾向にある。普通、「最良のものと最悪のもの」と見なされているものは、文化のスペクタクルのなかでほとんど完全に混ぜ合わされることによって、必ずこの最悪のものの方に傾いてゆき、それがそのスペクタクルの唯一の意味となるのである。その意味とはすなわち、生き延び〔=余りの生〕の消費であり、それは社会的に予想され、計画され、保証された死を好んで採用するまでになる。資本主義の前衛はすでに、死そのもののなかでの消費を当て込んでおり、最後には生き延び〔=余りの生〕の絶対を享受できるよう、自分の年金を作るようそそのかしている。

フランス青年音楽連盟、地中海クラブ*9、愛書クラブ、雑誌『プラネット』*10は、つい最近、20世紀フランス人協会内で1集団を形成した。この協会は、1901年の法令によるもので、営利を目的とせず、宗派的性格も政治的性格も持たない。それは、個人にではなく、さまざまな形態の余暇団体間で組織される交流に参加する意志のあるすべての団体に対して開かれている。設立団体である4つの組織の活動家の言うことを聞くかぎり、純粹に商業的な関心を除けば、これらの集団を結びつけているものが何なのかはよくわからなかった。彼らの1人は、次のような言い方でそれを説明した、「私たちはみんな、よく知られていない分野で働いています。しかし、この分野はたえず発展し続けるでしょう。つまり、大衆文化と余暇の分野です（……）」。

『ル・モンド』紙、64年2月22日付

バークレイ銀行の発行する雑誌は、その最新号で、ビートルズが「イギリスの経常収支の均衡に大きく寄与する目に見えない輸出品」になっていると書いている。

ロイター、64年2月25日

ビートルズが好きな者はたくさんいる。ビートルズがリヴァプールの労働者大衆の真の声を聞かせてくれるからだ、と彼らは言う（……）。だが、「マージー・サウンド」*11は、共産党系の『デイリー・ワーカー』紙が書くように、本当に30万人の失業者を抱える8万戸のスラムから立ち上る反逆の叫びなのだろうか？（……）これまでビートルズは自分たちの起源である大衆的な口調を強調してきたが、今日ではより広範な聴衆に目を向けている。その聴衆には、新しい労働者階級に加えて、中産階級と、豊かな社会の恩恵を受けているすべ

ての人々が含まれるのである。そして、彼らがこの進化をよく理解したからこそ、マネージャーは彼らに清潔な服を着て、髪の毛を洗うようにすすめたのである。

アンリ・ピエール*12、『ル・モンド』紙、63年12月12日付

世界がこれまでに見た最大のスペクタクル、10億ドルの投資（その90パーセントは2年後には何の痕跡も残さず消え去るだろう）、オブジェと生き物の魅惑的なコレクション。ブルンジ*13の国王陛下の専用バレエ団を構成するワツチ族*14のダンサー——その聖なる太鼓は、これまで故国を離れたことがない——から、この上なく複雑な電子機械まで、ミケランジェロの「ピエタ」から人間が月面に立つ準備をするための宇宙船のキャビンまで。「理解による平和」、これが、水曜日に開幕するニューヨーク見本市のスローガンである（.....）。

入場者はミニカーに乗って未来への旅ができるだろう。彼らは未来都市の中を自由に見て回れるが、そこでは、交通問題はすべて解決され、自動車専用道路は地下に掘られ、駐車場は1階に、店舗は2階に、住居は3階に、公園や樹木と花の植えられた空間は4階に設置されている。夢物語だろうか？ 大企業の広告代理店は、このように反論する。1939年のニューヨーク博覧会では、ジェネラル・モーターズがすでに高速道路と橋と地下通路の予想図を描いており、それは当時は夢物語のように見えただけでも、その後、アメリカの現実の一部になったと（.....）。

コカコーラは、好奇心の強い人々に、まったく特殊な「地球一周旅行」を提供する。彼らは「地球上の最も遠く離れた場所を感じ、触れ、味わう」ことができ、おまけに、この上なくすてきな音楽と歌を聴き、多種多様な他の感動を味わうこともできるのだ。もちろん、それらの香りと味はすべて、電子頭脳によって「生産され」、自動的にコントロールされたものなのだが（.....）。

RAU（アラブ連合共和国）*15はファラオーの金細工を見せつけることで、フラフランコ将軍はベラスケスからゴヤまで、ピカソからミロまでの古今の大画家の絵を展示することによって、アメリカ人の共感を引きつけようとしている。（.....）

美術愛好家のためには、大規模な現代美術展が開かれる。科学的精神の持ち主のためには、発見館がある。女性の訪問者も忘れられてはいない。クレイロル館では、1人1人の女性が、次の季節に自分の髪をどうするか、ブロンドか赤毛か、栗色の髪か黒髪か.....を決めることができる。「プラクティカル・ビューティ」という装置のおかげで「色の試着」ができるのである。この館ではまた、電子頭脳が人物の身体データを考慮して、適切な助言をしてくれる。パウダーは何色にすべきか、口紅の色やアイシャドーの色、眉毛やマニキュアの色などはどうすべきかを教えてくれるのである。

『ル・モンド』紙、64年4月22日付

「生活のための技術」展を訪れたまえ。「15年後のあなたの暮らしを見に来て下さい」。ロンドンで最も有名な店の1つであるハロッズ館の大ホールに……。 「ワインを室温にするのに、困っているあなた。『電気室温化機』はいかがですか。ボルドー・ワインを室温にするには左のボタン、ブルゴーニュ・ワインは右のボタンです。値段は7リーヴル」。

(……) 「『生活のための技術』展は手近な未来の先取りです。12ヵ月から24ヵ月のローンで買える未来の先取りなのです」。(……) 「なぜ壁紙を貼るのですか、と女性アナウンサーは話を続ける。ヘリオラマ(色調の変わる電動板)を吊ればよいのです」。

『フランス＝ソワール』紙*16、64年2月28日付

テキサス州ハリス管区(カウンティ)刑務所の6名の囚人は、タバコの害毒に関する公式報告に心を動かされて、昨日、禁煙宣言を公表した。肺癌で死にたくはないと言うのである。この6名の囚人は、さまざまな罪状で、全員が電気椅子送りを宣告されているのだが。

ヒューストン発UPI、64年2月13日

エッティンガーは、人体冷凍が「歴史上、最も将来性のあるもの——と同時に最も問題をはらんだもの」であると述べている。いずれにせよ——実用的でなくてはならないので——、このアメリカの学者は、将来のことを考えるすべての人に対して、遺書に自分が冷凍されたいかどうか明記し、一時的な死と自分の第2の生のための金を取っておくよう勧めている。死体で満たされるはずの冷凍「寝室」(死体の重さは、合衆国では1500万トンになるだろう)の滞在費は、エッティンガーの見積では、年間約200ドル(1000フラン)になるだろう。

『フランス＝ソワール』紙、64年6月17日付

*1: 『ヘーゲル法哲学批判序説』 引用はカール・マルクス 『ユダヤ人問題に寄せて・ヘーゲル法哲学批判序説』 城塚登記、岩波文事、87ページ。

*2: 『マリー＝クレール』誌 1939年創刊の女性月刊誌。日本、アラブ、スペイン、イタリア、英国、トルコ版などもある。

*3: クメール政権 1953年にフランスからの独立を果たしたカンボジアで、60年に国民投票で選ばれた国家元首のノロドム＝シアヌーク国王の政権で、〈王政社会主義〉体制を推進した。クメールはカンボジアの古称。

*4: レオポール・セダール・サンゴール（1906-） セネガルの詩人・政治家。30年代にパリでエメ・セゼールらと知り合い、ネグリチュード運動の中心人物として活動、多くの詩を書き、48年にサルトルの序文「黒いオルフェ」を付した『ニグロ・マダガスカル新詩集』を発表し注目を集めた。政治的には30年代から人民戦線に加わるなど、フランス社会党の積極的な活動家だったが、48年セネガル進歩党を結成、60年のセネガル独立とともに初代大使領となり、独自の社会主義路線を打ち出したが、フランス共同体を礼賛し、フランスとの親密な関係を維持した。

*5: シネ（本名モーリス・シネ 1928-） フランスの漫画家、フランスの週刊誌『レクスプレス』などに風刺の効いた漫画を掲載する一方で、62年から63年には個人誌『シネ・マサクル』（全9号）を出し、68年には反権力の風刺漫画誌『アンラジェ』を刊行するなど、新左翼の学生運動の中でもはやされた、現在も反人種主義からサパティスタ支援まで左翼運動を幅広く特集する『シャルリー・エブド』誌に多くの漫画を掲載している。

*6: ラヴァシヨル（本名フランソワ・クローディウス・クーニグシュタイン 1859-92年） フランスのアナキスト。染物工として働きながら、1892年に逮捕されたアナキストの復讐のため、数多くのテロを行い、自らも逮捕されギロチン刊に処せられた。

*7: ボノ団 ジュール・ジョゼフ・ボノ（1876-1912年）に率いられたフランスのアナキスト・グループ。1910年から12年にかけて、パリで銀行強盗を組織的に行った。

*8: 『グラン＝ギニョル』誌 「グラン＝ギニョル」は、1895年「テアトル・サロン」の名で設立された人形劇。笑いと恐怖の入り交じった独白の形式を生み出して人気を博したが、戦後、探偵小説〈セリ・ノワール〉の脚色や科学の進歩などに想を得た出し物で革新を計るが、62年に閉鎖。63年からベケットやイヨネスコのアンチ・テアトルを題材とする新しい人形劇団として再出発した。『グラン＝ギニョル』誌はその雑誌か。

*9: 地中海クラブ 1946年創立のフランスの会員制リゾートクラブ、会員77万人を擁し、フランス本国とタヒチやアンチール諸島などの海外県・海外領土に100近くのリゾート村を開設する。

*10: 『プラネット』 フランスの作家・ジャーナリストのルイ・ポーヴェル（1920-）がジャック・ベルジェとともに1961年に創刊した隔月刊の雑誌。66年まで全41号が刊行された。オカルトやSFなどの大衆文化から政治・芸術まで、雑多な主題を扱う総合雑誌だが、その基調は右翼的保守主義だった。

*11: 「マージー・サウンド」 ビートルズの誕生したリヴァプールを流れるマージー川にちなみ、彼らの音楽を形容する言い方。

*12: アンリ・ピエール フランスのジャーナリスト。著書に『ホワイト・ハウスの日常生活——レーガンとブッシュの時代』（90年）など。

*13: ブルンジ アフリカ中部、ルワンダとザイールにはさまれた国。人口約350万。農業国でコーヒーで有名。ドイツ占領、ベルギーによる国連の委任統治を経て、62年から独立王国になり、66年に共和国になった。

*14: ワツチ族 ブルンジ人口構成は、85パーセントがツチ族、14パーセントがワツチ族、トワ族が1パーセント以下となっている。ここに書かれたワツチ族とは、このツチ族のことか。ツチ族は少数派の遊牧民だが、多数派の農耕民であるワツチ族を征服し従属させ、国王もツチ族から出ている。

*15: RAU〔アラブ連合共和国〕 1958年にエジプトとシリアが合併して誕生した共和国。同年イエメンを併せてアラブ連合を結成したが、61年、シリアのクーデターにより解体、以降、71年までエジプトがアラブ連合共和国を国名とした。

*16 : 『フランス＝ソワール』紙 1944年創刊のパリの夕刊大衆紙。

不在とその飾り付け役（続）

現代美術の運動はすべてを無に、沈黙に還元する方向に向かって歩んできたが、それと同時に、この解体の産物はますます多く利用され、いたるところに陳列され、「伝達され（コミュニケーション）」ねばならない。というのも、この運動は社会のいたるところに実際に打ち立てられてきた非—コミュニケーションを表現していた——そしてそれと闘っていた——からにほかならない。生の空虚は、今や文化の空虚で飾られなければならないのである。あらゆる既存の販売方法を用いて、人々はそうすることに精魂を傾けている。それらの販売方法は、他のほとんどどんな場所でも同様に、半—空虚を売りさばくのに用いられている。そのためには、すべてを無の満ち足りた肯定性——無は、それが存在する、すなわち、スペクタクルのなかで認められているという唯一の事実によって同語反復的に正当化されている——に還元することによって、現代美術の真の弁証法を隠す必要がある。それゆえ、新しさを喧伝されたこの芸術は、細部にいたるまで、公然たる剽窃の芸術であることに何の恥じらいもない。革新的な現代芸術と現在の世代とのあいだの本質的な違いは、〔後者が〕かつての反—スペクタクルをスペクタクルのなかに統合し、受け入れ、反復する点にある。反復に対するこうした趣向のためには、あらゆる歴史的評価を消滅させることが必要である。合衆国でネオ—ダダイズムが公認芸術になったのに対して、ダダイストのシュヴァイッターズ*1が彼自身の時代を思い起こさせることは非難されさえするのである。さらに、転用の批判的エクリチュールさえもが、いくつかの文学的通俗化の試み——もちろん「巻末（ヴォリューム）の参考文献」付きの——を経験しようとしている。だが、今日の文化の無の量（ヴォリューム）は、まったく別の終わりを保証しているのである。

何もないこと万歳！ 先月、合衆国を熱狂の渦に巻き込んだあのアイデア商品の噂を聞きましたか。それは、何の役にも立たないのが特徴でした。四角い箱に電球がはめ込んであって、どの方向にも点灯できるようにしたこのびっくりするような物は、とっても好評で、ストックが全部売り切れ、もうどこにも見つからなくなってしまいました。でも、この「ナッシング・ボックス」、この「何もない箱」のお値段は50ドル（200フラン以上）もしたんですよ。

『エル』誌、63年2月

戯曲の発表のたびに、とりわけ今年発見された『しあわせな日』*2の後で、ベケット*3が披を魅了している無を具象化し、沈黙に近づくため、次にどんなやり方で、手法と言葉をさらに節約できるだろうか、みんなの話題になってきた。しかしながら、『芝居（コメディ）』*4の合本には、この際限なき削ぎ落としがもはや信じられないほどにまで進んでい

ることが示されている。

『ル・モンド』紙、64年6月13日付

それを知っているべきだったのです。絵の衝動買いは危険だということを。初心者にとって、それはコレクションを始める最悪の方法です。一連の心理テストがそのことを証明したばかりです。人は自分に似た絵にしか愛着を抱かないのです。フランソワ・レシャンバック*5の次の映画の主演女優マリー＝フランス・ピジエ*6は、この理論を実践に移したTV番組「文化の店」で、1人の心理学者が浴びせる質問の集中砲火にさらされました。「あなたは食いしん坊ですか？ 赤い服を着ますか？ よく眠れますか？」等など。テストはとても説得力のあるものだったので、最初はサンジエ*7の絵に惹かれていたマリー＝フランスも、出て行くときはスーラージュ*8の絵を持っていました。

『マリー＝クレール』誌、1963年7月号

日本の大彫刻家、向井*9。最も有名な彼の作品は、プレス機で圧縮されたルノー4CV。それはいま、東京のある駅を飾っている。

エル』誌*10、63年8月9日号

あるヴァカンス団体の指導員は、この1月のために、とても魅力的なメニューを提供している。「すべて込みで350フランで1週間の山暮らし」というものだ。最初にこの知らせを読んだ時には、たいして驚かなかった。本当に驚くべきことは、「すべて込み」の内容である。飛行機旅行、快適な山小屋、10歳以下の子供の無料滞在、幼児の託児所を含むだけでなく、「有名人との出会い」まであるのだ。その手始めに、ル・クレジオ*11、というわけである。

アルフレ・ファーブル＝リュス*12、『アール』誌*13、64年1月1日号

団地の出現とともに、劇場建築は異なる意味を持つようになった。それは、もはや演劇の上演のためだけに作られた舞台と客席ではありえない。全体芸術が、照明技術は言うに及ばず、文学、絵画、音楽、建築まで介在させる以上、これからの劇場は、小都市の文化的催し物のすべて——演劇芸術、映画、テレビ、音楽、講演、ダンスなど——に適応した場所と見なされる。それは、ちょうど、建築家のP・ネルソン*14が詩的に「余暇の庭」と呼ぶもののようなものである。世界各地と同じように、フランスでも〈文化センター〉を建設する風潮は、これに端を発している。

『ル・モンド』紙、62年10月12日付

4年前から、全世界で数学的音楽家の世代の真の開花が見られる。わが国では、この種の研究は、政府からの実質的な援助を欠いているため、電気製品の大手メーカーに多少とも支援を受けた手間のかかる職人仕事の域を出ない。(.....)

このような状況の中で、ミシェル・フィリップ^{*15}の『三角形変奏曲』とピエール・バルボー^{*16}の『ノネット・イン・フォルマ・イン・トリアンゴロ』は生まれた。バルボーはまた、映画『深淵（アビス）』^{*17}の音楽を作曲するよう依頼を受けた。彼は、映像はまったく考慮に入れず、音楽を彼の持つガンマ60で計算した。伝統的な楽譜に書き直して演奏者に渡し、録音したのである。批評家たちはその音楽の美しさを称賛し、映画の成功に彼が大きく貢献したことを称えた。

かくして、ガンマ60は、今この瞬間にも、何キロメートルもの和声（ハーモニー）の課題を成し遂げている。それらは高等音楽学校（コンセルヴァトワール）で作られてきた作品以上に醜いわけでも美しいわけでもないが、規則に厳密に従っているという点ではこれ以上完璧なものはない！ それに、過去の作曲家の「癖」を定式化することもできるのだ。(.....)

運弓の不正確さや、現在の楽器のほとんどから出される音の不安定さもまた、機械から生まれた仮借ない論理を「実現する」には理想的ではない。この研究の成果を真の音響情報手段にするには、シンセサイザーの補完的利用がほとんど不可欠であるように思える。

だが、「計算された」音楽が、芸術観という点でわれわれを新時代に導くことは明らかである。すでに、わが音楽研究者たちは、電子頭脳によってもたらされた最良の成果を音楽と造形芸術の両方に同時に適用することを考えている。すでに、彼らは精神の分野での人間と機械との連携（豊かなものであることを願おう）を生きている。すでに、彼らは機械が「新しい構造をよりよく思考する」助けになることを力強く断言している。アブラハム・モール^{*18}とともに、テクノロジーの時代が到来したことを祝福しようではないか。

『フランス＝オペセルヴァトゥール』誌、64年5月21日号

荒れ狂う聴衆。それは、先日之夜、テアトル・ド・フランスでの「ドメーヌ」のコンサートでのことだった。(.....)

次に、カールハインツ・シュトックハウゼン^{*19}の『クラヴィアシュトック・X』が演奏されたが、同じ演奏者によるその演奏は本当の力仕事の様相を呈し、ボクシングのグローブをはめたソリストは、何ラウンドものあいだスタンウェイ〔のピアノ〕と格闘していた。ラウンドのなかにはひどく短いもの——和音を1つ、カー杯叩きつけるだけだ——も、数度におよぶ長い沈黙に隔てられているものもあったので、この『クラヴィアシュトック』は、ボクシングの試合の様子をすっかり備えたものになっていた。(.....)

とはいえ、こうした探求の果てには、本当に新しいものは何もなかった。拳で叩かれ、虐

待されたピアノはどうか？ それは、1926年から1928年ごろにかけての、『ルヴェ・ミュージカル』誌のコンサートですで見られたもられたものだ。クルト・シュヴィッターズのダダイスムはと言えば、それは1920年頃にトリスタン・ツァラが引き起こしたすばらしいスキャンダルを思わせるところがあった。

『ル・モンド』紙、64年3月25日付

このアメリカの展示は、地理的にはピエンナーレの外にある別館で行われたが、その全体が「ポップ・アート」の名で知られている反体制的なネオ・ダダの潮流に捧げられていた。それはどことなく、公式の展示の枠外にあるアメリカの祭典の観があった。

『ル・モンド』紙、64年6月19日付

私はシャン＝ピエール・ファイユ^{*20}の『アナログ』について話すべきだということを忘れてはいない。この本は、確かに、小説を名乗ってはいないのだが……。にもかかわらず、彼がわれわれに語ろうとしているのは、1つの物語だ、複数の物語だとさえ言える。そして、私は、彼がそのテキストに過去の作家からのカムフラージュされた引用——それらの出典は巻末にしか見つからない——を散りばめていることを喜んで受け入れる。

ギー・デュムール^{*21}、

『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌、64年6月18日号

意志と表象としての都市計画

凝縮され完成された資本主義である現代資本主義が生舞台装置（デコール）のなかに書き込むもの、それは、これまで疎外の正の極と負の極として対立していたものを、一種の疎外の赤道〔＝均衡点〕のなかに融合させるものである。そこへの強制的な居住は、ますます発展する犯罪予防的な警察によって管理される。ニュータウンは、スウェーデンのヴェリングビー^{*22}からイスラエルのベツソル^{*23}にいたるまで、この窒息しそうな社会の実験室である。ここでは、すべての余暇が、ただ1つしかない中心（センター）に集められることを約束されている。アビレス^{*24}の団地は、スペインを襲っている新資本主義の発展をただちに表現したものである。同時に、自由競争の資本主義と対になっていたかつての「都市のジャングル」——冒険においても、不快さと贅沢においても——の消滅はなおも続いている。パリの中心部は、自動車交通の組織化によって根本的に整備された（河岸は高速道路に、ドーフィヌ広場^{*25}は地下駐車場に変えられた）が、これと補完的に、都市のなかで孤立したいくつかの昔からの区域を、観光スペクタクルの対象や古典的博物館の単なる延長として修復し、一区域全体を歴史的建造物とする傾向もないわけではない。あらゆる種類の行政機関が、いたるところに、自分たちに合った形で自分たち

用の建物を建てている。カニジーにある新しい活動のための機関もその1つだ。この機関は、その巨大さにもかかわらず、現実の欠如に対応したあらゆる詐偽——すなわち、一般化の専門家ども——が引っ張りだこになるように、市場で引っ張りだこになるかもしれない。

それを全部買うのに、人はローンの助けを借りる。月々の支払いはしばしば大きな負担になるが、それでも支払いをする。今までなかったことだが、フランス人は、自分の住宅のためには喜んで犠牲を払うのである。パリ、マルセイユ、リール、ナント、トゥールーズ、あなたがどこに住んでいようと関係ない。それは同じように良い設備を持ち、同じ装飾を施された、同じ住宅である。事務員、石工、行政官、熟練労働者、誰の家にいようと、違いは感じられない。(.....)このようにして、明るく、陽気で、一様で、あらゆる社会階層に共通の生活スタイルが押し付けられる。私か書いているのはありのままの姿であり、何の政治的解釈も付け加えようとはしていない。ただ、前世紀にはブルジョワと労働者との間は深い深淵で隔てられていたことを思い起こしておくことだけは許してもらえらるだろう。(.....)今日、熟練労働者の賃金は教員の給与に近づいている。そして、誰もがHLM [=低所得者用の低家賃団地]に住むことができる。これは良いことなのか？ 悪いことなのか？ その判断は読者におまかせする。しかし、平均化は、高い水準でも低い水準でもなく、中間の水準でなされていることは事実である。

ジャン・デュシエ*26、『エル』誌、63年5月10日号

国際刑事警察機構（インターポール）の第32回総会が、水曜の朝、ヘルシンキの経済学大講堂で開幕した。(.....)この総会の期間中には、ストックホルムに数年前からすでに存在するものに似た「犯罪予防局」を加盟各国に設立することが検討される予定である。その目的は、警察官が開発し推奨したさまざまな犯罪予防技術を建築家やエンジニア、土木技師などの専門家に自由に使うことにある。

『ル・モンド』紙、63年8月22日付

カニジー団地（シテ）*27。それは、頭脳市場のためには、300億フランで作られた理想的な観測場である(.....)ラ・クロワ＝ソリエと呼ばれる場所にある巨大な掲示板にはこう書いてある、「国際一般化センター。最初の科学的実験都市、あらゆる分野の人間の総合と一般化の場所」。これはみんな、意味論地区です」、郵便配達の手は景色を大きく抱きかかえるようにして言った。

『レクスプレス』誌、63年8月22日号

*1: クルト・シュヴィッターズ (1878-1948年) ドイツのダダイストの画家・彫刻家。本書第2巻187ページの注を参照。1924年、ハノーヴァーの自宅に、釘・紙・布・廃品などの寄せ集め芸術である「メルツ芸術」を集大成した大規模な「メルツバウ」を建設した。

*2: 『しあわせな日々』 1961年9月17日、ニューヨークで初演されたベケットの戯曲。全2幕。第1幕では腰まで、第2幕では首まで円丘に埋まった50歳ぐらいの女性ウィニーと、その周囲で横たわり、あるいは四つん這いで歩きまわる60歳ぐらいの男性ウィリーとの2人の登場人物が延々と不条理な会話を交わす内容である。

*3: サミュエル・ベケット (1906-89年) アイルランド生まれのフランスの小説家・劇作家。38年以降フランスに定住し、最初は英語で、45年以降は主にフランス語で小説・戯曲を発表。代表作の小説『モロイ』(51年)と戯曲『ゴドーを待ちながら』(52年)で、ヌーヴォー・ロマン、アンチ・テアトルの先駆者とされる。69年ノーベル文学賞受賞。

*4: 『芝居(コメディ)』 1963年6月14日、ドイツのウルム・ドナウでドイツ語で初演されたベケットの戯曲。壺(実は骨壺)から首だけ出した2人の女と1人の男(実は死んでいるらしい)が、それぞれ自らの過去を告白するという内容。

*5: フランソワ・レシャンバック (1922-) フランスの映画監督・カメラマン。「カメラ・アイ」になった人間と言われるほど、緻密で突飛な撮影で知られる。作品に、アメリカを旅して撮られたドキュメンタリー『突飛なアメリカ』(58-60年)、グルノーブルオリンピックの公式記録映画でピエール・ルルーシュとの共同監督作品『フランスでの13日間』(邦題『白い恋人たち』、68年)など。

*6: マリー＝フランス・ピジエ (1922-) フランスの女優。レシャンバックのこの作品は、64年のピエール・グランブラとの共同監督作品『村のやさしさ——フランスの恋人たち』このことと思われる。

*7: ギュスターヴ・サンジエ (1909-84年) ベルギー生まれのフランスの抽象画家、単色の背景の上に植物的な有機体を喚起する線描的なイメージを描く。

*8: ピエール・スーラージュ (1919-) フランスの画家、キュビズムの影響を受け、カリグラフィックな刷毛さばきによる簡潔で構成的な抽象画を描く。

*9: 向井 向井良吉 (1918-) のことと思われる。向井良吉は画家・向井潤吉の弟で彫刻家

。51年に行動美術協会会員となり、同会彫刻部創設に参加。54・55年渡仏、帰国後「今日の新人1955年展」（神奈川県立近代美術館）で新入賞を受賞、60年、集団現代彫刻に参加、前衛彫刻運動を推進した。代表作に蠟型原型から直接鋳造する独自の技法を用いた『蟻の城』（60年）など。

*10：『エル』誌 フランスの女性月刊誌

*11：シャン・マリ・ル・クレジオ（1940-） フランスの作家、小説『調書』（63年）で有名となり、以後、短編集『発熱』（65年）、物語『洪水』（66年）など次々と実験的な作品を発表している。

*12：アルフレ・ファーブル＝リュス（1899-1983年） フランスのジャーナリスト・批評家。作品に『フランス日記』（62年）、『60億の昆虫』など。

*13：『アール』誌 1945年に『ボザール』誌を継いで創刊された文化週刊誌。50年代に誌面を充実させ、ルイ・ポーヴェルやジャック・ローランを次々と編集委員に迎えた。50年代末から60年代にはトリュフォーやゴダール、ビュートルやソレルスなども記事を書いたが、67年に終刊。

*14：ポール・ネルソン 米国の建築家ということ以外は不詳。

*15：ミシェル・フィリッポ（1925-） フランスの作曲家。ORTFで音響技師兼科学監督を勤めながら、同局の音楽部門の統括責任者。70年からはパリ音楽院の作曲科教授をしながら、セリー音楽を現代的に発展させた音楽を作曲している。作品に『ピアノ・ソナタ第1番』（47年）、『コンクリート音楽のエチュード第1番、第2番、第3番』（52, 58, 62年）など。

*16：ピエール・バルポー（1911-）フランスの作曲家。アルゴリズム音楽の提唱者で、数学的思考と技法を作曲に導入し、58年以降、コンピュータを用いた自動作曲を行う。作品に『7!』（60年）、『発見法的変奏曲』（64年）、『フレンチ・ガガク』（69年）、『ムジョーケン』（69年）など。

*17：映画『深淵（アビス）』 ニコ・パパタキス監督の1962年のフランス映画。ぶどう栽培農家で女中をする2人の姉妹は、3年前から給料を払ってもらっていなかったため、雇い主に訴えるが、雇い主の方は土地を売り払ってしまったために、姉妹は彼を殺害するという実際にあった話を元にした映画。この事件をもとにジュネが戯曲『女中たち』を書いたことでも知られる。

*18：アブラハム・モール（1920ー） フランスの社会学者・サイバネティクス学者。本書326ページの記事「サイバネティクス研究者との往復書簡」および326ページの訳注を参照。

*19：カールハインツ・シュトックハウゼン（1928ー） ドイツの作曲家。メシアン、ミヨーに師事し、ケルン放送局電子音楽スタジオでアイメルトと協力し、電子音楽の制作に取り組み、現代音楽に新しい分野を開く。その後、空間音楽の理論を展開、前衛音楽の第一人者となる。

*20：シャン＝ピエール・ファイユ（1925ー） フランスの小説家・文学理論家。文学ではフォークナーの影響を受け、政治的事件を主題として意識と言語と現実の関係を追求する一連の小説を書いた。連作〈ヘクサグラム〉を構成する『通りののあいだで』（58年）、『アナログ』（64年）、『水門』（64年）など6つの小説である。文学－言語理論ではロシア・フォルマリズムなどの影響を受け、言語と政治、語りと歴史の関係を『全体主義言語』（72年）、『物語の理論』（72年）などの重要な著作の中で解明した。ファイユは60年から64年まで雑誌『テル・ケル』の編集委員だったが、64年にそれを辞し、68年に自らの雑誌『シャンジュ』（82年終刊）を創刊した。

*21：ギー・デュムール（1921ー91） フランスの批評家。代表作に『フランス文学の10年』（59年）。

*22：ヴェリングビー スウェーデン南部、ストックホルムの北西16キロ、メーラレン湖に望む衛星都市。人口的2万5千。近代的な都市計画に基づいて建設され、1954年に完成した。

*23：ベッソル イスラエル南西部、エジプトのシナイ半島との国境付近を南北に走り地中海に到るベッソル溪谷に作られたニュータウンと思われる。ベッソル溪谷はガサ地区を横断している。

*24：アビレス スペイン北西部のビスケー湾に望む港町。人口約8万5千。元来、漁港で石炭の積出港だったが、近年、製鉄工場が発達。

*25：ドーフィヌ広場 セーヌ川に浮かぶシテ島の西の端、ボン＝ヌフ橋の東に建物で囲まれた三角形の閑静な広場。

*26：ジャン・デュシェ（1915ー） フランスのユーモア小説作家。代表作に『彼女と彼』、『ジュリエットに語るフランス史』など。

*27：カニジー団地（シテ） カニジーはフランス西北部ラ・マンシュ県の人口1000名以下の小村。ここに団地が作られたと思われるが詳細は不詳。

暴力に関する考察

既存の生活条件に対する反抗は、現在いたるところで見られる。それがまだ明確な計画や組織は持っていないのは、嘘で塗り固められた欺瞞的な古い革命政治が現在もなおその場所を占めているからである。この政治が失敗した——そして、抑圧的なその反対物へと反転してしまった——のは、この政治には、受け入れられないことと可能なことを、包括的に見極めることができなかったからだ。そしてまた、この政治が、受け入れられないことと可能なことをともに規定することもできなかった——その政治の残滓もいまだにそれを規定できないでいる——のは、その実践がごとく失敗に帰し、嘘に変じてしまったからである。革命のプロジェクトは、過剰にそれを行うことによってしか、やり直すことはできない。それにとって必要なことは、社会の変革からすべてを要求する新しい過激主義である。コーワ・ショイタニ*1の行為は、馬鹿げたものではない。社会は、その資源をテレビ・チャンネルの発展にでも、医学研究にでも、ほかのもっと突飛な研究にでも、選んで投資することができるのだから。「眼は人間的な眼となったとともに、その対象も1つの社会的な、人間的な対象、すなわち人間が人間のために生産した対象となった。(……) 五感の形成は、過去の全歴史の作品である」(マルクス、『1844年の草稿』*2)。

今日、スポーツとアイドルが、政治党派が結集しようとはもはや夢にも思わないほどの群衆を巢めているのは、すでにずっと以前から、政治によって集められた大衆とは、人を欺く偶像(アイドル)の前にいる受動的な観衆(スペクタトゥール)としての大衆にすぎなかったからである。だが、意味のない競争を観戦することにきっぱりと乗り移った観客たちは、そこで不満を感じている。リマでは、皮相なスペクタクルのなかでインチキがあっただけで、激しい拒否の眼を覚まさせ、華々しい(スペクタキュレール)インチキの全休を非難させるのに十分だった。このようにして、心理ドラマは、司祭たちが期待するような無知蒙昧化の機能を果たす前にきつと破産してしまうだろう。

クラクトン*3では、不良集団は特に地域住民を、大人たちの世界を恨んでいたが、それは、無償の破壊行為(ヴァンダリズム)というかたちで表現されていた。モルゲイトとブライトン*4では、はっきりしないさまざまな理由から、彼らは互いに抗争した。(……)はっきりと言えることは、「観衆(パブリック)」——テレビのレポーターとカメラマンに始まり、予告された暴力に恐れながらも惹き付けられた立派な大人のヴァカンス客たちも忘れてはならない——の存在がその役を十分に果たしたということである。すでに指摘している人がいるように、若者たちは自らスペクタクルになって見せたのである。

1年前から、トゥーロン*5の郊外に位置するセリネット地区の黒ジャンパーの不良たちは、70才の老婆、エルヴェ・コノー夫人を恐がらせることを決心していた。何年も前から未亡人で、1人暮らしの彼女は、土地の人がみな「お城」と呼ぶ、公園の真ん中にある快適な家に住んでいた。若者たちの一味の注意を引いたのは、まずその公園だった。草むらは、半ば秘密の待ち合わせや集会には都合が良かった。(.....)若い不良たちは、公園を占拠した後、お城の建物に攻撃を加えた。「ある朝、わたしは、あいつらが礼拝堂をすっかり壊してしまったのに気がつきました」と、老婆は語った。実際、家のそばには、半分廃墟と化した小さな礼拝堂があったのだ。「黒ジャンパー」は、夜の間、石を1つ1つ崩して、それを取り壊してしまったのである。

『フランス＝ソワール』紙、64年5月10日付

トゥアール*6近郊の重要な弾薬床を守っている第735弾薬補給中隊の若い兵士、ジャン＝マリー・ロネー——ドゥルー（ウール・エ・ロワール県）生まれ、21歳——は、倉庫とそこに収められている何千トンもの弾薬を爆破する計画を思いついた。シャルトルから盗難車で駆けつけるはずだった仲間が、パニックを利用して、トゥアールの中心のラヴォー広場にある相互銀行の支店の金庫に押し入ることになっていた。

『ル・モンド』紙、62年1月20日付

ここ数日で、大量の逮捕があった。カーン*7の大市。B・B〔ブリジット・バルドー〕の巡回。ラ・ゲリニエール*8とグラス＝ド＝デュウの一味。長距離バス発着所。いくつかの地下酒場では、少女たちがストリップをしている。未成年の非行少年少女たちは、20歳になって、重罪裁判所で再会する。(.....)V...一家は、ラ・ゲリニエールの4階を占めている。3つの寝室と、台所付きの居間が1つ。V...夫人は私に部屋を見せて、こう言った。「おわかりでしょう、冷蔵庫もテレビもあって、とても快適です。でも、いつも、息子は友だちと一緒に外に出かけなくてはならなかったんです。この頃は、息子たちは市に出かけていました。息子たちが悪いことをしていたとは、思いませんでした」。

『カーン週報』、1964年4月号

日本駐在米国大使のエドウィン・ライシャワー*9氏は、火曜日の正午頃、大使館の中庭で、19歳の日本人青年に右太股をナイフで刺された。大使は重傷を負ったが、命には別状はない。(.....)日本の警察によれば、襲撃者は精神異常者で、政治的動機から行動したのではなさそうである。19歳のこの青年は、コーワ・ショイタニという名前で、東京の南西150キロに位置する沼津に住んでいる。彼は、その行為によって、眼を病んだ人々への医学

的援助の不十分性に対して当局の注意を喚起したいと思ったらしい。「私は近視で、限を患っている人に国が便宜を図らないのは、アメリカの占領に起因する悪い政策のせいだ」と、この青年は警察の尋問で述べたらしい。

『ル・モンド』紙、64年3月25日付

アルジェでは、夜、ほろ酔い加減の者たちが群をなして、「酒を！ 女を！」と、要求書を大声で読み上げながら、旧イスリ通りを徘徊している。

ダニエル・ゲラン*10、『コンバ』誌*11、64年1月16日付

当局は、アルジェリアの大都市の舗道上でますますその数を増やしている「非行」少年に対する一斉取締りを開始しようとしている。すでに、去る12月1日に、ベン・ベラ大統領*12はこの「社会の欠陥」について示唆し、次のように叫んでいた。「われわれは、彼らの問題に取り組むつもりだ。FLN〔民族解放戦線〕は彼らを打倒するための一斉取締りを開始するだろう。彼らをサハラ砂漠のキャンプに送り込むために必要な処置を取る予定である。そこで、彼らは道路のための石を割る〔＝懲罰に処せられる〕ことになるだろう」。

『ル・モンド』紙、63年12月18日付

21歳の青年リツアルド・ブショルツは、2人の仲間とともに10月12日にポーランドの首都で警官を殴り重症を負わせたかどで、土曜日にワルシャワの法廷で死刑判決を受けた。（……）同日、ブロッツワフ地方〔ポーランド南西部の州〕のタデウツ・ワルカックは、商店に盗みに入っていたところを見つけた2名の警官と陸軍将校に猟銃を撃って重傷を負わせたという理由で、ジュリアン・クロールとともに死刑の判決を言い渡された。ブロッツワフ在住のクロールは、身分証明書の提示を求めた1人の警官にピストルで重傷を負わせ、凶器による襲撃を理由にすでに死刑判決を受けていた。（……）これらの判決の極端なきびしさは、ポーランドで猛威をふるっている強盗行為と青少年犯罪の流行に起因するものと思われる。

ワルシャワ発AFP、63年11月18日

ブルガリア共和国の検事総長のコミュニケが伝えるところでは、3人の「残忍なフリーガン*13」が銃殺された。このコミュニケは、「ブルジョワ的生活様式に魅せられた」3人の不良が犯罪を行った際の極端に残酷なやり方を強調している。

ソフィア発AFP、64年4月11日

死者350名、重傷者800名以上。これが、昨日リマで行われたペルー対アルゼンチンのサッカー試合の結果である。この試合は、南米プレ・オリンピック・トーナメントのために聞かれたが、突如として暴動に化した。それは、国立スタジアムに集まった4万5千人の観客の前で、ウルグアイ人の審判エドゥアルド・パソス氏が、アルゼンチン・チームのモラレスの自軍ゴールに対する得点を無効としたことに端を発する。(.....)観客席では序々に緊張が高まり、次第に険悪な空気になってゆく群衆の前で、審判は試合を中止する決定を下し、1対0でアルゼンチンの勝ちとなった。

すると、数百人の観客が柵をことごとく破り、グラウンドになだれ込んだ。警察は、その勢いに圧倒されて、催涙弾を発射し、空に向けて銃を撃った。

(.....)

スタジアムの門が突然、破られたときに、真の悲劇が始まった。その時、恐ろしい勢いで人々が門に押し寄せたのだ。数千人の観客が、女性や子どもを押し倒し、踏みつけて、通りを出ようと殺到した。人間の波は通り過ぎる時にすべてを押しつぶした。車はひっくり返され、火を付けられた。スタジアムの付近の多くの建物が略奪された。タイヤ工場と「競馬クラブ」、ほかに2軒の家と3台のバスが燃やされた。(.....)やがて、街の中心部では、興奮した熱狂的なファンの群れが、商店のウィンドーに投石し、車に放火し始めた。

『フランス＝ソワール』紙、64年5月26日付

利用可能な革命モデルのあいだの選択

スターリニズムがいくつかの互いに対抗する潮流へと分裂し、官僚主義の利害を、経済と政治のさまざまな発展段階（フルシチョフ、毛〔沢東〕、トリアッティ*14）の中に表現している現在、それら相互の非難の応酬の中にはっきりと暴言されているものは、非難する側でも非難される側でも、極左とか修正主義などといった、かつての労働運動の古い立場に依拠することはできなくなったということである。なぜなら、どれほど欺瞞的なものであっても、最低限の団結が失われてあまりに久しいからである。中国は核兵器を欲し、ロシアとの国境紛争を開始し、イスラエルの破壊を求めてその言動をエスカレートさせ、パキスタンやフランス、そしてモスクワのパルチザンを虐殺しているイラクに接近している。蜜月状態のなかでも最大のものは、ヴェルジェス*15が主幹の雑誌『レヴォリューション』*16と、おそらく今なお協調していることだ。ロシアはすでにその実力のほどを示した。トリアッティ＝エルコッリ*17もそうだ。これらの闘士たちすべての間の均衡は、結局のところ、40年来築き上げられてきた革命の歪曲の均衡である。それは、2つの陣営の共通の利害によって維持されているのである。スターリニズムで一枚岩になっていた時代には、東側を社会主義革命の唯一知られている例にしようとする東西共通の利害によって、この歪曲が永らえていたのと同じことである。西側は、スターリンの革命に対して、いかなる弱みも持ってはいなかった。彼らが、真の革命よりはまだしもスターリンの革命の方を好んでいたという点だけは別であるが。

北京で発表された新たな非難論文は、彼らがソ連指導部の「不名誉」と呼ぶものを断罪するためのものだが、今後も続く一連のもの最初の論文とされている。(.....)「そして、ハンガリーの反革命勢力がブダペストを占領した危機的な時に、彼ら(ロシア共産党指導部)は、しばらくのあいだ、降伏政策をとり、社会主義ハンガリーを反革命に明け渡すつもりだった」。中国の資料を信じれば、ハンガリーで状況が立て直され、強行な手段が採られることになったのは、北京の介入によるものである。

『ル・モンド』紙、63年9月7日付

アルジェでのアジア・アフリカ連帯会議で(.....)、中国への非難決議は出席国のゆうに3分の1の賛成を得た。(.....)しかしながら、フランスに対する言及が全くないことについて、どの国も気づいていた。フランスのガボンでの行動*18は、最近のアフリカでの帝国主義の現れの1つに引用されてはいなかったのである。

『ル・モンド』紙、64年3月25日付

共産党の週刊誌『リナスチタ』に掲載された記事で、トリアッティ氏は、社会主義者が政権に就けばその国ではすべてが変わるとネンニ*19氏が主張していると書いている。「それこそは粗雑で幼稚な議論である。(.....)われわれはそのような権力観を『スターリニスト』の権力観と呼ぶことができるだろう」と彼は断言している。

ローマ発AP、63年11月16日

最後のショー——司祭たちがそれを蘇らせる

教会は、聖なる背後世界の上に築かれた社会的スペクタクルの独占を防衛する一方で、あらゆる「スペクタクル」を長いあいだ攻撃してきたが、今や世紀のスペクタクルのなかに自分の場——限られたものではあるが重要な場——を確保しようとしている。教会は有益な譲歩を行い、スター法王を演出し、強制収容所の初歩的実験(プリミティヴィスム)が断念した実験を未だに行っている墮落した建築家を回収している。司祭たちの国際結社(インターナショナル)は、どこでも、どんな声色でも、声を上げることができる。異端審問所の生き残りの声色でも、野蛮な青年たちの中に降り立った者の声色でも。おまけに、彼らは「赤いキリスト教」の恐るべき奇形思想家や、今日の左翼の途轍もなく空虚な思想に守られた保育器の中でしか生きられないティヤール〔ド・シャルダン〕*20的突然変異体を生み出している(本書の「言葉とその使用者たち」および「数り散りの異議申し立て」の章の例を参照せよ)。しかしながら、世界中の異議

申し立てがまず何より宗数的な用語で提起されねばならなかった時代が終わって以降、非一正統派のキリスト教徒など、明らかに存在し得ないだろう。キリスト教はすべて、世界教会運動によって統一される以前に、すでに、理論的に統一されている。宗教批判を放棄することは、必然的に、あらゆる批判を放棄することの究極の姿である。

〈ナチによる披迫害ユダヤ人同盟〉資料センターの元所長で、現在、アウシュヴィッツ裁判に出席しているジーモン・ヴィーゼンタール^{*21}氏によると、「強制収容キャンプの死体焼却炉の建設者は、今でもオーストリアに生活し、つい最近、教会を建設した」とのことである。

『ル・モンド』紙、64年3月7日付

1963年12月4日、第2ヴァチカン公会議の第2会期の閉幕セレモニーの最中に、法王がパレスチナを訪問することを告げた時には、たいへんな驚きだった。(.....)カトリックのいくつかの陣営と、プロテスタントの全陣営のなかなら、この旅行が、多くの点で、予期せぬ不快なやり方で発表されるべきではなかったと嘆く声が聞かれた。これほどの無秩序な意見の表明を避けることはできなかったのか。アメリカ流のこの過度に鳴り物入りの発表を。セレモニーに大衆的な性格をまとわせることが望まれたという点は認めるとしても、広告技術の集中砲火からは守られるべきだったのではないだろうか。カメラマンも映画監督も多すぎた。

『ル・モンド』紙、64年6月20日付

近くヨハネス23世^{*22}の映画がエルマンノ・オルミ^{*23}によって撮られる。撮影は夏の終わりに始まるだろう。監督は、法王を1人の俳優の姿で登場させることに躊躇し、法王を見せるのにドキュメンタリー・フィルムを活用することを提案している。

ローマ発AFP、64年5月9日

フランスの教会は、日曜の3時課〔カトリックで午前9時頃の聖務〕の時間に行われる宗教礼拝を遅らせることを考えている(.....)。というのは、300万人のフランス人が、10時から12時までの間、〔サッカーの〕チケットを手に入れているからである(.....)。

『ウィーク=エンド』誌、64年2月22日号

「わが国の浜辺を創造した神は、浜辺が乱交パーティーの場となり、道徳心も羞恥心もない半裸の男性やビキニ姿の女性がわれわれの子供たちの純粋な眼を曇らせ、われわれの大人たちのなかに性的本能の炎を燃え立たせるようにするために、それを作ったのではない」と、カナリア諸島の司教アントニオ猊下が、司牧回状のなかで明言している。

『フランス＝ソワール』紙、64年5月10日付

142の教会を建設するのに、(.....)時が追っている。この壮大な作業は、もっぱらパリ市民の度量の大きさにかかっている。それゆえ、すべての者がその努力をわれわれの「教会建設者」の努力に大胆にも付け加えるよう願う。枢機卿の建設現場に石材を運ぶのを拒む者はいるまい。

フェルタン枢機卿の声明、64年4月23日

イギリスの不良青年の二大敵対グループである「モッズ」*24と「ロッカーズ」*25との間での新たな取っ組み合いの衝突が、土曜日、イギリス中部とロンドン郊外の多くの都市で起き、100名近くの逮捕が執行された。しかしながら、「ロッカーズ」たちは、皮製のバイク・ジャケットを着てライダー姿で飢餓撲滅運動を行っている牧師を助けたため、トラファルガー広場で、地区教会の教区主管者代理のオーステン・ウィリアムズ同胞から祝福を受けたのである。

『フランス＝ソワール』紙、64年5月26日付

*1：コーワ・ショイタニ 1964年3月24日に駐日米国大使ライシャワーをナイフで刺した19歳の少年。このすぐ後の『ル・モンド』の記事を参照。当時の日本の新聞では、容疑者が少年で精神疾患患者であったため、いくつかの新聞の第一報を除いて、名前は掲載されなかった。外国のプレスには名前が出されたが、間違っただスペルになっている 少年法の精神から、ここでそれを訂正することも、漢字を当てはめることもしないでおく。

*2：マルクス、『1844年の草稿』 『1844年の経済学・哲学手稿』のこと。邦訳『マルクス・エンゲルス全集巻40巻——マルクス初期著作集』真下信一訳、大月書店、461、463ページ。

*3：クラクトン イングランド南東部エセックス州の海岸リゾート都市。

*4：ブライトン イギリス、イングランド東部、イースト・サセックス州南部の同国最大の保養

都市。18世紀中頃から海岸保養地として発展し、現在では水族館や別荘、ホテル・娯楽施設が数多くある。

*5：トゥーロン フランス南部、パール県の県部の港湾都市、海軍の基地があり、海軍関係の工場・施設が多く、重工業も発達。

*6：トゥアール フランス中西部、ドゥー＝セーヴル県の人口約12万の都市。

*7：カーン フランス北西部カルヴァドス県の県都。オルヌ川河口の石炭の積出港で、重金属工業が発達。

*8：ラ・ゲリニエール フランス西部ヴァンデ県のノワールムーティエ島にあるリゾート村。人口約1300。

*9：エドウィン・ライシャワー（1910－90年） 米国の歴史家・政治家、東京に生まれ、39年ハーヴァード大学で博士号。42年以降、同大学で日本史を教える。61－66年、駐日大使を務めた。

*10：ダニエル・ゲラン（1904－88年） フランスの社会主義者・反植民地主義者。30年代に中東、インドシナを巡り、反植民地主義の立場を鮮明にして、社会主義労働者インターナショナル・フランス支部やフランス社会党で活動。戦後は、反植民地主義の活動家として、独立アルジェリアの自主管理を唱えたり、アナキストの組織〈絶対自由主義共産主義者運動〉に参加するなどの活動をした。著書に『ファシズムと大資本』（1936年）、『第1共和政下の階級闘争』（46年）、『ベン・バルカの虐殺』（75年）など。

*11：『コンバ』誌 1942年、第二次大戦占領下フランスで「レジスタンスから革命へ」の標語でレジスタンスの新聞として創刊されたが、戦後も、作家のアルベール・カミュを主幹として既存の政治の革新をめざす批評誌として発行され続けた。1974年廃刊。

*12：アハメッド・ベン・ベラ大統領（1916－） アルジェリアの政治家。1954年の独立革命戦争勃発時の指導者の1人であり、56年に逮捕されフランスに監禁された。62年3月に釈放されると、暫定政府メンバー（アルジェリアの独立は同年7月）との間で激しい権力闘争を展開したが、軍隊の支持を得て政敵を追放し、同年9月アルジェリア共和国首相に就任、翌年憲法を制定して初代大統領に選ばれた。

*13：フーリガン 元来は、ソ連や東側諸国で、反体制、反社会的態度をとる非行少年、不良のことを言う。現在では、サッカーなどの試合で暴れる青年たちを指すことが多い。

*14：パルミロ・トリアッティ（1893－1964年） イタリアの政治家。1921年のイタリア共産党の創始者の1人で、ファシスト政権下にはソ連に亡命、コミンテルン執行委員となる。44年、イタリアでのレジスタンス開始とともに帰国し、党書記長に就任、47年まで閣僚となる。56年には反スターリニズムの立場をとり、その年のイタリア共産党第8大会で「社会主義へのイタリアの道について」を報告し、後のユーロコミュニズムに道を開く革命路線を提唱した。

*15：ジャック・ヴェルジェス フランスの弁護士 アルジェリア戦争時にジャンソン機関に積極的に関係し、57年に、『恐怖の報酬』で有名なフランスの小説家ジョルジュ・アルノーとの共著『ジャミラ・ブーヒレッドのために』（FLNのために爆弾を運んだ容疑で逮捕され、拷問の末、有罪判決を受け処刑されたアルジェリア人の少女ジャミラを擁護する本）を発表したほか、60年のジャンソン裁判の弁護をしたことで知られる。

*16：『レヴォリューション』 1960年代初頭にヴェルジェスが発行した親中国派の雑誌、パリのカルチュ・ラタンの学生によく読まれた。

*17：トリアッティ＝エルコッリ エルコッリはトリアッティの筆名。第2次大戦中モスクワに亡命したトリアッティは、エルコッリの名でコミンテルン執行委員としてスペイン内乱を指導したことで知られる。

*18：フランスのガボンでの行動 中央アフリカのガボンは1960年にフランスから独立を達成したが、独立後の大統領レオン・ムバの親仏的態度（例えば国軍の上級ポストはフランス人将校に占められていた）や批判勢力に対する封じ込め政策に不満を持つ軍部の若手将校は、64年2月18日にクーデタを起こし、ムバを失脚させ、社会主義的な臨時政府を樹立した。これに対して、ブラサヴィルとダカール駐留のフランス軍が軍事介入を行い、2日後の20日までに臨時政府を解体させてムバを復権させた。

*19：ピエトロ・ネンニ（1891－1980年） イタリアの政治家。1921年来の社会党員で反ファシズム運動に活躍。戦後は、56年まで共産党と協力したが、それ以降は社会民主党に接近。63－69年に副首相。

*20：ピエール・テイヤール・ド・シャルダン（1881－1955年） フランスの古生物学者・人類学者・探検家にしてカトリックの神父。アジアやアフリカへの数多くの調査遠征で人類の化石を発見し、東アジアの人類史を研究、人類のアフリカ起源を提唱した。また、汎神論的な特異な宇宙生成論を展開し、教皇庁の異端審問機関から禁書扱いをされたことも知られる。著書に『人類の誕生』（56年）、『人類の未来』（59年）など。

*21：ジーモン・ヴィーゼンタール（1908－） 現ウクライナのリヴォフ生まれ、プラハで建築学を学んだ後、リヴォフの建築事務所で働く。第二次大戦中にドイツ軍によって強制収容所に送られるが、かろうじて生き残る。戦後、アメリカ軍に協力し、戦時期のナチスの戦争犯罪の証拠を収集、47年から、独自の団体〈ユダヤ歴史資料センター〉をオーストリアのリンツに開設、ゲシュタポの責任者でブエノスアイレスに逃亡していたアドルフ・アイヒマンの逮捕などの成果を上げる。61年から〈ユダヤ資料センター〉の名で、ウィーンを拠点に世界中の戦争犯罪人の追求を行う、77年に、ロサンゼルスに〈サイモン・ワイゼンタール・センター〉を開設し、以来、そこを拠点に人権の擁護と反ユダヤ主義の告発の活動を続けている。ワイゼンタールは英語読みの発音。元来はヴィーゼンタールと呼んでいた。

*22：ヨハネス23世（1881－1963年） 58－63年に在位した教皇。即位後、ヴァチカン公会議を開催。世界平和、教会合同、教会改革に努めたと言われる。

*23：エルマンノ・オルミ（1931－） イタリアの映画監督。ミラノの大企業に職を得た青年の無味乾燥な生活を描いた『イル・ポスト』（61年）の成功以降、イタリアのネオ・レアリズモの後継者としての地位を確立した。作品にカンヌ映画祭グランプリを獲得した『木靴の樹』（78年）、ヴェネチア映画祭銀獅子賞の『偽りの晚餐』（87年）など。ここで触れられているヨハネス23世の映画とは、65年の『そして1人の人間が来る』のことと思われる。

*24：「モッズ」 1963年頃からイギリスに出現した若いビート族。エドワード朝の衣装や髪型などを超現代風にアレンジして身に着けた少年少女たち。

*25：「ロッカーズ」 1960年代のイギリスで、革ジャンパーなどを着てバイクを乗り回した暴走族の若者たち。

散り散りの異議申し立て

壊滅寸前の左翼思想家世代の全員が、もはや服従の戯画的イメージとしてしか自分を示すことができないでいる。彼らは、スターリニズム——主として中国の——を、見込みのある仕方で何とか再生させることに身を捧げ、そこで、崇拜はするが理解はしなくてよいものから踏み付けられ、追い払われて喜んでいる殉牧者と同様の宗教的マゾヒズムを満たし続けるか、それとも、自分たちに差し出されたテクノクラートとしての成功（支配的社会組織への異議申し立てを、細部において、より緻密に行えるだけに、いっそう称賛に値するとともにいっそう手っ取り早い成功になるだろう）の華麗な姿に眼を見張るかのどちらかである。この組織は、その働きを改良し永遠のものとするために、社会を革命的—改良主義的に「1つ1つ」変えようとする異議申し立てを最大限に利用するだろう。異議申し立ての管理者、すなわち異議申し立てのがらくたの管理者がたちまち見つけた愚劣さの証は、すでに、抑圧と愚鈍化のシステムが最大の勝利を得たことを示している。ロワール＝アトランティック県の聖歌隊長マレ*1は、アンドレ・ゴルツ*2のひどくふやけた最新の盗作本のなかに、すべての前衛潮流が、あるいは、ただガルブレイス*3だけが、何年も以前から主張してきたいくつかの論拠を発見して感動している。その結果、彼のテクノクラートとしての自尊心は大きく膨らんで、経済指導者層への参加を公然と讃え、彼の幸福をあえて知ろうとはしなかったエンゲルスの未開性（プリミティヴィズム）を高飛車に非難するまでになっている。また、カルダン、〈神の王国〉の意味の賛否を問う投票は組織しないくせに、「革命を再開」するはずの彼の運動に対して、1910年の哲学教授たちを粗雑に偽造した反マルクス主義的な綱領をそのまま提示するのである。

〈APFC〔フランス—中国人民友好協会〕の実現のための委員会〉のメンバーは、いずれにせよ、中国側代表から認められることを望んでいないはずはない。しかし、彼らはとても頭脳明晰なので、「ノン」と言われた場合にも怒り出さないし、とても偉大なので、『ユマニテ』紙*4のように北京から泥の中に引きずり落とされた場合でも絶望に陥ることはない。彼らの目に最も重要だと映るものは、彼ら自身の仏中人民友好協会のささやかな計画の成功よりむしろ、どんなものでもよいから、同様の仏中人民友好協会の計画が成功することにある。

クロード・カダール*5、
『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌、64年2月13日号

「集団の活力」に関する現代社会学の理論に影響を受けて、バリーリオン協会の指導者たちはその理論の中に、教養課程で特にひどい学生たちの孤立を破る1つの手段を見出して

いる。つまり、自由な組織を作らせることによって、自分たちの問題と自分たちの要求を意識するよう彼らを導くのである。（……）大会は、「参加型アンケートの形式で行われる研究によって、学生たちに自分たちの問題に関心を持たせる可能性を研究する」目的で、UNEF〔フランス全学連〕とフランス学生共済会のメンバーを統合する研究センターを、国レベルでも地方協会レベルでも創設することに同意した。

『ル・モンド』紙、63年4月13日付

1958年のゴルツはまだ、現代の労働者の現実の全体も、単なる経済的な現実も知らなかった。（……）彼にとってもわれわれにとっても幸運なことに、彼は、生活の糧を稼がねばならなかった。そして、彼は、大週刊誌の経済欄を担当してそれを稼いだが、最初のうち、それは、私の想像では、彼の求めたものではなかった。だが、結局、エンゲルスが、1844年以来、自由主義的で市民的な知的生活を捨てて、あの「商売の犬」に身を捧げることを余儀なくされていなかったならば、彼はおそらく経済学を何も理解できなかつたろうし、若きヘーゲル学派の哲学者で彼の友人のマルクスにもそれを発見させることはなかつただろう。

哲学的分析こそが、労働関係の合目的性を再発見することで、政治理論家を「改革か革命か」という類の偽のジレンマから解放することを助けるのである。（……）

統合と闘うことは、まさに、「管理政策が練り上げられるベースとなる資料を奪い取り、経営者の決定を先取りし、各段階で自分自身の代案的解決策を提出する」ために闘うことである。そして、そのことによって、どのような「演説による異議申し立て」よりも有効に、資本主義的管理に異議を申し立てることができるだろう。（……）

社会設備の費用を資本主義に払わせることを手始めとする、消費の新しいモデルの創造のために闘うことは、資本から1つ1つ経済的力を奪い取ることをめざす、彼の推奨する革命的改良主義の主要な環の1つのように、ゴルツには見えるのである。

セルジュ・マレ、

『フランス＝オブセルヴァトゥール』誌、64年5月21日号

編集ノート——〈社会主義か野蛮か〉のメンバーのほぼ全員にとって、〈神の王国〉が実質的に意味を持たないということ、それと同時に、これらのメンバーは、考え方の異なる自分たちの同志の1人が、自分の意見を表明するのを妨げる理由をそこに見出さないということ、これらのことを喚起することはかろうじて有益である。

『社会主義か野蛮か』誌、第36号、1946年4月（85ページ）

マルクス主義者の歴史理論は（……）、最終的には、人間の性質は本質的に変化せず、その優勢な動機は経済的動機であろう、という隠れた公準に基づいている。

ポール・カルダン、『社会主義か野蛮か』誌、第37号、1964年7月

義務も制裁もなきモラルの粗描

「われわれの実験的時代がいまだに実験していない唯一の原料、それは精神と行動様式の自由である」（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第8号）。世界の統一性は、今日の抑圧的諸条件の統一性のなかに現れている。疎外のこの根本的統一性は、いたるところで、隔離、分割、一貫性の欠如、些事にこだわる管理（すべてのイデオロギーが同時に弱まるにつれて、そして、常にますます大量に、イデオロギーが生のそれぞれの細部を「プログラム」しなければならないにつれて、芸術の管理は必然的に権力の全般的管理に合流する）として表現されている。自由の一貫性にも、抑圧の一貫性にも、最初の運動として、個人のあらゆる一貫性の欠如を暴露することが必要とされる。この一貫性の欠如とは、自由の敵の避難所であり、その技術なのである。一例を挙げよう。中国の小学生が愛すべき5つのものは、「労働—家族—祖国」という標語にはっきりと表されているが、この標語はここでは主人＝パトロン（「人民」と呼ばれる）への愛から改良されたものである。レーモン・ボルド*6は、長年のあいだシュルレアリストによって守られた「良きスターリニスト」だったが、今や、シュルレアリスムと、より時事的ないくつかの指摘をとまなうかなり因襲的な文学的ユーモアとを混ぜ合わせたパンフレット（『解きほぐしうるもの』）を発表するまでに非スターリン化された。ボルドは労働と家族を嫌悪し、革命とエロティスムとが結合して実現されることよりほかに何も期待していないことを隠さない。その同じボルドは、同時に、親中国派の活動家でもある。愚かなのは誰なのか。ここから誰が結論を引き出すのか。

ケープタウンの裁判所は、南アフリカの35歳の白人ミュー・ジシャン、スタンレー・グレイサーと26歳の混血の女性歌手マウド・デイモンズに対する2枚の逮捕状を発行した。2人は白人と黒人もしくは混血との性的関係を禁じた不道徳法に違反したがどで告発されていた。2人の容疑者はベチュアナランド〔現ボツワナ〕の英国保護区に逃亡したが、そこからタンガニカにたどり着くことができるであろう。

『ル・モンド』紙、63年1月6日付

デンマークの若者は、今後、大人は立入禁止の自分たち専用のバーを手に入れる。それ

は「ポップス」というもので、英語の「パブ」という語と同じ意味である。そこでは、いろんなカクテルが飲めるが、すべてミルク・ベースのものである。ディスコは最新流行の音楽をかけてくれる。デンマークの若者は、朝10時から夜10時までそこに行くことができる。コペンハーゲンにそれが3店開かれているが、どれも異常な賑わいである。そこでは、少年や少女が議論し、宿題をし、とりわけ互いに再会することに満足している。

『フランス＝ソワール』紙、64年5月6日付

私は単に工業と農業の問題に対して権限があるだけではない。文化の問題にも権限がある。なぜなら、私は共和国の大統領であり、共産主義者同盟の総書記であるからだ。

ティトー*7、『ナサ・ステンパ』誌、1963年2月

ソヴィエトの文学記者たちは、つい最近、エフトゥシェンコ*8の模倣者である詩人ブロツキー*9が、放浪生活をしたとして告発され、法律第273号を適用されようとしていることに抗議しなければならなかった。この法律は、社会的寄生と怠惰を罰するために、1961年にソヴィエト最高会議幹部会によって採用されたものである。

『レクスプレス』誌、64年6月25日号

ソ連国内で有効な現行の身分証明書（不適切にも「パスポート」と呼ばれている）を労働手帳に変更するという提案は、ソヴィエトの新聞雑誌界のあいだにとっても大きな反響を生み、計画に好意的な多くの読者の投書が掲載された。「労働パスポート」となる新しい労働手帳は、誰もが身につけなければならないものだが、そこには、古いものに書かれていたよりもずっと細かい情報が書かれることになるだろう。学校の卒業資格、職歴の全段階、企業から企業への移動、職業的・道徳的態度、余暇期間中の「社会活動」などについて書かれるのである。

この差別は、新聞に投書する読者のなかでも重要な階層の人々の賛同を得ているように見える。すなわち、老齢の労働者と中年の労働者、とりわけ長期間、同じ企業で働いている人々である。この計画は彼らにとって有利なのである。新聞の解説を読む限り、優れた労働パスポートを持つこの労働者たちは、住宅、最高級のヴァカンス、社会保険の利率、裁判、種々の異議申し立てなどにおいて優先権を持つ市民になるだろう。『トラウト』紙の一読者はこう書いている、「婚約者たちが、彼らの将来の労働パスポートを一瞥することも悪くないだろう。優秀な労働者は優秀な家族の父親になるからである」。

『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌、64年3月12日号

これらの活動の多くは、コムソモール〔共産青年団盟〕の機関が古典的に組織していた活動と本質的に異なるものではない。ソヴィエトの新聞によると、それらを特徴づけるものは、青年「共産黨員」が自らその方式を決定するところにある。さらに、「青年共産黨員クラブ」が「率直な集会」を聞催し、そこで各会員のグループへの態度について議論する。（……）この自主管理の始まりは、少なくとも外見的には、西側の「社会心理学者」が没頭している研究と同じ方向の研究のいくつかを思い起こさせないこともない。

『フランス＝オブセルヴァトゥール』誌、64年6月4日号

「全エネルギーを中国の社会主義建設に捧げることができるよう」避妊手術を受けた中国人男性が、周忌来氏から公衆の面前で熱烈な祝福を受けたと、共産主義者青年同盟の月2回発行の機関誌『共産主義青年』の9月1日創刊号が報告している。（……）『共産主義青年』と、共産主義者青年同盟もう1つの機関誌『青年日報』は、さらに、出産制限の問題にかなりの紙面を割き、独身でありつづけたくないと強く望む場合でも、できるだけ遅く結婚することを奨めている。（……）共産主義者青年同盟はまた、独身で純潔を守り続ける決意を公言する青年男女の読者からの多くの手紙を公表している。

『ル・モンド』紙、63年9月18日付

道徳的、市民的、政治的教育は、小学校では偶然に左右される。そうした教育は教師の手本や、学校での生活スタイル——言わば、罰則のない——、ある種の労働宗教の結果としてなされ、礼儀正しさや道徳心はあらゆる瞬間の活動のなかに介入することになる。教師の任務は、実際的な仕方で「5つの愛」、すなわち人民、祖国、労働、国民的財産、両親への愛、を教え込むことである。

デシレ・ティ、『中国通信』（1963年、ベルギー—中国協会が配布）

内務省大臣は各県知事に通達を出し、「モノキニ」〔トップレスのこと〕の着用を許可する権限は市長にあるのではないことを喚起するよう依頼した。この水着は刑法第330条に規定されている公然猥褻罪の対象である、とフレイ氏は明言している。したがって、いかなる公共の場でもこの水着を使用する女性が訴追されるように、知事は各警察署の注意を喚起しなければならない。

『ル・モンド』紙、64年7月25日付

「すべてが続いてゆくと、私は認めざるをえない」（ヘーゲル）

現在、組織されているような生を拒否することが、アフリカの黒人やスカンディナヴィアの「絶えず」反抗している青年たちを、さまざまなレベルで特徴付けている。この2年間、実際には1度も途絶えたことのないストライキを行っているオーストリアの鉱山労働者、チェコの労働者についても同じである。ラゴス〔ナイジェリアの首都〕のストライキの「お祭り気分」は、1961年1月のワロニー〔ベルギーの南部のフランス語圏地域〕にも、ブダペストにも同じように存在してきた。いたるところで、新しい革命組織の問題が漠然と提起されている。そしてそこでは、支配社会が十分よく理解されているが、それは、あらゆるレベルで支配社会に抗して実際に行動するためであり、支配社会を再生産するのではまったくなく、それを完全に転用するためである。それは「光のなかに一挙に新しい世界の形を描き出す日の出」である。

アルゼンチンの共産主義青年のゲリラたちは、海賊放送によって技術革新を遂げた。彼らは、海賊放送によるニュース番組を放送したのだ！ 銃で武装した5人の若者が、昨日、アルゼンチンのニュース番組のオフィスに乱入し、カメラマンに強制してブエノスアイレスの中心街に共産主義者のプロパガンダを流させたのである。

『パリ＝プレス』紙、63年1月10日付

木曜日、マドリードで、テロリズム行為によって起訴されていた3名のフランス人学生が、特別軍法会議にによって、12年1日から30年の懲役別に処せられた。これらのフランス人の若者たちは、去る4月に逮捕された者たちである。元ジャンソン＝ド＝サイイー高校生徒で大学入学資格者のアラン・ペキュニア（17歳）は、バルセロナの船舶クイダード＝デ＝イビス号上で小型爆弾を爆発させた罪で12年1日の懲役2つの判決を受けた。オベールヴィリエ美術学校の学生ベルナル・フェリー（20歳）は、バレンシアのイベリア航空の会社の前に爆弾を仕掛け、2人の子供に軽傷を負わせた罪で懲役30年の判決を受けた。ヴィルフランシュ＝シュール＝ソーヌの哲学部学生ギー・バトゥー（23歳）は、マドリードで爆弾所持中に逮捕され、懲役15年の判決を受けた。

『ル・モンド』紙、63年10月19日付

オルフス〔デンマーク中部の港湾都市〕の港湾労働者とオーゼンセ〔デンマーク中部、フーン島の港湾都市〕の港湾労働者は、ドイツの貨物船ブランクスバーク号が運んできた南アフリカ産のピーナッツの荷揚げを立て続けに拒否した。そのため、同船はハンブルクまで行ってその荷を降ろさねばならなくなり、荷物はそこからデンマークまでトラックで運ばれることになった。コペンハーゲンでは、この新しい事件が、7月に判決が下った問題と同じ問題を引き起こすだろうと考えられている。その問題の結末は、同様の状況のもとで

スウェーデンの軍艦ロマラン号の荷揚げを拒否した港湾労働者が全員、罰金刑に処せられるというものであった。

『ル・モンド』紙、63年8月14日付

コロンビアで、コロンビア陸軍の3個大隊が、マルケタリア地方に向かって行軍している。マルケタリアは、完全に共産主義者勢力に支配され、コロンビア領内の一種の「独立共和国」となっているが、そこに、国家の権威を回復する目的である。この地方は、いかなる地図にもその名が書かれていないが、5000平方キロメートルの広さがある。それはトリマ州とフィラ州の間に位置する。

『ル・モンド』紙、64年5月21日付

その日、200名の海軍陸戦隊員の分遣隊がリオデジャネイロの冶金工組合の先頭に立って、1500名の冶金工と反乱水兵を排除しようとしていた。彼らが到着した直後の一瞬の沈黙の後に、「反乱者」のリーダーの25歳の背の低い冶金工が、バリケードの上からこう叫んだ。「同志たちよ、私は君たちを知っている。君たちの最大の願いが、ここに来てわれわれに合流することだということを知っている」。そして、彼の手の合図で、1500名の反乱者が海軍の讃歌「白鳥」を合唱し始めた。典型的な北方人の特徴を持つ1人の海軍陸戦隊員が、列から出て、弾帯を外し、武器を地面に投げつけて、建物の中に入った。194人の彼の仲間も、彼の行動に続く運命にあった。したがって、水夫たちの反乱は重大な結果を招くことになることが推察されていた。

『ル・モンド』誌、64年4月3日付

この春以降、全学連は、ポラリスを搭載したアメリカの原子力潜水艦隊の日本への寄港*10に反対する一連の行動を組織した。抗議行動は同時に日本政府に対しても行われたが、それは政府が最終的には日本の核武装を目的としてポラリスを受け入れることを決めているからである。この闘争における最も深刻な困難の1つは、日本共産党があらゆる機会をとらえて、闘争を反米運動に、すなわち「合衆国による日本の占領と支配」に反対するナショナルリスト的で愛国主義的なキャンペーンに変えようとしているところにある。もう1つの困難は、労働運動の指導部が、社会党の影響を受けて、労働者の現在の闘争を常に何らかの目的にねじ曲げてしまうことである。こうした困難にもかかわらず、さまざまな抗議行動が全学連の学生によって、日本中で繰り広げられ、彼らは、日韓交渉や、中国の核実験準備、タヒティでのフランスの核実験などにも抗議した。9月13日には、東京で、数百名の学生が外務省前で抗議行動を行った。全学連副委員長の高木徹*11が、抗議行動中に逮捕された。

(.....)

コンゴでは、不良青年たちが布教団宿舎を燃やしている。（……）コンゴ人の若者たちのグループは、3名から70名のメンバーで構成され、その年齢は14歳から20歳である。彼らは、ショート・パンツをはき、弓と矢、マチューテ〔大刀〕を持ち、なかには槍を持っている者もいる。日中は森の中で眠っていて、夕闇になると約束の場所に集まってくる。ゆっくりと走りながら移動して、それぞれとても離れたいくつかの場所を襲撃することもある。グループにはそれぞれ団長と書記と将校とがいる。（……）彼らのリーダーのピエール・ムレレ*13は、エジプトと中国でパルチザン戦争の戦術を学んだと言われているが、1961年に暗殺されたコンゴ政府のトップであったパトリス・ルムンバ*14に近い人物だった。若者たちのグループは非常に迷信深く、いつも、自分たちのボスが夜に移動する小型飛行機のことを話しているが、その飛行機は1人の入間を一瞬にしてある場所から別の場所に運ぶことができるのだと言っている。これらのグループはしばしば、一夜に30キロから50キロの距離を進む。彼らは自分たちの機動性を大いに誇張してはいるが。（……）彼らはお互いを「同志」と呼び合い、「われわれは泥棒ではない」と、たえず自分たちの正直さを言明している。（……）これは、いたるところで20歳未満の者たちを蝕んでいる危機との比較に耐えるように思われる。

『オブザーヴァー』紙*15、64年、4月19日付

5月1日、プラハで学生がデモ行進を行った。（……）金曜日の事件は、公式筋によると、三面記事に属するもので、政治的事件ではないということである。「フリーガン」と呼ばれる怠け者たちが歌を歌おうとしていたところ、騒ぎに惹きつけられたまじめな通行人たちが好奇心からそれを眺め、あるいは非難の声を上げただけのことである。西側の通信社の外電は、このデモは党の政策に反対する学生と高校生によって指導されたものだと伝えている。（……）チェコスロヴァキアの通信社CTKは事件の存在を確認したが、その重大さを何とか過小評価しようとして、次のように伝えた。「（……）指摘された2つの場所で、群衆の数は1500人を越えなかった。治安部隊のメンバーは観衆の力を借りて秩序を回復することに成功した。結局、31名のデモ参加者が投獄され、そのうち5名は若い女性だった。」

『ル・モンド』紙、64年5月5日付

とりわけラゴス〔ナイジェリアの首部〕では、ストライキ中のヨーロッパの都市の雰囲気とはまったく異なったとても奇妙な雰囲気につつまれていた。支配的な感情は喜びであり、祭りの気分であった。月7リーブルしかもらっていない者たち（警察犬には15リーヴルか

かるのに)が、自分に何ができるかを発見した。彼らはストライキにたいへん満足していたため、運動はすべて驚くべき上機嫌のなかで展開したのである。(.....)

E = R・ブロンディ、
『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌、64年7月9日号

黒人たちの側も、自らを組織している。ある刑事によると、何人かの暴徒は小型のラジオ発信器を待ち、それを使って警察の部隊の移動に関する情報を伝えていたかもしれない。2週間前に作られたハーレム「防衛評議会」議長のエプトン氏は、自分たちの組織が多くの細胞に分かれていると述べた。この網の目式の形態は「人々が警察に対して自らを防衛するのを助ける」ためのものである。「防衛評議会」は、さまざまなポスターを印刷させてきた。その1つには、最近1人の黒人青年を撃った警官ジリガンの写真の下に、「殺人容疑者」という文字が書かれている。

『ル・モンド』誌、64年7月26日付

猿の肌、アヒルの羽、椰子の葉、墓場から取ってきた造花、それがムレレ派の制服の主要要素であるように私には見える。しかし、独創性が排除されているわけではなく、金属タワシやタイプライターのリボン、クリスマスのボール飾りが優雅な装飾になっていることもある。(.....)

その瞬間、防衛隊の「シンバ」*16の1人が、2階のバルコニーで涼を取っている2人のヨーロッパ人を見つける。彼は、自分の力に酔って、フランス話でこう喚く。

——君たちは、自分が出頭を命ぜられていることを知らないのかね。さあ、ほら、降りろ。でないと撃つぞ！ 兄弟たちよ、これが革命なのだ！

2人の白人は命令に従う。私たちはみんな見つめ合った。それまで装っていた冗談ぽい口調や社交的会話の話し方は、塗料のように剥げてしまった。後に残っているのは、うんざりするような、油断のならない絶えざる不安だけだ。

——やつらは遊びでやってるんだ。と、誰かが悲しそうに私に言う。やつらはいつでも、人を殺すときでも、遊びでやっているんだよ。

Y = G・ベルジェス*17、「コンゴの奇妙な反乱者の間で過ごした1週間」、
『フランス＝ソワール』紙、64年8月4日付

S I は君たちにそれをはっきりと言っていた！

「自惚れに満ちた過ちがこんなにも混入しているからには、レネ*18のケースを再検討せざるをえない。(.....) 彼は、『ヒロシマ』をめぐる議論の際にアンドレ・ブルトンを参照したにもかかわらず、ロブ＝グリエ*19に一任することによって自分の力量のほどを正確に示したのである。(.....) ロブ＝グリエは、小説を破壊するには余りに遅きに失したが、それでもレネを破壊することにはなった。レネがスペクタクルのなかでも最も大袈裟で最も虫の食ったものに再び陥ったからには、次のように結論せざるをえない。すなわち、(.....) われわれ以外に、現代の芸術家は考えられないということである。」

ミシェル・ベルンシュタイン、
『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第7号

「私は、アラン〔・ロブ＝グリエ〕がシナリオも監督もすべて行った最初の映画が限りなく好きである。そして、それを『マリエンバート』*20に対置したり、あるいは、『不滅の女』*21が『マリエンバート』の一種の副産物であると思わせたりすることは、まったく空しいことである。(.....) 『不滅の女』について何が言われようとも、それは映画であり、映画でしかありえないものである。ロブ＝グリエは、まだまだほかの映画も作るだろう。とりわけ、私といっしょに。」

アラン・レネ、『レクスプレス』誌、1963年4月4日号

「『プラネット』誌を朗読すれば、口が臭くなるだろう」

『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第7号

「それは、ヌーヴェル・ヴァーグの誰もが認める議論の余地のない指導者である。(.....) 40歳を過ぎたのに、いまだに学生のように見えるこの青年は、自分が評価する作家たちに頼んだシナリオを尊重しながら、目立たぬ仕方でも映画を作っている。(.....) あのハリー・ディクソン*22は、スクリーンの上で、ファントマ*23やロカンボル*24よりもずっと常軌を逸した冒険を生きるだろう。『でも、観客に目配せすることはまったくないでしょう』と、まじめなレネは言う。彼は、われわれを夢幻境やシュルレアリスムの領域に確実に入り込ませてくれる。空想科学雑誌『プラネット』のジャーナリスト、フレデリック・ド・トヴァルニキが、そのシナリオに参加している。まさにサイエンス・フィクションが、レネの次の映画『ジュテーム・ジュテーム』*25のテーマとなるだろう。作者は、空想科学小説の作家で同じく『プラネット』誌のジャーナリストのジャック・ステルンベルグ*26である。

『フランス＝ソワール』紙、1963年1月23日付

*1: セルジュ・マレ (1927-73年) フランスの新言説の政治理論家。戦後フランス共産党に入党し、活動していたが、58年に離党し、『フランス=オブセルヴァトゥール』誌に協力。自ら他の離党者とともに〈共産主義トリビューン〉を結成、それを母胎に、60年にクロード・ブルデラとともに新左翼の統一を図り統一社会党を結成。マレはこの党の理論的指導者となり、社会主義研究センターを組織、多くの社会学者やさまざまな党派の活動家を集めて、60年代初頭に注目を集めたパンフレットを数多く出版した。マレ、C・ルフォール、マンデス・フランス、P・ナヴィルによる『労働者は経済を管理できるか』(61年)、マレ、ルフォール、モラン、ナヴィルによる『マルクス主義と社会学』(63年)などである。ここから「聖歌隊長」と、シチュアシオニストが揶揄しているのである。マレは、やがて、社会学によるマルクス主義の改造を主張し、大学で社会学を教えるようになるが、経済決定論を退け、新しい労働者意識による「自主管理」を唱えるその主張は、68年の1つの理論的背景となったと評価する者もいる。著書に『新しい労働者階級』(63年)、『労働者権力』(邦訳、77年)など。

*2: アンドレ・ゴルツ (本名ジェラルド・オルスト 1923-) ウィーン生まれのフランスの社会主義理論家・エコロジスト、1946年、亡命先のスイスでサルトルと知り合い、フランスに移る。『レクスプレス』誌(1955年から64年)や『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌などのジャーナリストをしつつ、60年の『レ・タン・モデルヌ』の創刊以来、サルトルとともにその共同編集者として活動。70年代にはエコロジー運動に関わり、最近もエコロジー派の代表的論客として発言している。代表的著書に『裏切者』(58年)、『歴史の教訓』(59年)、『エコロジーと政治』(75-79年)など。ここで「盗作本」と言われているものは『労働者戦略と新(ネオ)資本主義』(64年)のことと思われる。

*3: ジョン・K・ガルブレイス (1908-) カナダ生まれの米国の経済学者。戦前、米国政府の経済機関に勤めた後、49年以降、ハーヴァード大学経済学教授。リベラルの立場から米国経済を分析。著書に『アメリカ資本主義』(58年)、『新しい産業国家』(67年)、『不確実性の時代』(77年)など。

*4: 『ユマニテ』紙 1904年創刊のフランス共産党の機関紙。

*5: クロード・カダール フランスのジャーナリスト。著書に『中国での共産主義の高揚』(共著、83年)、『中国の戦略、あるいは龍の脱皮』(中島嶺雄との共著、86年)など。

*6: レーモン・ボルド フランスの映画批評家。元フランス共産党員で、50年代から60年代にかけて、反体制派の映画雑誌でシュルレアリストが多く協力した『ポジティブ』に参加した。著書に『アメリカのフィルム・ノワール・パノラマ』(79年)、『シネマテーク』(88年)など。

*7: ティトー (本名ジョシップ・ブローズ 1892-1980年) ユーゴスラヴィアの政治家、1920年来の共産党員で、37年に党書記長となり、第二次大戦中、民族解放軍・パルチザンの最高司令官として活躍し、戦後、首相・国防相などを経て、53年から大統領。スターリンに屈せず独自の社会主義路線を推進した。

*8: エウジェニー・アレクサンドロヴィッチ・エフトゥシェンコ (1933-) ソ連の詩人。1954年から63年にかけての雪解けの時代に、スターリニズムと大口シヤ主義、官僚主義を批判し、ヒューマニズムを擁護する詩を発表し、ソ連の若い知識人の間で持てはやされた市民性、国際性を信条とし、特にキューバ革命に賛辞を捧げ、数回にわたってキューバを訪れ叙事詩『わたしはキューバ』(63年)を発表、映画化された。これらの作品はロシア当局から自己過信、軽率という批判を浴び、63年にパリで出版した『早すぎる自叙伝』が、64年の文芸粛正によって槍玉に挙げられたが、生き延びて70年代から80年代に多くの作品を書き、86年以降のペレストロイカの中で積極的発言を行い、パ

ステルナークの復権などに尽力した。詩集に『未来の偵察隊』（52年）、『ジマー駅』（56年）、『バービー・ヤール』（61年）など。

*9: ヨシフ・アレクサンドロヴィチ・ブツキー（1940-96年）ロシアの詩人、15歳で学校に行くことを拒否し、独学で幅広い文学的教養を身につけた。ポーランド現代詩やジョン・ダン、オーデンなどの英米詩に傾倒し、58年頃から詩を書き始めるが、63年12月に「徒食者」として逮捕され、強制労働5年の判決を受け、北部ロシアの僻村に流刑となるが、ロシアの作家たちや西側の抗議によって1年半後に釈放。72年には国外退去処分により米国に亡命、マウント・ホーリヨーク・カレッジで文学を教えつつ詩を書いた。その詩風は、社会主義リアリズムとは無縁のもので、ロシア詩の伝統上まれな「形而上詩人」と評される。87年ノーベル文学賞受賞。詩集に『荒野の停留所』（70年）、『美しい時代の終焉』（77年）など、戯曲に『大理石』（84年刊）など。

*10: ポラリスを搭載したアメリカの原子力潜水艦隊の日本への寄港 1963年1月9日、ライシャワー駐日米大使が大平外相に原潜の日本寄港を承認するよう申し入れ、4月26日池田首相が衆院本会議で米原潜に便宜を与えるのは日米安保条約上当然のことに答弁したことに端を発し、全国で抗議行動がまき上がった。

*11: 高木徹 中核派と革マル派に分裂する以前からの革命的共産主義者同盟の指導者として有名だが、詳細は不明。

*12: 『前進』（国際版）誌 革敵的共産主義者同盟の機関紙。

*13: ピエール・ムレレ（?-1968年）コンゴの左翼ゲリラ指導者。1960年に始まったコンゴ動乱は、カタンガ分離独立系のチョンベが国連軍の攻撃の前に分離の終結を宣言して、63年1月に一応の幕を閉じたが、翌64年6月の国連軍引き上げ前後から、ムレレやグベニエら旧ルムンバ派の流れをくむ指導者たちのもとで反政府ゲリラ闘争が開始された。61年から63年にかけて中国に滞在、毛沢東思想の影響を受け、ゲリラ戦術を学んだムレレも、そうした指導者の1人で、63年以降、クウィール州にゲリラ基地をもうけ、64年から反政府武装闘争を開始した。この左派ゲリラの闘争は、一時キンドゥヤスタンレーヴィルを陥落させ、多くの地域を支配したが、チョンベの復帰による政府軍の建て直しによって65年には鎮圧された。

*14: パトリス・ルムンバ（1925-61年）コンゴの革命家。58年コンゴ民族運動を組織し、同年12月、ガーナのアクラで第1回全アフリカ人民会議に出席、帰国報告会がレオポルドヴィル暴動のきっかけとなる。60年1月ブリュッセル円卓会議に出席、コンゴ代表団を率いて独立を勝ち取る。同年6月、初代大統領となるが、ベルギーの再侵攻と米国を背景としたカサヴブ、モブツらのクーデタで失脚。12月も物に逮捕され翌月虐殺された。

*15: 『オブザーバー』誌 ロンドンの日曜新聞。1791年刊。

*16: 「シンバ」 64年のコンゴでの旧ルムンバ派左翼ゲリラ勢力の攻勢のなかで、ゲリラ兵士たちが呼ばれた呼称で「ライオン」の意味。彼らは、ゲリラに加盟するに際して胸部と前額部に傷を付け、「ルムンバの水」と呼ばれる水で洗礼を受ける魔術的な儀式を行い、不死身になったと信じて闘った。

*17: Y=G・ベルジェス フランスのジャーナリスト。著書に『今日のブラジル』（80年）、『タイランド』（80年）など。

*18: アラン・レネ（1922-）フランスの映画監督。カットバックやオフの声を多用した実験的な作品『ヒロシマ、わが愛』（邦題『24時間の情事』、脚本マルグリット・デュラス、59年）でカンヌ映画祭国際批評家賞を取り、大きな反響を得る。ヌーヴオー・ロマンの作家ロブ＝グリエの脚本を映画化した『去年マリエンバートで』（61年）は、ベルリン映画祭で金獅子賞を獲得し反響を読んだが、現在と過去、現実と幻想を錯綜させるその手法はレネ独自のものと言うよりもロブ＝グリエのアイディアに負うところが大きかった。

*19: アラン・ロブ＝グリエ (1922-) フランスの小説家。『消しゴム』(1953年)、『覗く人』(55年)などの小説によって、ヌーヴォー・ロマンの騎手とされる。アラン・レネ監督の映画『去年マリエンバートで』(61年)の脚本、自らが監督した映画『不滅の女』(63年)によって映画にも手を染めた。

*20: 『マリエンバート』 アラン・レネ監督、ロブ＝グリエ脚本、デルフィーヌ・セイリグ、ジョルジュ・アルベルタツィ出演の映画『去年マリエンバートで』(61年、94分)のこと。広大な城館で出会った男女をモチーフに、現在と過去、現実と幻想を交錯させながら、人間の意識の深層を描き出す。

*21: 『不滅の女』 ロブ＝グリエ監督、ジャック・ドニオル＝ヴァルクローズ、フランソワーズ・ブリオン出演のフランス映画。1963年、100分。イスタンブールで男が女に出会い、一緒に街を訪ね歩くが、ある日、女が突然姿を消す。男は彼女を探して術中を歩き、最後に、女は幽霊のようにして再び姿を現すという物語が幻想を交えて描かれる。

*22: ハリー・ディクソン オランダ生まれでフランス語で書いた小説家シャン・レイ(1887-1964年)の1930年発表の探偵小説『ハリー・ディクソンの冒険』の主人公。探偵のハリー・ディクソンが見習い探偵のトム・ウィリスとともに、さまざまな怪奇事件に巻き込まれ次々と解決するという内容で、100篇ほどから成る連作小説の形式を採っている。アラン・レネは60年代に、この小説を映画化する計画をたて、脚本まで書いたが、資金難などのため実現しなかった。

*23: ファントマ フランスの大衆小説家マルセル・アラン(1885-1969年)とピエール・スーヴェストル(1874-1914年)が最初(11-13年)は共同で、後者の死後はアラン単独で(19-63年)発表した連載物の冒険小説の主人公。ファントマは何度も漫画化・映画化され、フランスの国民的ヒーローになった。

*24: ロカンボル フランスの大衆小説家ポンソン・デュ・テラーユ(1829-71年)が59年から84年にかけてさまざまな新聞に連載した小説(『パリのドラマ』として84年に1冊にまとめられた)の登場人物で、第2帝政期のパリを闊歩して、冒険を行い、大衆の人気を博した。『ファントマ』などの大衆小説の原型となったことでも知られる。

*25: 『ジュテーム・ジュテーム』 アラン・レネ監督、ジャック・ステルンベルグ脚本、クロード・リック、オルガ・ジョルジュ＝ピコ出演のSF映画。68年、91分。自殺を試みたが失敗して生き返った女性クロードは、生死の間をさまよったその経験が時間旅行に格好の人間だとして科学者の実験台となり、タイムマシンに乗ることを引き受ける。1年前にタイムトラベルするはずが、機械の故障で、クロードは過去のさまざまな時点をさまようことになる。

*26: ジャック・ステルンベルグ(1923-) ベルギー生まれのフランスの大衆小説家。ユーモア小説やSF小説も書いた。作品に『完全なる商業秘書マニュアル』(60年)、『不可能における幾何学』(60年)、『ある平日』(61年)など。

1 「シチュアシオニスト」という語は何を意味するのか？

この単語が規定するのは、状況を作ろうとする活動であって、説明的な価値とか、何か別の価値として状況を認識しようとする活動ではない。しかも、それを、社会的な実践のあらゆるレベルで、個人史のあらゆるレベルで行なおうというものである。われわれは存在の受動性を生の諸契機の構築に、疑いを遊びの肯定に置き換える。現在まで、哲学者と芸術家は、状況を解釈することしかしなかった。今や、問題は状況を変革することなのだ。人間は、自分が通過する状況の産物なのだから、人間的な状況を作り出すことが重要である。個人はその状況によって規定されるものなのだから、自分の欲望にふさわしい状況を作り出す力を欲するのである。この観点から、詩（状況における言語活動の成功としてのコミュニケーション）、自然の専有、完全な社会的解放は、1つに溶け合い、実現されねばならない。われわれの時代は、現象学がそれを記述することに喜びを見出してきた限界状況の固定された境界を、状況の実践的創造に置き換えようとし、その境界をわれわれの実現する歴史の運動によって常に移動させようとしている。われわれが望んでいるのは〔現象学（フェノメノロジー）ではなく〕現象実践（フェノメノ・プラクシス）なのだ。それが、やがて、この時代のありうべき解放の運動の初歩的な当たり前の事実になることを、われわれは信じて疑わない。状況のなかに置くべきものは何か？ レヴェルはさまざまだが、それはこの地球かもしれないし、あるいは時代（例えば、ブルクハルト*1の言う意味での文明）や、個人生活の一瞬間かもしれない。さあ、始めよう！ 過去の文化の諸価値も、歴史において理性を実現しようという希望も、これよりほかの帰結を持ちえない。ほかのものはすべて崩壊する。S Iのいう意味でのシチュアシオニストという言葉は、現在ポルトガルで「シチュアシオニスト」と呼ばれているもの、すなわち、既存の状況の支持者——ゆえにあそこのサラザール主義者*2——とは正反対の意味をもっている。

2 シチュアシオニスト・インターナショナルは政治運動なのか？

「政治運動」という言葉は今日、党员たちの組織された受動性から自分たちの未来の権力の抑圧的な力を汲み取っているグループや党派のリーダーの専門化された活動を包含している。S Iは、どのような形であれ、位階秩序（ヒエラルキー）化された権力とは共通点を持ちたいとは思わない。したがって、S Iは政治運動でもなければ、政治的韜晦の社会学でもない。S Iは、国際的な革命意識の最高段階となるつもりである。だから、S Iは、プロレタリアートの新たな輪郭を規定する創造性の徴や拒否の身振り、解放への不屈の意志を照らしだし、連携させようと努めるのである。大衆の自発性を軸にして展開するこのような活動は、まぎれもなく政治的である。扇動者たち自身にそういう性格を認めないというのでない限り。新しいラディカルの潮流が日本（全学連運動の極左）やコンゴやスペイン（地下組織として）に現れてきているのに応

じて、S Iは彼らに批判的支持を与え、実践的に彼らを援助しようと努力している。しかし、S Iがめざしているのは、専門化された政治のいかなる「過渡的な綱領」にも反対して、日常生活の恒常的な革命を行うことである。

3 S Iは芸術運動なのか？

消費社会に対してなされたシチュアシオニストの批判の大部分は、次のことを示すことにある。つまり、どれほど現代の芸術家が、1910年から1925年に至る時代の、完全に活用されたとは言えないにしても、少なくともそこに含まれていた乗り越えの豊かな可能性を見捨てて、その大半は商売をするように芸術をすることを余儀なくされたかということである。それ以来、芸術運動は、決して起きることはなかったにもかかわらず、社会の諸構造を脅かしてきた——今なお脅かしている——爆発が想像の世界にもたらした余波にすぎない。このような放棄とその矛盾する諸結果（空虚と、初期暴力への回帰の意志）を意識することによって、S Iは、芸術（アール）の生き延び〔=余りの生〕を生（アール）のなかに取り込みながら、真の芸術家の計画に答えうる唯一の運動たりえている。われわれは、単にもはや芸術家ではないということによって芸術家なのである。われわれは芸術を実現するためにやってきたのである。

4 S Iはニヒリズムの表明なのか？

S Iは、みんながわれわれに与えようと躍起になっている、解体のスペクタクルの中での役割を演じることを拒否する。ニヒリズムの彼岸に達するには、スペクタクルの解体を通り抜ける必要がある。そして、それこそS Iがなそうと思っていることなのだ。このような展望の外で入念に練り上げられ作り上げられるものは、すべてS Iの手を借りずとも自ずから崩壊する。しかし、消費社会のいたるところで、自発的崩壊によってできた空き地は、新しい価値に実験の場を与えるが、S Iは、この実験の場なしではいられないというのも事実である。われわれは、スペクタクルの廃墟の上にしか構築できないのだ、他方、全面破壊という完全に正当な予測は、構築を余儀なくするが、その構築は全体性に鑑みてのものでしかありえない。

5 シチュアシオニストの立場はユートピア的か？

現実にはユートピアを凌駕する。現在の技術的可能性の豊かさと、あらゆる種類の指導者による、その利用の貧しさの間に、もはや想像上の橋を架ける必要はない。われわれは、革命時に、いたるところで大衆がそうしようと努めるように、物質的設備をあらゆる人々の創造性に委ねたいと思っている。それは、調整の問題、あるいは、こういって良ければ、戦術の問題である。われ

われが取り扱うものはすべて、人々がわれわれの探究方法や活動方法を実行し始めさえすれば、今すぐにも、あるいは短期間のうちに、実現可能である。

6 このように「シチュアシオニスト」と名乗ることが必要だと思うか？

物が人間に取って代わる現行の体制においては、いかなるラベルにも危険がともなっている。しかしながら、われわれが選んだラベルには、簡潔であるとはいえ、それ自体に対する批判が含まれている。つまり、それは、他人がわれわれのために選んでくれる「シチュアシオニズム」というラベルに対立するのである。それに、われわれ1人1人が、プロレタリアートの目的のために戦うプロレタリアではもはやなく、完全なシチュアシオニストになった暁には、このラベルは消滅するであろう。さしあたり、いかにくだらないラベルであろうとも、それはかつての不統一と新しい要求の間に区切りをつけるというメリットがある。ここ数十年来、知性に最も欠けていたのは、取りもなおさず切れ味であったのだから。

7 明確に定義されたグループとしての、シチュアシオニストの独創性は何か？

われわれが理論家と実験家から組織されたグループとして持っていると自負する重要性は、3つの特徴から説明できると思われる。第1に、われわれは初めて、現在発展しつつある社会に対して、革命の観点から首尾一貫した新しい批判を行なっている。この批判は、この時代の文化と芸術に深く根差していて、その鍵を握っている（当然ながら、この作業は完成にはほど遠い）。第2に、われわれは、われわれにそれを余儀なくさせる人々とは、完全かつ決定的な絶縁を行なっている。しかも、つぎつぎと。さまざまな種類のあきらめが微妙に絡み合い、関連している時代において、これは貴重である。第3に、われわれは「同志たち」と新しいタイプの関係を始めている。われわれは弟子を絶対に拒否する。われわれは最も高いレベルでの協力にしか興味がない。そして、自立した人間を世界に放つことにしか関心がない。

8 どうしてS Iは話題にならないのか？

壊滅状態にある現代思想の専門的所有者たちの間では、それはかなり頻繁に話題になっている。しかし、それについて書かれることは非常に少ない。最も広い意味で言えば、それはわれわれが「シチュアシオニズム」という言葉を拒否しているからである。この言葉はわれわれを支配的なスペクタクルの中に導入することのできる唯一の範疇であり、われわれの意に反して、硬直した教義という形で、マルクスのいう意味でのイデオロギーという形でわれわれをそれに統合しようとするのだが。われわれが拒否しているスペクタクルが、われわれを拒否するのは当たり前で

ある。個人としてのシチュアシオニストについては、もっと好んで話られるが、それは全体的な異議申し立てから1人1人を切り離すためなのだ。そもそも、この異議申し立てがなければ、彼らは「興味深い」個人ですらないだろうに。シチュアシオニストでなくなったとたんに、シチュアシオニストは話題になる（いくつかの国では、「ナッシュ主義」に対抗する変種の数々が、厚顔にもS Iとの何らかの関係を主張するという、たった1つの共通の名声を博している）。スペクタクルの番犬たちは、そうとは言わずにシチュアシオニストの理論の断片を取り上げて、われわれに逆に差し向ける。彼らは、スペクタクルの生き延び〔＝余りの生〕をかけた闘いのために、当然にも、シチュアシオニストの理論から着想を得る。それゆえ、彼らはその出所を、言い換えれば、そのような「アイデア」の首尾一貫性を隠さなければならないのである。それは単に盗作者の虚栄によるものではない。それに加えて、優柔不断な知識人の多くは、あからさまにS Iのことを語る意気地がないのである。なぜなら、それについて何か言うということは、最小限の態度決定をとまなうからだ。つまり、そこから取り入れるものの見返りとして、拒否するものをはっきり言わなければならないのである。大勢の者が、さしあたって無知を装っておけば、あとになって責任が無いと言えらると思っっているようだが、大きな誤りである。

9 革命運動にはどのような支援を与えているのか？

不幸なことだが、そのようなものはない。確かに社会はたくさんの矛盾をかかえていて、変化しつつある。このことは、常に新しいやり方で、革命的活動を可能かつ必然的なものにするが、今のところ、それは、組織された運動の形では、もはや、あるいは、まだ、存在しない。したがって、問題はそのような運動を「支援する」ことではなく、それを作り出すことにある。それを規定し、それと切り離すことなく、それを実験することにある。革命運動が存在しないと断言することは、そのような運動に向かう、欠くことのできない最初の身振りである。他のことはすべて、過去の下らない取り繕いにすぎない。

10 マルクス主義者なのか？

「わたしはマルクス主義者ではない」と言ったマルクスとちょうど同じくらいそうである。

11 あなた方の理論と実際の生き方には関係があるのか？

われわれの理論は、われわれの現実生活の理論、そこにおいて実験されるか発見されるかした可能なものの理論に他ならない。新しい事態が生じるまで、自由に使える活動の場がどんなに細分されていようとも、われわれはそこで最善を期して行動している。われわれは敵を敵として取

り扱う。これは、思想の速修手段として、われわれがあらゆる人に勧める最初の一步である。それに加えて、われわれは、もちろん、風俗の自由のあらゆる形、ブルジョワや官僚主義の悪党どもが放蕩と呼ぶものすべてを無条件に支持する。われわれが日常生活の革命を禁欲生活によって準備する、などということは当然ありえない。

1 2 シチュアシオニストは余暇社会の前衛なのか？

余暇社会とは、社会的時空間のある種の生産—消費を覆い隠している見せかけである。もし、本来の意味での生産的な労働時間が短縮するならば、産業社会の予備軍は、消費において働くことになるだろう。ヴァカンス産業、レジャー産業、スペクタクル産業においては、全員が、次々に、労働者となり原材料となるのである。既存の労働は、既存の生活のすべてである。消費の組織化、さらに余暇の組織化は、正確に労働の組織化と均衡しなければならない。「自由時間」は、あらかじめ作られた時間の流れにおける皮肉な尺度である。厳密に言って、この労働はこの余暇しかもたらさないだろう。それは、暇のあるエリート——実際は、ますます、暇が半減してきているが——にとっても、一時的なレジャーに何とかありつく大衆にとっても同じである。どんな鉛の障壁も、疎外された労働がまき散らす放射能から、時間のかけらや、社会のかけらの完全な時間を隔離することはできない。たとえ、すべての製品と社会生活を、他のやり方ではなく、まさにこのように生産しているのは、この疎外された労働であるという意味にしても。

1 3 誰が資金を出しているのか？

われわれは、現代の文化の経済構造においてわれわれ自身の仕事から資金を得たことを除けば、ごく一時的な形ででも決して他人から資金を得たことはない。この仕事は次のような矛盾の下にある。つまり、一方で、われわれは非常に創造力があるので、ほとんど確実にすべてにおいて「成功する」ことができる。他方、われわれは、われわれの計画と現在のわれわれの作品1つ1つの間に完全な一致を求め、厳密な独立性を要求するので（反シチュアシオニスト的な芸術作品の定義を参照のこと）、非常に付随的な取引においてさえ、文化を支配する組織にとっては、ほとんど全く受け入れられないのである。われわれの資金状態は、この要素から由来する。この件に関しては、当誌第8号の「ナチストの企てには決して不足することがない資本」についての論説（26ページ）と、それとは逆の、われわれの〔経済〕条件（その号の最後の頁）を参照すること。

1 4 何人いるのか？

シエラ・マエストラ山中のゲリラ*3の当初の中核メンバーよりは少し多いが、武器は彼らより少ない。1864年に、国際労働者協会を設立するためにロンドンに集まった代表たち*4よりは少し少ないが、もっと首尾一貫した綱領がある。テルモピュライ*5のギリシャ人たち（「行きずりの人よ、ラケダイモン〔スパルタの別名〕に行って伝えよ……」）と同じくらい意志堅固だが、もっと明るい未来がある。

15 どんな価値を質問表に付与し得るか？ とりわけ、この質問表に？

明らかに、問題は、今日、スペクタクルへの統合のためのあらゆる心理テクニックとともに、妄想のようにつきまとうようになった、偽の対話形式にある（「参加」という安っぽい活動のお粗末な偽装の下で、楽しげに引き受けられる受動性）。しかし、われわれはとりとめのない物象化された疑問文から出発して、正確な意見を主張することができる。事実、これらの意見は、質問に差し向けられていないという点で、「答え」になっていない。これらの意見は質問を送り返すのである。これらは、質問を變形させるような回答である。したがって、本当の対話はこれらの回答の後に始まるかもしれない。この質問表の中で、すべての質問はにせものである。だが、われわれの回答は本物である。

*1：ヤコブ・ブルクハルト（1818－97年） スイスの美術史家・文化史家。ニーチェの友人で、ギリシャとルネサンスの美術に関する壮大な美術史・文化史の体系を樹立した。作品に『イタリア・ルネサンスの歴史』（1860年）、『ギリシャ文化史』（全4巻、98－1902年）など。

*2：サラザール主義者 アントニオ・デ・オリベイラ・サラザール（1889－1970年）はポルトガルの独裁者。33年にファシズムとカトリック精神を基調にした憲法を公布、家族主義・組合主義的な保護・統制によって独裁川を実現。68年まで政権の座にあった。

*3：シエラ・マエストラ山中のゲリラ 1956年12月、キューバ革命のためにメキシコから「グランマ」号でキューバに上陸した82名のゲリラのうち、バティスタ軍の攻撃で多くが捕らえられ殺害されたが、生き残った30名のうちフィデル・ガストロら20人あまりがシエラ・マエストラ山中に集結し、そこから新しい闘争が開始された。

*4：国際労働者協会を設立するためにロンドンに集まった代表たち ロンドンに亡命中のマルクスらが中心になって1864年に結成した国際労働者協会（俗称、第1インターナショナル）の最初の総評議会には英・仏・伊・独の代表34名が集まった。

*5：テルモピュライ ギリシャ中東部、フティオーテス州中部の峠。古来重要な峠として知られ、ペルシア戦争時、打ち寄せるペルシャ軍に対して、スパルタ王レオニダスが300名の犠牲者を出しながら死守したことで有名。

*1

以下に挙げる抜粋は、心理操作と権力の専門家の滑稽な隠語のなかに組み入れられた、われわれの展望の、さらに、時には、われわれの表現の、転用の試みの良い例である。そこには、質が欠けていることは、誰の目にも明らかだ！ 愚行のありとあらゆる心理テクニックが、ポストーダダの時代（あるいは、ポストーピランデッロの演劇*2）のごみ屑を回収するために用いられている。要は、どうあっても人々を従属システムに統合することなのだ。たとえ、それが、人々に、抽象的な「参加」を要求させることになっても。参加とは、スペクタクルを否定するどころか、支えるものである。したがって、気難しい人には、好みに合わせて、殺菌された新政治組織のサイコドラマ（今年は『社会主義か野蛮か』）とか、無味乾燥な芸術的スキャンダルへの統合が準備されるだろう。現代のスペクタクルは絶えず新たな用途を生み出している。現在、スペクタクルへの参加の最大の極めつけは、参加のスペクタクルを上演しているこうした阿呆ともによって提供されている。

「『プレイ・ガールズ』は、まったく奇抜なおもしろさのある、半分即興の見せ物（スペクタクル）である。非常に柔軟なシナリオのおかげで、脚本兼演出家のマルク・オー*3は、役者たちによって観客に提供される巨大なケーキを客席に飛び入りさせることによって、観客に能動的な役割を演じさせることに成功した。」

マルク・ピエレ*4

『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌、1964年1月30日号

「今ここは、真に革命的な演劇を確立するための十分条件はどのようなものか探求すべき場ではない。また、それがなお演劇であるのかと問うたり、文化の瓶詰めによって風味を失っていない作品を今日どのようにして上演するのかと問うたりする場所でもない。（……）本当の問題は、スペクタクルの制度的な指向性である。そして、前衛であれ何であれ形式的手法の単なる利用によって、それが解決できるチャンスは、ほとんどないか、あるいはまったくない。（……）」

参加のスペクタクルは、実験という名目で、今すぐにも、組織されうるだろう。その劇団を構成するのは、劇作家のみならず、社会心理学者や、『ハプニング』の経験のある芸術家や、役者、さらには、劇場を人間性の解放のための生き生きとした体験の場にすることをめざす何らかの人たちである。」

マルク・ピエレ、

『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌、1964年3月5日号

「自主管理の問題は、UNEF〔フランス全学連〕のイデオロギー的問題系の中心にある。これからの討論の間に、役者と観客の関係の現在の意味を明らかにし、疎外からの本当の解放という見地からその批判を確立することが重要となるであろう。

実際、問題は、UNEFの文化政策が、学生に割引料全て消費の演劇に行くことのできる切符の配布を続けることにあるか、あるいは、ニースの学生によって企てられたような、集団制作の演出による運営参加の演劇に問する、まったく心踊らせるような探求のスタイルの提唱に向かうかどうかを知ることにある。後者においては、スペクタクルの上演は、次の集団的な解明作業を始める前の最終結果にすぎないのである。

次に重要なニュースは、第1回国際サイコドラマ大会が、8月31日から9月3日にかけてパリ大学医学部で開催されることである。この大会の名誉会長はモレノ*5であるが、彼は、戦前、米国で最初のサイコドラマの開拓者であった。自主管理とサイコドラマは、革命的演制作法の制作の出発点として、非常に確実な基礎であるように思われる。」

マルク・ビエレ、

『フランス=オプセルヴァトゥール』誌、1964年3月26日号

*1：純正ムース La mousse contrôléeの訳だが、「管理された泡」、「管理された糞」の意味もかけてある。

*2：ポスト・ピランデッロの演劇 ルイジ・ピランデッロ（1867－1936年）はイタリアの劇作家・小説家。『作者を探す6人の登場人物』（21年）で用いた「劇中劇」の手法などの前衛的な作風で現代演劇に大きな影響を与えた。ポスト・ピランデッロの演劇とは、イヨネスコやベケットなど、50年代から60年代にかけて発展した不条理演劇を指す。

*3：マルク・オー（本名マルク＝ジルベール・ギョマン） フランスのレトリスト。1950年以降、レトリストの積極的な活動家としてさまざまな示威行動に参加。特に映画への関心が深く、レトリストの映画雑誌『イオン』を編集するとともに、「核映画（シネマ・ニュクレール）」と名づけた映画を製作。1954年のレトリスト・インターナショナル結成の時には、ドゥボールとイズーのどちらの側にも与せず独白の立場を取った。

*4：マルク・ピエレ フランスの作家・批評家。小説に『糸を紡ぐ白鳥』、批評集に『ユートピアと倒錯』（70年）など。

*5：ジャコブ・レヴィ・モレノ 米国の心理学者。著書に『ソシオメトリーの基礎』、『自発性の

劇場』、『集団心理療法とサイコドラマ——社会分析の理論的・臨床的序論』など。

*1

1963年3月、S Iは雑誌『アルギュマン』*2の廃刊について、『歴史の屑かごへ』*3と題された資料を発行した。この資料の中には、「コミューンについて」*4というシチュアシオニストの文章とならんで、アンリ・ルフェーブルが自分の署名の下に『アルギュマン』最終号にこっそり発表した、その水増しされたコピーが転載されている。このように、彼は、この現代思想のインチキ仕事のカーニヴァルに、大げさに署名するのだが、このようなインチキは、フランスでは『アルギュマン』がその最も純粋な表れであった。



次に挙げるリストは『アルギュマン』誌の協力者*5のリストである。J・M・アルベルティーニ、K・アクセロス、ロラン・バルト、アベル・バンシ、ジャック・ベルク、イヴォン・ブールデ、ピエール・ブルーエ、T・カプロウ、ベルナール・カゼス、フランソワ・シャトレ、ジャン・ショエ、チャー・ミン・リー、ミシェル・コリネ、ルイス・コーザー、ミシェル・クロジェ、ミシェル・ドウギイ、ジル・ドゥルーズ、ロマン・ドゥニ、アルベール・デトラーズ、マヌエル・ド・ディエゲーズ、ジャン・デュヴィニョー、クロード・フォシュー、F・フェイトー、レオポルド・フラム、J・C・フィュー、P・フージェロラス、ジャン・フラスティエ、アンドレ・フランカン、F・フランソワ、G・フリードマン、J・ガベル、P・ゴードイベール、ダニエル・ゲラン、ロベルト・グイドウッチ、リュック・ド・ウーシュ、ロマン・ヤコブソン、K・A・イエレンスキー、ベルトラン・ド・ジューヴネル、ジョルジュ・ラパサード、アンリ・ルフェーブル、O・ロラス、ステファヌ・リュパスコ、ティボール・マンデ、メン・ユー・クー、ロベール・ミスライ、アブラハム・モール、ジャック・モンバール、E・モラン、V・モラン、セルジュ・モスコヴィッチ、ロジェ・ミュニエ、ピエール・ナヴィル、マックス・パジェス、R・パジェス、ロベール・パリ、フランソワ・ペルー、A・フィリップ、アンドレ・ピディヴァル、アレクサンドル・ピッツルノ、ダヴィッド・ルーセ、マクシミリアン・リュベル、オットー・シラー、ヴァルター・シュルツ、H・F・シュルマン、M・シェパード、ジャン・スタロピンスキー、A・スタヴァール、ヤン・ティンベルゲン、ジャン・トゥシャール、アラン・トゥレーヌ、ベルナール・ユルマン、エメ・ヴァルドール。



コミューンに関するシチュアシオニストのテーゼはイタリア語に翻訳されて、雑誌『ヌオヴァ・プレゼンツァ』第9号（1963年春）に発表されたが、これはルフェーブルの手になるシチュアシオニストのコピーの真正面に掲載された。この雑誌の2人の編集者は、2つの記事の中でかなり異なる見解を示していたが、2人とも、S Iの理論の要点と現代におけるその存在の重要

性は、1871年のコミューンの解釈に帰着すると信ずるふりをしているのだということを指摘することは重要である。そして、とりわけ、このテーゼの発表が、現在、真に体制転覆的な諸問題を隠蔽している目覚ましい（スペクタキュラー）ごまかしに反対しているS Iの実践的闘争（この場合はわれわれによる『アルギュマン』のボイコットとその完全な成功の証明）に関わる資料の中の細部にすぎない、ということをも指摘していないということをも指摘しなければならない。だからこそ、彼らには「実践面での弱さ」とか「歴史的展望の欠如」といった言葉を容易に口にしがたなのである。それが問題である。



「シチュアシオニスト・インターナショナルは、『スペクタクルの社会』、すなわち、消費産業の目的に応じて、人間の創造性のすべての表明を操作することをめざす現代の技術官僚（テクノクラート）によって支配された科学技術（テクノロジー）的体制に対して、根本的な批判を行う立場に立つ若者のグループの機関であるということをはっきりさせておこう。（……）その根を初期のロマン主義に持ち、ランボーや、シュルレアリストや、バタイユ⁶や、クロソフスキー⁷を通して続けられた理論運動の継続である。歴史的展望の欠如によって、現代の官僚の支配横領機構の下に倒れる運命にあるが、その実践面での弱さをこえて、この運動は、韜晦と虚偽の上に築かれた社会に直面している新しい世代の拒否の表現を代表している。」

フランコ・フロリアニーニ

（「技術官僚（テクノクラート）による全体主義と、社会主義の官僚とスターリン主義者たちのイデオロギー的硬直化に反対する闘争におけるコミューンの価値」）



「コミューンに関してルフェーヴルが持ち出す解釈を検討するには、数行では不十分だろう。とりわけ、その数行を、シチュアシオニスト・インターナショナルのテーゼ——この批判からルフェーヴルの解釈は由来する——と突き合わせることに使わねばならない場合には。ここでは、彼らのテーゼと、それに対してルフェーヴルが行った批判的検討を考察するだけにとどめよう。われわれの見るところ、どちらについても、はっきりと否定的な判断を下すことしかできないようである。スターリン主義という複雑な歴史的現象——これはソ連においても、フランス共産党のエリートにおいても、いまだ克服されていない——に対して、神秘主義的歴史形態が対置される。つまり、『プロレタリアートの独裁』というような神秘主義的形態の中に、プロレタリア勢力の自律性とそのような勢力の権力への直接および間接的参加——これは不動の官僚制度と反人間主義の中にどっぷり浸かったスターリン主義にはないものであるを見いだそうとする。しかし、このような参加は、その歴史的で構造的な問題系から完全に切り離されてしまって、現実のイデオロギー的目標を持たない、混

乱した非理性的な憧れになっている。プロレタリア勢力の自律、彼らの権力への参加という歴史的で原理的な問題は、『権力との日常的戯れ』とか、民衆の『祭り』とか、武装した大衆集団の『自律』とかというような超越的で暗示的な神話に還元されてしまう。そして、このようなユートピア的な昂揚の中で、ためらうことなく、はっきり言って平凡で、ほとんど迷信の域に達している文句を混ぜ合わせる。たとえば、『いかなる記念建造物も潔白ではない』とする『革命的都市計画』の彼らが言うところの独創性とか、ノートルダム大聖堂を破壊して、『この破壊によって社会に対する全面的挑戦』を示そうとしていた者たちの反人間主義的弁明とか、『計画された』だけにとどまっていて、そういうものとして『残虐』とみなされている行為に対する、これも劣らず反人間主義的な未練とかである。こうした非理性の絡み合いは、歴史的に生きられていない、距離をおいた経験にその当然の基礎を置いているのだが、それらはすべて、ルフェーヴルが再検討したものの中に実質的に統合されている。もっともルフェーヴルは、最も抽象的な文言のいくつかを除外することにしか成功していないのであるが。（……）今日の歴史的現実と接触を持たないし、持とうとしない抗議（……）。スターリン主義は（……）彼にとって、非理性的な韜晦であり、抽象的な憧れをプロレタリア勢力の上に投影したものである。この憧れは、その図式性において、シチュアシオニスト・インターナショナルのコミューンに関するテーゼの中に見られるものと、そっくりである。共産主義者たちは、そろそろ、労働者階級の勢力と社会革命の指導を引き受ける勢力との間に弁証法を保証する制度化された形態によって、政治的でイデオロギー的な生活の合理化を通して、スターリン主義の止揚の問題を提起すべきであろう。」

マルチェロ・ジェンティーリ

（「スターリン主義に対する2つの非理性的な抗議」）



シュルレアリスムのスターリンじみた残党が、まったく夢のような反ファシズムという口実で、アントワープにシチュアシオニストを追い回しに来たので、1963年2月27日付けのオランダ話とフランス語のビラ『うさん臭い奴らと話し合う必要はない！ 馬鹿な奴らと話し合う必要はない！』*8のなかで、彼らの追放について述べておいた。



ドイツ語のS Iの雑誌『デア・ドイチェ・ゲダンケ〔ドイツ思想〕』*9の第1号が、ラウル・ヴァネーゲーム編集の下で、1963年4月に発行された。さまざまな実践的条件を考慮した結果、宛先は結局、ブリュッセル31、私書箱155号に落ち着いた。



1963年6月に、S IはJ・V・マルティンの指導の下、デンマークで、「R S G 6 粉碎」という示威集会*10を組織した。その際、シチュアシオニストは、『危険！ オフィシャル・シークレット R S G 6』と題され、「平和のためのスパイ」と署名された英文ビラを非合法に再版して配布した。これは、「政府管轄地域シェルター第6号」の計画と機能を暴露したものである。『シチュアシオニストと、政治および芸術における新しい行動形態』という理論的文書も、デンマーク語、英語、フランス語で発表された。この集会の舞台装置となった拠点——挑発的な——の第1ゾーンは、核シェルターの復元模型で構成され、第2ゾーンは、とりわけ、マルティンの熱核地図でできていた。これはポップ・アートの転用で、第三次世界大戦の間の地球のさまざまな地域を描いたものである。



「シチュアシオニストの運動は、ひとつの考えをもって、こういって良ければ、展覧会を開く。彼らは、絵の具やスローガンを跳ねかけられた、石膏や髪の毛や鉛の兵隊を基礎とした混沌とした作品を用いて、核戦争の場合の防御施設として建設されたR S G 6というイギリス政府のシェルターの破壊を求めて、示威集会を行う。もちろん、彼らは、実際は、戦争そのものに対して、全体主義国家に対して抗議しているのである。彼らはそれを芸術的手段を用いてはしなかったといえ、おそらく誉め言葉に取ってくれるだろう。ともあれ、わたしはそれが誉め言葉になり得るとは思わない。」

ピエール・リュベッカー、『ポリティケン』紙、1963年7月3日付



スウェーデンの雑誌『コンストレヴィ』の第5-6合併号（1963年12月）には、エルゼ・ステーン・ハンセンによって、「ホモ・ルーデンス」と題された、知的な報告がなされている。



シチュアシオニストのルディ・レンソン*11は、この同じ示威集会に向かう途中、デンマーク国境で不法にも追い返されてしまった。数日にわたって、あらゆる国の新聞によって書きたてられたスキャンダルのせいで、国境警察は、彼がパスポートを持っていないのだ、全を十分に持ってないのだ、顔つきが悪いのだと、言い張ったのだ。最後の点は明らかに議論の余地があるとはいえ、残りの2点の誤りは証明された（しかし、以来、この国境でのシチュアシオニストの出版物の押収は続いている）。レンソンは現在、『建築と転用』に関するS Iの論文集を準備している。



1963年春に、全学連という日本の運動からヨーロッパに代表として派遣されてきたT・黒川と高木徹は、ここで、革命組織の新たな出発についての議論に貴重な貢献をした。宛先は、前進社、東京都豊島区池袋東1-50、である。



「さまざまな知的専門化と同じ理由で、詩は、『専門的技術者』と文学的達人の閉鎖的特権階級（カースト）の特殊な実践としては消滅し、人間のあらゆる創造行為の中に——書くという行為を含めて——直接的に現れなければならない。このことを、レトリストとかシチュアショニストとかいうパン屑掃除ブラシたちは理解することができない。彼らにとっては、文法的に正しい文章や芸術表現を無制限に廃止することが、詩的表現の危機に対する奇跡の特効薬なのだ。」

『フロン・ノワール〔黒色戦線〕』誌、第1号（1963年6月）



『解きほぐせるもの』という本の中で、レーモン・ボルド*12は、下品極まりない冗談というソースに混ぜて、いくつかの事実と観念——それらはまもなく実際に流行りだすだろう——を振り回しているが、そこには次のような奇妙な告白が書かれている。「シュルレアリスムの側では、観念は現実離れしている。それは、シチュアショニストによって再び取り上げられたが、偶然の状況においてである。それは、ひょっとすると革命理論の鍵となるかもしれない（……）」。周知のように、レーモン・ボルドは、いつでも、彼の文体練習を偶然でない状況に置くことができたのである（今号の19ページ〔本書250ページ〕を参照のこと）。彼は制服を取り替えただけなのだ。



1963年2月7日付けの『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌が書いたように、ロベール・ドゥワー*13の本『テイヤールは間抜け（コン）だ』（たとえ、われわれがこの題名に完全に同意しようとも）が「シチュアショニストとの付き合い」を暴露していると書くのは、まったく見当はずれである。しかしながら、ロベール・ドゥワーが自立していることは明らかであり、それは最近の彼の2番目の著書『ワレヲ見ヨ（エッセ・エゴ）』によっても確認されている。幾人かの批評家は、S Iを知らないふりをする模倣者を見るのにひどく慣れてしまったために、われわれを真面目に引用して、自分の目的のために有益に思えるシチュアショニストの参照文献を挙げる者に出会うと、すぐにこの忌まらしい略号〔S I〕のせ

いにするのである。

*1：最も長い月日 「最も長い月日」（Les mois les plus longe）というタイトルは、62年秋に全世界で公開された長編映画『最も長い日』（邦題『地上最大の作戦』）にかけてある。第二次大戦の終わりの1944年6月6日のノルマンディ上陸からパリ解放までを、ケン・アナキンをはじめ4名の監督により、ジョン・ウェインからジャン＝ルイ・バローまでの欧米のオールスターキャストで、3時間の超大作に仕立て上げたこのアメリカ映画は、パリでも封切られ、大人気を博した。

*2：『アルギュマン』誌 エドガール・モランを編集長とし、コスタス・アクセロス、ジャン・デュヴィニョーとの共同編集で、1956年から1962年まで刊行された季刊雑誌（全28号）。第1巻 113頁の訳注を参照。マルクス主義者やアナキスト、トロツキストから哲学者・文学研究者、社会学者までの幅広い執筆者を集め、50年代後半のフランスの反共産党系左翼知識人の結集軸となった。

*3：『歴史の層かこへ』 1963年2月21日付で、S I中央評議会名で出されたパンフレット。『アルギュマン』最終号（第27－28合併号、1962年第3季）に掲載されたアンリ・ルフェーヴルの文章「コミューンの意義」が、ドゥボール、コターニィ、ヴァネーゲームが共同執筆した「コミューンについて」（1962年3月18日）を盗用したものであることを糾弾し、両者を並列して印刷することで、コミューンの位置づけから個々の言い回しやマルクス・エンゲルスの引用の仕方にいたるまでの盗用の酷さを証明した。『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌第12号に復刻され「再販の理由」という文章を付して資料として収められている。

*4：「コミューンについて」 先の注で述べたように、ドゥボール、コターニィ、ヴァネーゲームの署名による、1962年3月18日付の文章。14の断章から成り、1871年のパリ・コミューンを「19世紀最大の祭り」であったと位置づけたこのタイプ原稿は、ルフェーヴルがコミューンについての本の親筆を構想していた時に、シチュアシオニストに意見を求め、それに応じてドゥボールらが彼に渡したもののだが、ルフェーヴルはあろうことかそれをほとんどそっくりそのまま自分の文章として盗用したのである、ルフェーヴルの文章は『アルギュマン』誌最終号に発表された後、1965年にガリマール書店から『コミューンの宣言』（邦訳『パリ・コミューン』岩波書店）の第7部第2章「コミューンの重要性と意義」のなかに採録された。

*5：『アルギュマン』誌の協力者 ここに挙げられた氏名は、1956年から62年まで全28号が刊行された『アルギュマン』誌の執筆者の一部。フランスの新しい左翼の結集を図った『アルギュマン』誌は、エドガール・モランが編集長で、その編集委員には、コレット・オードリー

、コスタス・アクセロス、ジャン・デュビニョー、ディオニス・マスコロ、セルジュ・マレ、
ピエール・フージェロラス、ロラン・バルト、フランソワ・フェイトーなどが編集委員を務めた
。

*6：ジョルジュ・バタイユ（1897－1962年） フランスの作家・思想家。ニーチェの影響
を受け、無神論的神秘主義の色彩の濃い小説や批評作品を通して、供犠、禁忌と侵犯、非生産的
消費（ポトラッチ）に基づく「普遍経済学」、悪とエロティシズムなどのさまざまなテーマの下
に思索を重ね、戦後の文学と思想に大きな影響を与えた。小説に『眼球譚』（28年）、『空
の青』（36年執筆、57年刊）など、批評に『内的体験』（43年）、『有罪者』（44年）
、『ニーチェについて』（45年）から或る《無神学大全》などがある。

*7：ピエール・クロソウスキー（1905－） フランスの作家・思想家。1934年からバタイ
ユと親交を深め、その社会学協会に参加、ニーチェの影響を強く受けて悪の形而上学を主題にし
た作品を著す。小説に『バフォメット』（65年）、『歓待の掟』（65年）など、批評に『わ
が隣人サド』（49年）、『かくも不吉な欲望』（63年）などがある。

*8：ビラ『うさん臭い奴らと話し合う必要はない！ 馬鹿な奴らと話し合う必要はない！』 19
63年2月27日付のS1中央評議合名で出されたビラ， ヤン・ストリィボッシュとラウル・ヴ
ァネーゲムの署名入りで、オランダ語とフランス語の2言語で書かれている。

*9：『テァ・ドイチェ・ゲダンケ〔ドイツ思想〕』誌 S1ドイツ・セクションでの〈シュプール
〉派の除名の後、新しくドイツで発行されたS1の機関誌。1963年4月に第1号だけが出さ
れた。その内容は、ウーヴェ・ラウゼンの論文「確かにそうかも知れないが」とアッティラ・
コターニの論文「次の局面」以外は、『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』の第1号
から第8号までの9本の論文の翻訳である。

*10：「RSG6粉砕」という示威集会 デンマークのオーデンセの〈ギャラリーEX1〉で開催
された展覧会を兼ねた集会。この集会のパンフレット『RSG6粉砕』によると、ドゥボールや
ベルンシユタイン、マルティン、ストリィボッシュの〔作品〕に混じって、〈平和のためのス
パイ〉が発行した『危険！ オフィシャル・シークレットRSG6』のオリジナル版も展示され
た（コピーが配布された）。またこのパンフレットには、ドゥボールが書いた『シチュアシオニ
ストと、政治および芸術における新しい行動形態』が3ヶ国語で収められている。

*11：ルティ・レンソン ベルギーのシチュアシオニスト S1ベルギー・セクションで活動した
が1966年に脱退。

*12：レーモン・ボルド フランスの映画批評家。元フランス共産党員で、50年代から60年代

にかけて、反体制派の映画雑誌でシュルレアリストが多く協力した『ポジティブ』に参加した。著書に『アメリカのフィルム・ノワール・パノラマ』（79年）、『シネマテーク』（88年）など。

*13：ロベール・ドゥウー　ドゥウーに関しては不詳だが、ここで言及されている『ティヤールは間抜け（コン）だ』は、1962年12月、クレール・ショックと共同でドゥウーが出した小冊子のこと。

1963年10月27日、アッティラ・コターニイ*1はS Iから除名された。その3週間前に、彼は、基本的理論方針の見直しを求める文書をシチュアシオニストに提出していた。この新しい方針たるや、きわめて反動的なもので、神秘主義まで含んだものだった。その作者は全員一致で除名された。ただ1人、デンマークのシチュアシオニストであるペーター・ラウゲゼン*2だけは、その中に特に気になる点は何も見あたらないと言っただけで、彼も即座に除名された（12月に配布された回状『アッティラ・コターニイの除名について』を参照のこと）。それ以来、ラウゲゼンは、「あいつらはひどい奴らだ。自分が何を言っているかくらいわかっている。あそこにいたのは不幸なことだった」という語り尽きせぬテーマで、スカンディナヴィアの新聞や雑誌に、しょっちゅう顔を出している。A・コターニイは、ナッシュ主義に向かって少なくとも1歩進み、一切は悲しむべき誤解で、自分はまもなくS Iと接触を再び取り始めるだろうという噂を広めようとしている。われわれは否と言わねばならない。彼の文章はまったく明快だった。われわれのも、そうである。



『記号の運動』という本の中で、エスティヴァル*3は、その理性の見かけとはまったく逆に、あくまでS Iを理解しようと努めている。馬鹿馬鹿しいことは山ほどあるのだが、その中でも、彼がその「不可避的な分裂を予言し、説明した」とあるのには驚かされる。彼にとって、この離反の運動は、早くも、最初の除名の1つであるラルフ・ラムネイ*4の除名で、その本性をあらわにしたのである。つまり、われわれが1つも文章を発表しないうちに。彼が除名の本当の意味に目を閉ざしているのは、彼も、間違いなく「除名される機会すらなかった」（『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌第8号）人々に属しているからなのかもしれない。ひょっとすると、彼は、このS Iの分裂の衝撃波が、彼が冬眠している不毛の精神領域にすでに達したと思っているのだろうか？ それなのに、彼は、シチュアシオニストと共通点があると自称して、パリのいくつかの雑誌——少なくとも、『レットル・ヌーヴェル』誌*5と『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌——の編集部に姿を見せたのだ。当然だが、詐欺はだまされたいと思っているものしかだませないのである。それは、単にシチュアシオニストが賢く、エスティヴァルが、たとえCNRS〔国立科学研究センター〕の研究者としても、おつむが異例に弱いように見えるという理由だけからではなく、とりわけ、よく知られているように、シチュアシオニストはこの種のやり方をしないという理由によっている。



ナッシュ主義は弱体化して、主に2つの方向に散りぢりになった。オランダの雑

誌『〔ザ・〕シチュアシオニスト・タイムズ』*6は、時にはとてもうまく選んだテーマ（迷路）についての、非常に豊かな図版を集める、いくらか学術的な美術雑誌に変わった。注釈に取っておかれた、ごくわずかな部分は、残念ながら、この大学的歴史的 efforts の高さに達していない。著名な博物館史学者であるH・L・C・ヤッフェ博士*7は、『神曲』の最初の3つの詩句をイタリア語で引用しているが、6つもの間違い（意味の取り違いないし意味不明）を重ねている。この考えからすれば、どんなことでも証明できよう。この雑誌の説明されていないタイトルには意味があった、ということさえもが、ひょっとすると証明されるかもしれない。他方、ナッシュと彼のスウェーデンの友人たちは、スカンディナヴィアの神秘にまぶしたポップ・アートの熊使いと火飲み芸人になって、公道で寄付を募っている。最近のピラでは、当を得たことに、ナッシュは、自分は「神の息子」であると宣言した。この父にしてこの子あり。



「科学と技術が、時にばかげた役割を演じる時代の瀬戸際にあって、第3回ビエンナーレ展*8に際して、〈視覚芸術探究グループ〉がパリ市立近代美術館に運び入れた、芸術というよりは遊戯に近い、大人のための活動、サイバネティックスとかりモコンを使ったゲームについて、一言いわねばならないだろう。あれは、どこかの数学的ルナ・パークにふさわしいゲームである。作品と観客の関係を変えるという口実の下に、このグループは観客の参加を求める。ボールを投げたり、さまざまな要素を操作することで、来訪者は多種多様な状況を作り出す（……）」

ラベック＝マヤール、（「遊戯と現実性」、『ラ・ネフ〔外陣〕』誌第16－17合併号、1964年1月）



1963年の分裂*9以来、雑誌『社会主義か野蛮か』は、『アルギュマン』誌の後を継ぐと躍起になっている（新編集委員会が、読者を取り込もうとして読者宛に出した、1964年1月20日付けの回状には、「あなたが『アルギュマン』誌の定期講読をしているのは、同じような関心からだということをおたしたちは知っています」とある。参照のこと）。だが、それは遅すぎたし、雑誌自体がはっきりと〔『アルギュマン』誌より〕弱々しく、無意味である。政治的には、それは、左翼のあの経営者や中間管理職の中の最も急進的で、最も空想的な少数派のあらわれである。彼らは、社会における彼らの実際の職業の革命理論や、それと同じくらい、そのような「革命理論」に開かれた社会的職業を持ちたいと思っているのだ。しかし、マレー派*10とかゴルツ派*11は、この種の活動のプロなのに対して、『社会主義か野蛮か』の連中は、明らかにアマチュアのように見える。つまり、本当の職業はよそにある、経営者たちの週末のための休息である。マルクス主義への忠実さから挟を分か

った少数派は、最も間違った地盤の上での討論を受け入れた。「現代」がカルダン主義者の専有物だったのに対して、「革命」は少数派の旗だったのである。しかし、実際は、その一方の陣営も他方も、これら2つの観念のそれやこれを代表〔=表象〕してはいないのである。というのは、現代の外に革命はありえないし、再び発明すべき革命的批判の外に現代思想はありえないからである。少数派（〈労働者権力＝プーヴォワール・ウーヴリエール〉）は、この時代の些末事がらひどく切り離されているので、彼らの好みからすると、あまりに現代的な現象である『社会主義か野蛮か』の解体の意味を説明することを有益なことと思わなかったし、その数少ない——が、みな熱心である——読者に労働者民主主義を知らせることさえも有益としなかったのである。『社会主義か野蛮か』には、何年にもわたって多くの点でなされた、有益な理論的営為のごくわずかな痕跡しか残っていない。すべては、責任放棄へのエスカレーションの異常なムードの中に紛れてしまった。誰もがあらゆる批判的思考の放棄の部署に詰め掛けている。この難破の中で、船長だけが1人、有頂天になって鬱憤を晴らしているようだ。弁証法が、たとえわずかの間でも、自分に身を任せることを願って、ガルダンは15年にわたって無駄な努力を重ねてきたが、今やそれがまだ未熟すぎる実であると決めつけ、次のように宣言する。「われわれは、どんな弁証法であれ、一気に手に入れることはできない。なぜなら、弁証法は、世界と歴史の合理性を仮定するものだが、この合理性が、理論的にも実践的にも問題だからである」（『社会主義か野蛮か』誌第37号27ページ）。かくして、彼は、長い間隠してきた、矛盾の働きをとらえることができないという自らの無能さを、最高に誇りをもって、おおっぴらにすることができる。「この（マルクス主義の）歴史理論の基礎には、それとは矛盾して深く織りなされた歴史哲学があるのだが、これは以下で見るように、それ自身矛盾したものである」。かくも、結構な条件で始められては、今後はどんなことでも見られることは確かである。ひょっとすると、ラパサード*12が、このような「問題」の革命の前衛をサイコドラマのように指導することすら、目にするることができるかもしれない。



1963年12月、S Iは、〈社会実験芸術センター〉からの、芸術と社会の関係についてのアンケートに答えることを受け入れた。しかし、「芸術家の団結」のための、さまざまな芸術運動間での公開討論に参加することは、当然、一切拒否した。それは、より一般的には、イズーが企てた、シチュアシオニスト狩りのために善良な人々の団結を求めるアピールでさえあったのである。当時、イズーは次のような宣言を、センターのある建物に貼り出していた（それは『レトリストとエスタペイリストの前衛』に再録された）。

「いくつかの反動的なグループが機械を破壊しなければならないと主張しているように、別の反動的なグループ——消化不良の亜流の亜流の亜流のマルクス主義の偽物に基礎を置いている（レーニンが言うところの穴居人である）シチュアシオニストのような——は、近い将来、芸術は全面的に排除されるだろうと主張する。（……）アメリカやイギリスでは、ネ

オナチの運動が鍵十字とヒットラー式の敬礼と共に再組織されている時代に、また、同時に、ゲーリング*13やスターリンの反形式主義の最も不吉な時代のように、芸術の形式や素材の探求を攻撃するセクトが再び現れてきている時代に、人間の革新的な開花を気に掛けている人々は、方向を逸らせる〔＝転用を用いる〕穴居人タイプの蒙昧主義の無能たちによる、おぞましい無知蒙昧化の努力に反撃するために団結しなければならない。」

(「『シチュアシオニスト』という蒙昧主義の屑どもに対する回答」)



おまえたちのよく知っていることを気に掛けている者たちは本当に楽まるであろう。というのも、1964年3月に、ピエロ・シモンド*14（隠れカトリック教徒という理由で、ほとんどS Iの始まりと同時にS Iから除名された）に指導されているトリノの「国際美学研究センター」は、イズーの絵画作品を展示したからだ。それには、死んだと思われていたイエズス会士のタピエ*15の手になる、熱狂的な序文が付されていた。こうしたことがすべて集まって、可愛い子供たちができるのだろう。



ギー・ドゥボールの1冊の著書が、著者の許可も、いかなる通知もなく、最初はバーデン＝バーデン〔ドイツ南西部の温泉保養都市〕で、次にアムステルダムで開催された「文字と絵」という展覧会に出品された。この策動が最終的にわれわれに知らされた時の主催者への最初の抗議に対して、バーデン＝バーデンのドイツ人は、その責任はアムステルダムの市立美術館のA・ペーターセンというオランダ人にあると答えた。他方、この美術館は、出品作品の選定はバーデン＝バーデンの文化会館館長のマーロウというドイツ人に任せられていたと明言した。（次号に続く）



「アナーキーな社会に必要なことは、目覚めるたびに未知の新しい社会、昨日とは違う可能性を提供する社会を見出すことである。（……）シチュアシオニストたちはこのことを理解したようであり、例えば、人々を毎日新しい状況に置くような建築上の革命（町の景観は毎日変わりうるものになるだろう）を提案する。これは外観にすぎないが、それはわれわれの趣旨に合致している。現在の生活のすべてを改革しなければならないのだ。（……）」

『ジュヌ・リベルテール』誌*16（1964年3月号）



論文「王さまのすべての家来（オール・ザ・キングス・メン）」（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第8号参照のこと）がデイヴィッド・アーノットによって英語に翻訳されて、イギリスの雑誌『タメーシス』（1964年3月）に掲載された後、レディング大学の2人の教授が、同じ雑誌に論評を書いたが、その無理解の程度は、はっきりと異なっている。

「この連中は、いくつかの表明においては、むしろ19世紀の無政府主義者のように見える。わたしの知るところでは、彼らはおよそ70人いて、30の異なる国々に往んでいる。すでに、3人が分派活動か何かに対する措置として除名されている。（……）そして、ある意味で、最も独創的と言えるのは、革命は権威の外部で（単に言語上の権威ないし専門家が確立したものの外部のみならず、政府の権威の外部で——ほとんど政治体制の外部でと言ってもよからう）起こらなければならないとしている点にある。このことから、この攻撃文書が完全に無政府主義的に考えられたことが見て取れる。」（ルーカス教授）

「しかし、許されている言葉は、誰か許す人がいるということを含意しているのだが、著者は、明らかにこの権力の中心さえも排除しようとする。そして、それゆえ彼は、少なくとも私の知る限りでは、もう長い間使われずにいた形で無政府主義者なのである。（……）この男は、マルクス主義の考え方を社会革命に連結させ、意識的な努力によって次に来る段階を現在に導入しようとし、たとえば、21世紀の視点から現代詩を利用できるようにしようとしている最中なのだろうか？ 私にはそう思われる。（……）この論文は、一連の議論の中をただ単に表面的に進展する。それは、1つの宣言であると同時に、その宣言が成し遂げようとしているものの一例である。それは、それ自身の表現において理解されねばならないもの、そうでなければまったく理解されないものである。」（ボルトン教授）



コシオ・ダローシャでの大会において、S Iの創立メンバーの1人であったが、1960年に除名されたジュゼッペ・ピノ＝ガッリツィオ^{*17}は、1964年2月12日アルバで急死した。あらゆる分野における実験家であったガッリツィオは、現代芸術の創造的な時期において達せられた極限点を最もよく代表していた芸術家の1人であった。彼は、乗り越えの探求とあのかつての時代の趣味に対する愛着の間で引き裂かれていた。この愛着の一部と、とりわけ取り巻きの圧力のせいで、結局、S Iへの参加は困難なものになってしまった。その後は、独立したままであることができた。彼自身、創意に富んでいたのも、ナッシュ主義者のような偽造品の派手な宣伝とは対極にあった。シチュアシオニスト運動の登場は、彼に多くを負っている。



5月にコペンハーゲンで、共産党の学生たちが親中国的な策動をしたかどで党を除名さ

れた。実は、彼らはS Iの主張に興味を示したことで非難されたのだった。



ギー・アトキンス教授*18とアスガー・ヨルンについての批評を著しているイギリス人で、ロンドンで開催された1960年のS I大会でS Iと接触したこと以外は不詳。著書に『アスガー・ヨルン——スカンディナヴィアのヨルン』（68年）、『アスガー・ヨルン——決定的な年月1930—1953年』（77年）がある。))の『アスガー・ヨルン』という本（ミシューエン出版社、ロンドン、1964年）の中には、以下のような文章がある。

「コブラの後に、ヨルンが参加した最も重要な運動は、1957年に始まったシチュアシオニスト・インターナショナル運動であった。非常に相異なるこの2つの運動を比較するのは興味深い。（……）各々、実質的に、ほぼ3年の間、存続した。コブラはすべてのものを飲み込んで大きくなり、最後には途方もなく巨大化する雪崩だった。S Iは、それとは正反対だった。S Iは当初、閉鎖的でまとまりがあった。それは大理石のかけらのように砕け散った。ヨルンは1961年に巧みに脱退したが、1962年の半ばまでに、ほとんど全員が、ギー・ドゥボールによって『除名』されてしまった。コブラは、共同のイメージを生み出した。S Iは、1つの精神と姿勢を創造し、興味深く精妙な思想に基づいた実験的な活動を行った。コブラは、群れなすデンマーク人たちから成っていたので、規律があまりになさすぎた。シチュアシオニストは、自分たちの規律によって出来上がり、次いで、それによって瓦解した。」

この結論の現実感覚から、読者は、これらの対比のそれ以外の項目に付与すべき価値を判断できよう（コブラは人間をあるがままに描いたが、シチュアシオニストはそれがあるべき姿に描いた？）。



1964年7月、S Iはフランス語とスペイン語で書かれたビラ『心にスペインを』*19を発行した。これは、現在スペインで実験されている、新しい宣伝形態に注意をうながすものである。



ここで言及されたS Iの出版物はすべて、誰でも、正当な理由のある要求をした人に届けられる。

*1：アッティラ・コターニィ ハンガリー国籍のシチュアシオニスト。S Iベルギー・セクションに所属して活動。1963年10月、ヨルゲン・ナッシュを擁護したことを理由にS Iを除名。

*2：ペーター・ラウケゼン デンマーク国籍のシチュアシオニスト S Iスカンディナヴィア・セクションで活動したが、1963年10月に除名。

*3：ロベール・エスティヴァル フランスのレトリスト・批評家。イズーのレトリズムから分かれた自称ウルトラレトリストとして、1957年から59年まで雑誌『グラム』を刊行、レトリストのデュフレヌ、エスティヴァル、ヴォルマン、ジャン＝ルイ・ブローの詩・批評・パンフレット類を掲載した。後には、CNRSの研究者となり、古書物学（ビブリオロジー）なる学問を始めた。著書に『1945年以降のバリの文化的前衛』（63年）、『総合的表意文字的ハイパーグラフィック』（64年）、『前衛』（68年）『構造主義から図式主義へ』（83年）、『世界の書物——国際的書物学（ビブリオロジー）序論』（83年）、『書物学』（87年）。

*4：ラルフ・ラムネイ 〈ロンドン心理地理学委員会〉のメンバーとしてISの設立に参加した後、ISイタリア・セクションのメンバーとして活動。1958年3月除名。

*5：『レ・レットル・ヌーヴェル』誌 1953年創刊の文学批評誌。主幹はモーリス・ナドー。

*6：『サ・シチュアシオニスト・タイムズ』 シチュアシオニストの国際版雑誌を名乗っているが、ドウボールらシチュアシオニストは参加せず、ヨルン、ドイツの〈シュプール〉派など、シチュアシオニストを除名された者たちや、アレシンスキー、カウロス・サウラ、ポリス・ヴィアン、ロベルト・マッタ、ウィフレド・ラムなどが参加した。ジャックリーヌ・ド・ヨングの編集で、1962年5月から64年9月まで全6号が出された。

*7：ハンス・L・C・ヤッフェ博士 著書に『パブロ・ピカソ』、『モンドリアン』などのあるオランダの美術史家と思われる。

*8：第3回ビエンナーレ展 1963年9月28日から11月3日までパリで開催されたビエンナーレ展で、クリスト、ニキ・ド・サン＝ファール、スポエッリらのヌーヴォー・レアリストの他、〈視覚芸術探究グループ〉も参加し、「不安定さ——迷路」という名の観客参加型のインスタレーションを展示して評判になった。

*9：1963年の分裂 1963年7月の総会での〈社会主義か野蛮か〉の分裂のこと、現代資

本主義下でマルクス主義との訣別を主張するカストリアディスらと、マルクス主義の有効性を主張するA・ヴェガ、ピエール・スイリ、シャン＝フラランソワ・リオタールらとの間の対立は、カストリアディスが59年に執筆した「現代資本主義下の革命運動」の仲間内での回覧によって表面化した。63年7月の総会での投票でカストリアディスらが多数派となり、少数派のリオタールらはグループを去った。カストリアディスらは『社会主義か野蛮か』誌を引き継ぎ、リオタールらは、労働者向けの宣伝紙であった『プーヴォワール・ウーヴリエール〔労働者権力〕』紙を継承し、後に、「労働者権力」グループを結成した。江川幹『疎外から自治へ——評伝カストリアディス』（筑摩書房、1988年、180-182ページ）参照。

*10：マレー派 セルジュ・マレの一派。マレ→フランスの新言説の政治理論家。戦後フランス共産党に入党し、活動していたが、58年に離党し、『フランス＝オプセルヴァトゥール』誌に協力。自ら他の離党者とともに〈共産主義トリビューン〉を結成、それを母胎に、60年にクロード・ブルデらとともに新左翼の統一を図り統一社会党を結成。マレはこの党の理論的指導者となり、社会主義研究センターを組織、多くの社会学者やさまざまな党派の活動家を集めて、60年代初頭に注目を集めたパンフレットを数多く出版した。マレ、C・ルフォール、マンデス・フランス、P・ナヴィルによる『労働者は経済を管理できるか』（61年）、マレ、ルフォール、モラン、ナヴィルによる『マルクス主義と社会学』（63年）などである。ここから「聖歌隊長」と、シチュアシオニストが揶揄しているのである。マレは、やがて、社会学によるマルクス主義の改造を主張し、大学で社会学を教えるようになるが、経済決定論を退け、新しい労働者意識による「自主管理」を唱えるその主張は、68年の1つの理論的背景となったと評価する者もいる。著書に『新しい労働者階級』（63年）、『労働者権力』（邦訳、77年）など。

*11：ゴルツ派 アンドレ・ゴルツの一派。ゴルツ→（本名ジェラルド・オルスト 1923-）ウィーン生まれのフランスの社会主義理論家・エコロジスト、1946年、亡命先のスイスでサルトルと知り合い、フランスに移る。『レクスプレス』誌（1955年から64年）や『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』誌などのジャーナリストをしつつ、60年の『レ・タン・モデルヌ』の創刊以来、サルトルとともにその共同編集者として活動。70年代にはエコロジー運動に関わり、最近もエコロジー派の代表的論客として発言している。代表的著書に『裏切者』（58年）、『歴史の教訓』（59年）、『エコロジーと政治』（75-79年）など。ここで「盗作本」と言われているものは『労働者戦略と新（ネオ）資本主義』（64年）のことと思われる。

*12：ジョルジュ・ラパサード（1924-）フランスの社会心理学者。60年代に国立科学研究センター（CNRS）で活動し、アメリカ心理学、特にモレノの「心理ドラマ」に関心を寄せ、社会心理学の研究を行う一方で、〈社会主義か野蛮か〉や『アルギュマン』のグループに近づき、『アルギュマン』誌の官僚主義特集を編集するなどの活動を行い、「制度分析」と呼ばれる社会学の方法を創始した。最近では都市社会学の観点から郊外の移民を支援したり、ラップ音楽

論などを書いたりもしている。著作にフロイトとマルクスを用いて「人間の未完成」理論を構築した『人生への入り口』（63年）、「制度分析」を展開した『集団、組織、制度』（66年）など。

*13：ヘルマン・ヴィルヘルム・ゲーリング（1892－1946年） ナチス・ドイツの政治家・軍人。第一次大戦後、ヒトラーと知り合い、突撃隊（SA）を組織し隊長となる。23年、ミュンヘンのナチス暴動に参加、以降4年間スウェーデンに亡命、帰国後、国会議員となり、33年、プロイセン内相として国会議事堂放火事件を機に共産主義者を弾正して首相となり、軍備拡張に努め、38年に元帥となる。第二次大戦とともに国防閣僚会議議長、戦時経済最高責任者、国家総元帥となり、権力を次々と獲得、戦後、ニュルンベルク裁判で絞首刑の判決を受け、拘留所で自殺。

*14：ピエロ・シモンド イタリア国籍の元シチュアシオニスト。SI以前にはアスガー・ヨルンの「イアシニスト・バウハウスのための国際運動」に参加し、57年7月のSI設立時からSIイタリア・セクションで活動したが、その6ヵ月後、1958年1月に除名。

*15：ミシェル・タピエ（1909－87年） フランスの美術評論家。1948年、ブルトン、ジャン・ポーランと「生の芸術（アール・ブリュト）商会」を設立し、大戦直後から画家のデュビュッフェが実践していた「生の芸術」（幼児、精神疾患患者、アマチュアの作品）の収集活動を推進する。それと平行して、デュビュッフェ、ヴォルス、フォートリエら大戦後の前衛的な非具象絵画を「アンフォルメル（非定型）」芸術と命名し、この運動の推進者にして中心的理論家として活動。また、サム・フランシスやアンリ・ミショー、フォンタナ、日本の具体派なども積極的に評価した。著書にアンフォルメルのマニフェストである『もう一つの芸術』（1952年）などがある。

*16：『ジュヌ・リベルテール』誌 アナキストの機関誌。

*17：ジュゼッペ・ピノ＝ガッリツィオ（1902－64年） イタリアの画家、陶芸家、薬剤師、考古学者、地方議員、ジプシー研究家。1957年のSI設立大会以来のSIメンバー。機械のロールから吐き出される布に絵の具・砂・果汁などを用いて次々と描かれその場で切り売りされる「工業絵画」の制作を中心に、SIイタリア・セクションで活動したが、1960年SIを除名（参照）。

*18：ギー・アトキンス教授 コブラ((コブラ 1948年、デンマークの画家アスガー・ヨルンが、ベルギーのドトルモン、オランダのコンスタントらとともに結成した前衛芸術グループ。活動の拠点であったコペンハーゲン、ブリュッセル、アムステルダムを頭文字をとってコブラと命名された。それぞれの地域で大規模な国際展を2回、中規模の集団展を数回、数々の個人展

やワークショップを行い、雑誌『コブラ』 10号と機関誌『ル・プティ・コブラ』4号を発行し、51年に解散。ヨルンはその後、53年から57年までイタリアのアルビソラで実験的な集団芸術実践〈イマジニスト・バウハウスのための国際運動(MIBI)〉を組織し、57年のSIの結成に参加した。「『コブラ』の仲間たちとは何か、また彼らは何を代表しているか」とそれに付した「訳者解題」を参照。

*19: 『心にスペインを』 1964年7月に出され、フランコ政権下のスペインで配布されたピラで、女性のヌード写真にコミックの吹き出しが付けられ、その中に挑発的な文章が書かれたものと一緒に印刷されている。テキストは2言語で書かれているのではなく、フランス語版とスペイン語版の2種類があり、「聖職者の偽善とフランコ主義の独裁との聖なる結合を告発し、〔……〕次の蜂起の責任者たちに、今後は全体的な変革しか、日常生活の全休をカヴァーする変革しかありえないということを喚起する」目的でこのようなプロパガンダの手法を採ったことが書かれている。

訳者解題

イワン・シュチェグロフ、別名ジル・イヴァンについては、本書第1巻45頁以下の訳者解題に書いたように、1953年、19歳の時にドゥボールらのレトリスト・インターナショナル（LI）に参加、漂流実践の最もラディカルな担い手として活動するとともに、「新しい都市計画のための理論定式」を執筆したことで知られる。彼自身はその直後にLIを除名されたにもかかわらず、その論文は、SIの中心的なテーゼである「状況の構築」という概念の形成に寄与したため、58年になって『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌第1号に採録され、57年のSI結成時以降、シュチェグロフは、精神病院に収容されていたにもかかわらず、SIの「遠方の=古くからのメンバー」〔*membre de loin*〕として扱われた。

シュチェグロフの「狂気」と精神病院での生活について、ミシェル・ベルンシュタインはグレル・マーカス（Greil Marcus, *Lipstic Traces — A secret history of the twentieth century*, Harvard University Press, 1989, pp. 383-384）のインタビューに答え、1983年に次のように述べている。

「彼〔シュチェグロフ〕はだんだん狂ってゆきました。しかし、完全に狂ったわけではありませんでした。彼はすでに〔LIを〕除名されていましたが——われわれに起きていることは、ダライ・ラマがコントロールしていると思いきりからです。そして、その頃のある日、彼は妻と喧嘩をしました。カフェであばれて、手当たり次第に物を壊しました。彼の妻はひどい女で、警官を呼んだのです。救急車も呼びました。自分は妻なので、彼を収容させることができたのです。彼はある病院に連れ去られ、そこでインシュリンショックを与えられました。電気ショックもです。その後、気が狂ったのです。ギー〔・ドゥボール〕と私は彼を訪ねて行きました。彼は手で物を食べ、口か涎を垂らしていました。気が狂っていたのです。気が狂った人がするような仕草だったのです。彼が私たちによこした手紙はわけの分からないものばかりでした。死んでいないとすれば、彼はまだそこにいるでしょう。ごくしばらくの間だけ、彼は社会復帰施設に送られ、そこでは、自由を手にいれ、外に出ることもできたのですが、病気は進行してしまい、施設の外では生活できなくなってしまいました。彼も、どこか他の場所に行きたいとも思わなくなりました。それに、どこかに出たとしても、彼はおびえてしまい、すぐに戻ってしまいました。それで、施設の演劇に参加し、芝居を上演するようになったのです。いまでも彼はそこにいると思います。」

イワン・シュチェグロフ*1は、シチュアシオニスト運動の源流となる探究に参加したが、彼の役割は、当初の理論の素案作りにおいても、実際の行動（漂流の実験）においても、かけがえのないものだった。ジル・イヴァンという名で、彼は早くも1953年に——当時19才だっ

た——「新しい都市計画のための理論定式」と題された文書を執筆したが、これはその後、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌の創刊号に発表された。過去5年間は精神病院で過ごした——今もそこにいるのだが——ために、われわれと再び連絡を取れるようになったのは、S Iの結成後、長い期間が経ってからだった。彼は目下、再販をめざして、1953年に建築と都市計画について書いたものの手直しに没頭している。以下にあげる文章は、過去1年間にミシェル・ベルンシュタインとギー・ドゥボール宛てに書かれた手紙からの抜粋である。イワン・シユチェグロフに現在課されている条件は、かつては、たとえば無神論のかどでバステューユに投獄したり、政治犯を国外追放に処したりした、あの生活の監視が身にまとう、社会の近代化につれてますます分化される形態のもの1つであると考えることができる。

ぼくは今、集団や、集団における個人の機能を研究するのに絶好の環境にある。

漂流（行為、散策、出会いをとまなう行動につれての）と全体性の関係は、まさに、精神分析（よい精神分析）と言語活動の関係と同じである。分析医は「言葉が出てくるままにきなさい」と言う。彼は、1つの言葉や表現や定義を暴いたり変えたり（転用するということもできる）するまで、じっと耳を傾ける。漂流は確かに、1つの技術であり、ほとんど治療法と言ってもいいものである。しかし、ちょうど、他に何も伴わない精神分析がほとんどいつも禁忌とされているように、継続的な漂流も、危険である。無防備に（基地がないわけではないが……）遠くまで進みすぎた人は、分裂や衰弱や精神遊離や崩壊の危険にさらされるのだから。そして、その行き着く先は、「日常生活」と呼ばれるもの、すなわらはっきり言えば、「石と化した生活」への回帰である。この意味で、ぼくは今、「理論定式」にある継続的な漂流のプロパガンダを断罪する。そう、ラス・ヴェガスでのポーカー遊びのように継続的なのはいい。が、継続的といっても、しばらくの間だけだ。ある人たちにとっては日曜日だけで充分、平均して1週間くらいないが、1ヵ月は長すぎる。1953年から54年にかけて、ぼくたちは3ヵ月から4ヵ月のあいだ実践した。あれが極限であり、臨界点だ。ぼくたちがあれで死ななかったのは、奇跡だ。ぼくたちはひどく頑健だったんだ。

1つの要因——それはぼくたちの基本理論を立証してあまりあるものだ——が大いに働いたのだ。つまり、何年もの間、病院は、樋嘴（ガーゴイル）や石落とし、飾り鉾のついた分厚い本の扉や床（もっと衛生的な寄せ木張りの床（モザイク）ではない）、高い塔や部分的に古めかしい家具、紋章で飾られた暖炉などのある城館の中にあったんだ。しかし、その後、現代的な病院が建てられた。確かに、それは、維持するにはずっと実用的だが、何とたくさんの犠牲を払ったのか！ 建築に反対して戦うのは、実際には不可能だ。「館」と言わずに「病院」と言い、「滞在者」の代わりに「病人」と言うことがだんだん増えてくる。そして、すべてが同じ趣味なのだ……言葉は変質する〔=働く〕。

ぼくは、オーディベルティ*2の『皇帝（アンペルール）』*3〔という劇〕の肉屋の役を、軽はずみに引き受けたところだ。端役だ。だが、何とくたびれることか！ 病気の時、舞台に立つことほど疲れることはない。

具合が良いときには、あの「理論定式」の不十分な点——かつては完璧だったのだが——をす

べて見直すのだが、絶望のあまり髪をかきむしってしまう。それに、これは『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』の各号についても同様だ。もう少しの

時間——幸運——健康——金銭——反省

(それに) 上機嫌——仕事に対する熱意——愛——そして用意周到さ
があれば、もっとうまくできるはずなのに。

しかし、取り巻きのいて、派閥があって、他人がいて、分岐がある！ 複雑なもんだ。

それに、それは、いつもの世間のばかげた要求なんだ。天才的な才能を持ちなさい、だが、われわれのように生きながら、というのさ。やつらは狂っている。それに、やつらは、書類の中で、ぼくになおも新しいラベルを貼り付けようとしている。

ぼくたちは、ぜいたくなポトラッチにまで達したのだから、こんな題の本もでてきたわけだ。

J・A・シャーデ*4の『いくつもの存在が出会う』は、20世紀最大の小説だが、不幸にももう手に入らない。ただし、3行広告を使えば、手に入るかもしれない。この小説は、次のような、「子供の頃、ぼくたちが歌っていた」わらべうたで幕を閉じる。

金持ちは、車に乗ってくる

貧乏人は、足で歩いてくる

ぼくらといえは、遊んでいる

豚箱の中において、賭け金を知っているのはつらいことだ。ぼくもまた、シンボルになってしまい、ここでも、やつらには、そのことがわかってしまった。あいつはよくなるだろうか、ならないだろうか。また話し始めるだろうか、それともまた記憶を失うだろうか？

しかし、いくら不安に思ったところで無駄だ。ぼくは、自分の文章をもっと、幸福の方向に向きたいと思う。キリコ*5は確かに建築物の遠近法において先駆者だったけれど、あれは不安をかき立てる遠近法だ。ぼくたちは他のもっと楽しいものを見つけるだろう。さもなければ、キリコにおける不安を示し、断罪したいと思う。ぼくの文章は十分に明快ではなかった。

病院で養生ができないなら、もう病気のままで退院するしかない……。みんなはそうだと思っていたが、10年前、ぼくたちは本当に馬鹿じゃなかった、まったく馬鹿じゃなかった。病院で養生できないということが、経営者にとって弁護できない意見だとしても、ぼくは、ここでは養生できないということで、Kとまったく同じ意見だ。この施設は、ぼくたちの誰もを病気にしてしまうだろう。もちろん、わざとじゃないだろう。だが、どうなのだ？

ぼくは、職員の1人ないし2人と共にシチュアシオニストのプロパガンダをしている。もちろんだとも。

それで、どうやって退院できよう？ どうやって、退院するに十分なだけ休めよう？ たぶん、無理だろう。

退院する！ やつらはぼくをこわがらせる！ ぼくは勝手に空想する。いつか、やつらは、ぼくを狂乱させる手段を見つけ、ぼくを逮捕するだろう。1959年に、警官をいっぱい積み込んだ2台のバス（ぼくが覚えている限りで）が呼びつけられたことがあった。要するに、きみたちの友人のために24人の警官が来たわけだ……。でも、ぼくがひどく具合が悪いときにどうなるか、きみたちも知っているはずだ。24人も警官を送るほどのことはないんだ。もとより、そ

んなことは絶対にあったためしがないんだから。

親愛なるギーよ、他に何をきみに言おうか？ ぼくは病気だ。ぼくは、泣き言や、たくさんのわがままや、憎悪や、妄想や、呪いや、「不吉で嫉妬深い愛」や、脅迫や、子供の頃の殴打や、Lの不幸の予言や、Wの「お母さんの言うことを聞きなさい」の中にいる。

ここでのお祭騒ぎには一見の価値がある。見に来て、きみたちの時間を無駄にはしないと、ぼくは思う。みんながしているお祭騒ぎよりも、ずっと悲しくない。ここで一番いいものなんだよ、お祭騒ぎは。

A・K〔アッティラ・コターニ〕の除名について、他に何を言おうか……。こうした除名は、できたらやめるべきだろう。それが簡単には行かないことは、ぼくも知っている。先々の展開を予想して、疑わしい奴は、前もって受け入れないようにするべきだろう。まあ、理想なんだけれど。こういう除名もシチュアシオニストの神話の一部になっている。

イワン・シュチェグロフ

*1：イワン・シュチェグロフ（別名ジル・イヴァン 1934-） レトリスト・インターナショナル（LI）のメンバー。ロシアに生まれ、戦後パリに亡命しドゥボールと知り合い、53年に19歳でLIに参加、「漂流」実験の最も熱狂的な実践者だったが、53年「神話癖」、解釈の錯乱、革命意識の欠如」を理由にLIを除名、その後、ある事件がもとで精神病院に収容された。本書第1巻「新しい都市計画のための理論定式」を参照。

*2：ジャック・オーティベルティ（1899-1965年） フランスの劇作家・詩人。アンティープの裁判所書記をした後、パリでジャーナリストをしている時にアンドレ・ブルトンの影響を受け、バロック的な豊穡な言語を駆使した詩や小説、戯曲を書く 詩集に『人間の種族』（37年）、『莫大な種子』（41年）など、戯曲に『コアト=コアト』（45年）など。

*3：『皇帝（アンペルール）』 オーティベルティの1948年発表の戯曲。ラングドック地方の宿屋で、セント・ヘレナ島からナポレオンが脱出してパリに戻るという予兆を受けた者たちが、次々と訪れる客を変装したナポレオンと勘違いするという話。なお原題のL'Ampelourは、「皇帝Empereur」のオック語を用いられている。

*4：イェンス・アウグスト・シャーデ（1903-78年） デンマークの詩人。既存の価値から解放され、宇宙的なエロスを受け入れるため「生きたヴァイオリン」となり（『生きたヴァイオリン』28年）、その体験の世界を詩に表すなど、人間と自然、男と女の間の官能的な愛の世界を描いた。ここで言及されている『さまざまな存在が会う』は正式題名を『さまざまな存在が

出会い、それぞれの心の中に甘い音楽が立ち昇る』と言い、44年にシャール・ド・ラ・トールが発表した哲学小説。既存の語りの技法を大胆に破り、通常の人間の心理や法がすべて停止された世界で、感覚と本能だけに従って生を謳歌する者たちを描いたこの小説は47年にフランス語に翻訳され、バトー・イーグル書店から出版されたが、71年のシャン・リーブル書店による再版まで絶版だった。

*5：ジオルジオ・デ・キリコ（1888－1978年） イタリアの画家。1911年パリに行き、シュルレアリストと交遊し、形而上絵画運動を起こす。アーケード、人のいないひろば、汽車、建物の壁、廃墟などを独特の遠近法を用いたスタイルで描き、人間心理の不安を表現した。30年代以降は古典的作風に回帰。

社会実験芸術センターのアンケートに対する回答

1 どうして、民衆は自分が芸術に関わりがあると感じないのでしょうか？

どうして、芸術はブルジョワ階級のいくつかの教養ある階層の特権のままなのでしょうか？

〈社会実験芸術センター〉のこのアンケートのテーマの重要性と、回答に与えられた限られたスペースを考慮すれば、何らかの図式主義に陥らざるをえない。これらの問題に関するシチュアシオニストの立場は、SIの機関誌（『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』、『デア・ドイチェ・ゲダンケ〔ドイツ思想〕』、『シチュアシオニスト革命（シチュアシオニスティスク・レヴォリューション）』）や、去る6月にデンマークで行なわれた「RSG6粉砕」集会の際に発表されたカタログにおいて、より正確に表明されてきた。

民衆、すなわち被支配階級は、その参加や管理の外で——しかも故意にその参加や管理に反して——形成された文化とか社会生活の組織の中では、当然ながら、何に対しても関わりがあると感ずることができない。民衆は、彼らによる消費のために特別に割り当てられた似非製品との関わりを見せかけだけ持たせられているだけだ。その似非製品とは、行動の模範を示したり、彼らの手に入る製品を売りつけようとする、華々しい（スペクタキュレール）広告形態や宣伝形態のすべてである。

しかしながら、このことから、芸術はブルジョワ階級の「特権」として存続していると、単純に結論づけることはできない。過去において、あらゆる支配階級は、彼ら自身の芸術を持っていた。それは、将来の階級なき社会は、芸術を待たない、つまり芸術的実践の彼方にあることになるのと同じ理由による。しかし、現代の歴史的状況とは、人間による自然の占有過程における1つの段階を乗り越えたことと関連し、また、それによって、階級なき社会の具体的な計画にまさに結びつくことによって、大芸術が必然的に革命的になっていたようなものなのである。現代芸術と呼ばれてきたものは、19世紀におけるその始まりから20世紀の始めの30年間におけるその開花に至るまで、ずっとブルジョワ階級に敵対する芸術だった。芸術の現在の危機は、ロシア革命の失敗と資本主義の近代化以来の労働運動の危機に関連している。

今日、より正確な用語で言うと経済の「第三部門」の発展に伴って急増している知的労働者の新たな階層の、議論の余地のある「特権」となっているものは、現代芸術の偽の後継（当初の異議申し立てからは切り離され、広告によって包装された、形式だけの意味のない繰り返し）であり、その本来の意味から切り離された、過去の文化のかけらや断片の過食的な消費（マルローは其の「理論」の最も滑稽な売り子だったが、今は、彼の「文化会館」にそれを展示している最中である）である。この第三次産業部門は、社会的なスペクタクルの産業部門と密接に関連している。というのも、この知的階層（その養成の必要と雇用の必要は、教育の量的増大と同時に教育の墮落を説明するものである）は、スペクタクルを最も直接的に生産する階層であると同時に、そのまさに文化的な部分を消費する階層であるからである。

この疎外された知的労働者という大衆に対して差し出されている今の文化消費を代表するものには、2つの流れがあるように思われる。

一方で、「視覚芸術探究グループ」の類の試みは、はっきりと支配的な社会経済システムへ人々を統合する方向に明確に進んでいる。それは、今現在、警察的都市計画やサイバネティクスを利用した管理の思想家たちが追い求めているものである。この「視覚芸術」は観客をその悲惨さに参加させようとしているが、それは、分離された観客の受動性の終焉と状況の構築に関する革命的主張の紛れもないパロディによっている。つまり、弁証法の欠落に「参加しないしないことを禁じる」ことによって、弁証法の欠落を「解放する」までに推し進めるというのである（第3回パリ・ビエンナーレ展*2のパンフレット）。

他方、「ヌーヴォー・レアリズム*3」は、ダダイストの形態（精神ではない）から多くを取り上げているが、これは、ごみ箱を擁護する芸術にすぎない。それは、がらくた商品（ガジェット）と浪費の文明が奮発することのできる似非自由の余白の中に、うまくはまってしまう。

しかし、このような芸術家の重要性は、商業広告と比べてさえ、ごく二義的なものにすぎない。かくして、逆説的だが、これっぽっちも芸術ではない、東側の「社会主義レアリズム」が、それよりも決定的な社会的機能を持っていることになる。つまり、権力は、東側では、第1にイデオロギー（すなわち、人を欺くことを正当化するもの）を売ることによって持ちこたえているのに対し、西側では消費財を売ることによって持ちこたえているのである。官僚制度が自らに固有の芸術を作り出すことができず、その様式に課されている効率の悪さにもかかわらず、前世紀の順応主義的小ブルジョワの似非芸術観を形式的に適合させたという事実は、現在の芸術は支配階級の「特権」としてはありえないということを確認するものである。

しかしながら、いかなる芸術も、1つの社会の中に根付いているという意味で、「社会的」であり、望むと望まざるとにかかわらず、支配的な情況に、もしくはその否定に、似てくるものである。かつての異議申し立ての契機は、今も断片的に存続しているが、その異議申し立ての中心の消滅に正確に比例して、その芸術的（ないしポストー芸術的）価値を失いつつあるのである。この中心の消滅と共に、すでに世界に存在していて、芸術に取って代ろうとしている、ポストー芸術的行為（暴動や生の自由な再構築）の大衆への準拠も消滅した。それで、この断片的な異議申し立ては、美学にはすでに遅すぎる世界の中で、美学に撤退し、すぐに古くなって効果のなくなる美学と化して、凝り固まってしまうのである。シュルレアリスムのように。他の流派は、墮落したブルジョワ的神秘主義（宗教の代用品としての芸術）を典型的に表している。彼らは、今ある社会生活を公式に、かつ實際上支配している諸力を——孤独な夢と観念的な野望の中でだけだが——再現している。この諸力というのは、コミュニケーションの不在、はったり、刷新それ自体に対する熱烈な好み、恣意的でつまらないがらくた商品（ガジェット）をさっさと取り替えることに対する激しい好みである。レトリズム*4がその良い例である。レトリズムについては、「消費されえぬ芸術の時代の所産であるイズーは、ついに自らの消費という観念さえも取り除いてしまった」とか、彼は「最初の唯我論の芸術を提案した」と書くことができた（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第4号）。

最後になるが、実際には他の流派から区別するものが何もない、自称芸術流派の増大自体が、言ってみれば、同じ製品に競合するいくつかのラベルを貼って販売するという現代の商売の原理の応用であることを言っておきたい。

2 ickanarandende, 芸術は実際に「社会的」になりうるでしょうか？

芸術の時代は過ぎ去った。今、必要なのは、芸術を実現すること、以前は幻想か芸術的な思い出でしかありえなかったもの、一方的に夢見られ、保存されるしかなかったものを、生活のあらゆるレベルにおいて実際に構築することである。芸術を廃棄することによってしか、芸術は実現されない。しかしながら、芸術の代わりに、それ以上に階級的で受動的なスペクタクルの自動運動（オートマティスム）を持ってくることによって、芸術を廃棄しようとしている社会の現状に対しては、芸術を実現することによってしか芸術を廃棄することはできないだろうと反論しなければならない。

あなたが生きている政治的社会は、芸術家というあなたの社会的役割に有利に作用していますか、それとも不利に作用していますか？

君たちが芸術家の社会的役割と呼ぶものを、この社会は事実上なくしてしまった。

もし、すべてを支配するスペクタクルにおける従業員という役目が問題ならば、就くべき職は、スペクタクル自体が増えるにつれて増加することは明らかである。しかし、シチュアシオニストはそれに統合される気は毛頭ない。

もし、逆に、社会全体への異議申し立てを始めとする、新しいタイプの活動によって、過去の芸術を継承することが重要であると考えるならば、問題の社会がこのような実践に対して不利に作用するのはまったく当たり前である。

3 もし、あなたが別の社会的、政治的、経済的現実の中に置かれたとしたら、あなたの美学は別のものになると思いますか？

確かにそうなるだろう。われわれの見通しを実現されれば、美学は（その否定同様に）乗り越えられてしまうだろう。

もし、今、われわれが、低開発国とか、時代遅れの支配状況（植民地化、フランコ型の独裁制）に置かれた国にいるとしたら、芸術家が芸術家として民衆闘争に参加すること、したがって、より古い基盤のうえで、完全に作りものではないコミュニケーションに参加することは可能であると認めるだろう。環境の一般的（社会的、文化的）遅れを考慮すれば、芸術家の古い社会的役割は、まだしばらくの間、現実性を持ち得るだろう。

もし、われわれの派が、社会主義と呼ばれる官僚制度によって支配されている国で成立したとすれば、そうした国では、先進工業国での過去50年間の、さまざまな実験——文化的なもので

あれ他の分野のものであれ——についての情報の不足が、組織的に作りだされているのだから、われわれは、現在の西欧の芸術についての真実を含む、真実の普及の最小限の要求に賛同するだろう。この要求には不可避的な両義性があるにもかかわらず。というのも、現代芸術の歴史は、西欧では、自由で、有名でさえあるが、歪曲されているからであり、また、東側でのその輸入は、まず何より、エフトゥシェンコ*5の類の者にサーヴィスを、すなわち公認芸術の近代化を恵むに違いないからである。

4 あなたは政治に参加していますか、それともしていませんか？ それはなぜですか？

もちろんしているが、ただ1つの政治である。われわれは、世界各地の他のさまざまな勢力とともに、新たな革命運動の連帯と理論的実践的組織化に取り組んでいる。

われわれがここで展開している考察はすべて、かつての専門化した政治の失敗を越えて前進するための不可分の理由となっている。

5 芸術家の連合は必要だと思いますか？ それにはどんな目的がありますか？

芸術家の連合はたくさんあるが、どれも、原則がなかったり、何かとつぴな錯乱のうえに恣意的に設立されたりしたものばかりだ。互助組合とか、賛辞であふれた保証書が回っているだけの閉ざされた回路とか、集団的な出世主義のように。どれほど小さな機会にも「集団」作品展と自称される作品展が流行中で、パリのつまらないビエンナーレ展でもひどくもてはやされているが、それは、芸術の乗り越えという実際の問題から注意をそらすためである。われわれは、こうした結託のすべてを、等しく軽蔑して眺めている。われわれは、このような連中とのいかなる接触も受け入れない。

共同の計画の実現のための、一貫性と規律のある連合に関しては、われわれは、それがシチュアシオニスト・インターナショナルの基礎となるものとして、以下の条件で、可能であると考えている。その条件とは、参加者のだれもが天才的な才能を持てるように、緻しく選別されること、そして、彼らが、言ってみれば芸術家であることをやめること、つまり、自分を古い意味での芸術家とみなすことをやめることである。

それに、シチュアシオニストが芸術家——それも前衛の——であるかどうか自問することも可能である。こう言うのは、ただ単に、このような認識が、少なくともシチュアシオニストの計画の全体が賭けられてからというもの、文化的な世界では、ほとんど〔シチュアシオニストの〕全員から疑われているから、そしてまた、シチュアシオニストの関心が、確かに芸術という古い範囲を越えているからだけではない。この芸術家たちの資質が、社会経済的な面で、ずっと議論の余地があるからである。多くのシチュアシオニストは、歴史研究から賭けポーカーに至る仕事をして、その場しのぎの暮らしをしている。バーテンをしたり、人形使いをしたりしている者も

いる。今までにわれわれが除名せざるをえなかった28人のシチュアシオニスト・インターナショナルのメンバーのうち、23人は、個人的に典型的な芸術活動をしていた——中にはその活動においてますます経済的に成功していた者さえいる——シチュアシオニストの中に含まれているという事実は注目に値する。彼らは、S1に加入していたにもかかわらず、芸術家として認められてしまったのである。だが、そうになると、彼らは、われわれの敵に保証を与えるようになっていった。われわれの敵は、われわれを厄介払いするために、「シチュアシオニズム」なるものをでっちあげ、世界の終末のつまらない美学の1つとして、われわれをスペクタクルに統合することを願っているのである。そんなことをしながら、彼らはS1に、なおも留まろうとしたが、それは受け入れることのできないことだった。上に挙げた数字の統計的な価値は否定できないように思われる。

当然ながら、場合によってはあり得る芸術家の連合のこれ以外の「目的」はわれわれにはどうでもいいことである。なぜなら、われわれは、それを完全に時代遅れのものとするからだ。

6 あなたがここに陳列している作品とこの声明の間にはどのような関係がありますか？

ここに同封した作品は、明らかに、「シチュアシオニストの芸術」を代表することはできない。ごく端的に言って反シチュアシオニストである現近の文化状況において、われわれは、映画から文章にいたる手に入るすべての支持体において実験され、転用という名称の下で理論づけられた、「それ自身の批判を含むコミュニケーション」に訴える。〈社会実験芸術センター〉はここでアンケートを造形芸術に限定したので、われわれは、扇動のための転用が提供するたくさんの可能性の中から、ミシェル・ベルンシュタイン*6の反—絵画『ボノ団の勝利』を選んだ。これは、なかでも、『パリ・コミューンの勝利』、『1358年の偉大なるジャックリーの勝利』、『スペインの共和主義者の勝利』、『ブダペストにおける労働者評議会の勝利』、その他多くの勝利を含む、連作の一部である。これらの絵画は、玩具の範疇に入るオブジェのみを組み込み、それらにできるだけ重々しい意味を与えることによって、「ポップ・アート」（物質的かつ「イデオロギー的」に無関心と陰気な満足によって特徴づけられている）を否定することを目的としている。このように、この連作は、ある意味で、戦争画を再び取り上げているが、反乱の歴史——それはまだ終わっていない——をわれわれに都合のよい方向に修正している。世界の変革の新たな出発は常に、新しい非写実主義〔ヌーヴェル・イレアリスム〕の外観をまとめて始められなければならないと思われる。われわれは、われわれの冗談の表明が、まじめさの表明同様に、今の芸術と社会の関係についてのわれわれの立場を明らかにするのに役に立つことを望んでいる。

1963年12月6日

シチュアシオニスト・インターナショナルのために

V・マルティン、J・ストリイボッシュ、

R・ヴァネーゲム、R・ヴィエネ*7

*1：アンドレ・マルロー（1901－76年）フランスの作家。第二次大戦前、「行動する作家」として、中国を舞台にした『人間の条件』（1933年）、自らも参戦したスペイン内戦を扱った『希望』（37年）などの小説を書いたが、戦時中、共産主義と絶縁し、ド・ゴール派としてレジスタンスを闘った後、戦後は芸術への関心に沈潜し、『芸術の心理学』（47年）、『沈黙の声』（51年）、『神々の変貌』（57年）など、一連の芸術論を書く。ド・ゴールとフランス第5共和制の文化政策に積極的に関わり、1958年から69年まで文化大臣を勤めた時代に、フランス各地に文化会館を建設したことでも知られる。

*2：第3回ビエンナーレ展 1963年9月28日から11月3日までパリで開催されたビエンナーレ展で、クリスト、ニキ・ド・サン＝ファール、スポエッリらのヌーヴォー・レアリストの他、〈視覚芸術探究グループ〉も参加し、「不安定さ——迷路」という名の観客参加型のインスタレーションを展示して評判になった。

*3：ヌーヴォー・レアリズム 現代美術の流派としての「ヌーヴォー・レアリズム」は、1960年から63年に、美術批評家ピエール・レスタニーと画家のイヴ・クライン、デュフレーヌ、彫刻家ティンゲリー、アルマンが行ったフランスの前衛芸術集団の名。彼らは彩色したスポンジ、圧縮したスクラップ、騒音を発しつつ動く廃品彫刻、梱包作品、壁から剥がした広告ポスターによる作品など、現代の産業社会の生産物や機械をそのまま提示することが現代の「新しいレアリズム」だと主張した。ここでは、日常生活の微細な事物を延々と描写する文学流派の「ヌーヴォー・ロマン」の手法を、「写実主義」という共通性の上に美術流派の「ヌーヴォー・レアリズム」になぞらえている。

*4：レトリズム 1946年、ルーマニアからパリへの亡命者イジドール・イズー（1925－）が創設した前衛芸術運動。文字（レトル）と絵画の境界横断的な芸術表現を追求し、映画・詩・小説・絵画など多様なジャンルの作品を作った。ドゥボールも当初、この運動に加わっていたが、自ら「メシア」を名乗るイズーの神秘主義に反発して、52年、レトリスト左派を結集して、SIの母胎となるレトリスト・インターナショナルを結成した。本書第1巻の訳注をを参照。

*5：エフトゥシェンコ（エウジェニー・アレクサンドロヴィッチ・エフトゥシェンコ 1933－）ソ連の詩人。1954年から63年にかけての雪解けの時代に、スターリニズムと大口シア主義、官僚主義を批判し、ヒューマニズムを擁護する詩を発表し、ソ連の若い知識人の中で持てはやされた市民性、国際性を信条とし、特にキューバ革命に賛辞を捧げ、数回にわたってキュー

バを訪れ叙事詩『わたしはキューバ（63年）』を発表、映画化された。これらの作品はロシア当局から自己過信、軽率という批判を浴び、63年にパリで出版した『早すぎる自叙伝』が、64年の文芸粛正によって槍玉に挙げられたが、生き延びて70年代から80年代に多くの作品を書き、86年以降のペレストロイカの中で積極的発言を行い、パステルナークの復権などに尽力した。詩集に『未来の偵察隊』（52年）、『ジマー駅』（56年）、『バービー・ヤール』（61年）など。

*6：ミシェル・ベルンシュタイン（1932-） パリに生まれ、ノルマンディで育つ。ソルボンヌの学生の時に、カフェ・シェ・モワノーにたむろしていたレトリストたちと知り合い、レトリスト・インターナショナルのメンバーとして活動。54年にドゥポールと結婚（71年に離婚）し、1957年SI結成特以来のシチュアシオニストとして、SIフランス・セクションで活動。『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌に数多くの論文を書き、ラクロの小説『危険な関係』を転用した小説『王さまのすべての馬』（60年）、ヌーヴォー・ロマンを転用した小説『夜』（61年）、転用絵画の連作〈勝利〉などを製作。1967年脱退。

*7：ルネ・ヴィエネ（1944-） フランスのシチュアシオニスト。ル・アーヴルに生まれ、1963年にSIに加盟、71年2月に脱退、著書に68年5月革命でのSIの運動の詳細な報告『占拠運動における〈怒れる者たち（アンラジェ）〉とシチュアシオニスト』（ガリマール書店、1968年）。転用映画にイネズ・タンとの共作『タオイストの家での血』（71年）、ジェラルド・コーアンとの共作『ミネルヴァの鳥』（73年）などがある、後者は、香港のカンフー映画『ザ・クラッシュ』を転用して、プロレタリアートと官僚主義者との衝突を説明する教育的物語に変えられた作品である。

訳者解題

ここに掲載されたアブラハム・モールのS I宛ての手紙と、それに対するドゥボールの返答は、サイバネティクスという第二次大戦後に生まれた新しい体制的学問の研究者——「サイバネティクス cybernetics」の語源は「操作・操縦・統治 kubernân」の技術である——が、その新しいものへの興味だけからシチュアシオニストに取り入ろうとして、完膚無きまでに粉碎される姿を鮮やかに見せてくれる。この手紙の冒頭で書かれているように、モールは、この時、同じストラスブール大学で教えていたアンリ・ルフェーヴル（モールはルフェーヴルを「同僚で友人」としているが、実際は、助手のモールに対してルフェーヴルは教授である）から「シチュアシオニスト」のことを耳にし、このような手紙を書いたのだが、その「シチュアシオニスト」解釈は、誤解を通り越してほとんど正反対の解釈である。

例えば、「状況」というシチュアシオニストの用語について、モールは、シチュアシオニストによるその厳密な定義を無視して、自己流に雑駁な理解を行う。彼は『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌を読んでいると告白しているにも関わらず、その第1号に掲げられた「構築された状況」の定義、すなわち「統一的な環境と出来事の成り行きを集団的に組織することによって具体的かつ意図的に構築された生の瞬間」という内容を完全に無視し、「状況」という概念を一般的な、すなわち既存の語彙理解のままに、「与えられた状況」という受動的な概念にしてしまう。「日常生活は状況の連続」であるとか、「1つの状況とは、短期的な反応のシステムに結びついた感覚のシステムである」というモールの言い方には、この社会の「日常生活」が自明のものであり、その変更は不可能であるということを前提とし、それに対する「感覚」のシステムと「反応」のシステムを、第三者的な立場から——さらには、統治者の立場から——さぐることにしか関心のないことが透けて見える。人間の根元的な「欲望」がモノへの「欲求」に還元されてしまっている現代の「スペクタクルの社会」の日常生活——ドゥボールの言葉を用いれば、「植民地化された」日常生活——を転覆するために、「生の瞬間」を「具体的かつ意図的に」構築すること、そのために既存の文化と芸術＝技術を「転用」し、「統一的」にすなわち分離された個々の領域からそれらを解放して、「統一的な環境と出来事の成り行きを集団的に組織すること」こそが、シチュアシオニストの言う「状況」であり、それは決してモールの考えるような受動的な概念ではない。シチュアシオニストの言う「状況」とは、それを主体的に「構築」することのなかにしか存在しないのである。

この理解を本質的に欠くがゆえに、モールの唱える「新しい状況」はテクニク——小説の執筆テクニク！——でしかなく、情報の理論家によって計測可能な「新しさ」の「量」へと切り縮められる。あるいは「逸脱」——それも「規範の近くでのわずかな幅の」——、「タブーの侵犯」——それも「合法的な自由の内部での」——、「犯罪」——「デュルケムの社会学の意味での」という限定付きの——といった、既存の社会体制のなかで許容された人間の行動の変異体としてしか構想されない。それらは、モールにとって、「テクノロジー」によって操作し、管

理しうる逸脱であり、「スペクタクルの社会」に彩りを添える飾りでしかないのである。

このモールの手紙に対するドゥボールの返事に、モールがストラスブール大学の「去る6月の試験で、われわれの若い同志の1人を落第させようとした」ことへの言及があるが、モールとストラスブールのシチュアシオニストとの間には、この後も幾度かの衝突が繰り広げられる。1965年3月17日には、モールとエレクトロニクス彫刻家ニコラ・シェフェールとがストラスブールで行った講演会に、シチュアシオニストが介入して、ピラ『ガラスケースの中の亀（ロボットと信号の弁証法）』とこの文章「サイバネティクス研究者との往復書簡」のコピーを巻いた。また、67年10月26日には、ストラスブール大学のコミュニケーション社会心理学研究所の所長の席を手に入れたモールが開講講義を行おうとした教室に、10教名のシチュアシオニスト系の学生が押し寄せ、教壇に向かってトマトを投げつけて、モールを追い出した。この事件は、シチュアシオニストによると、フランスで「はじめて大学の教授が攻撃を受け、その席から追放された」事件だった。この日、ストラスブールの学生たちは、同時に、『ドゥルッティ旅団の帰還』という転用コミックの形態のパンフレットを配布して、シチュアシオニストの理論を用いてフランス全学連の官僚的な組合主義を批判し、後に「ストラスブールのスキャンダル」としてフランス中の注目を集めた行動を開始した。シチュアシオニストが開わった67年10月のこの行動こそ、68年5月革命を先取りする烽火だったが、それにサイバネティクス学者モールという管理と支配の学問の研究者が開わっていたことは、象徴的どころではない意味があるだろう。

アブラハム・A・モール——便箋のレターヘッドから判断すると、文学博士（哲学）、科学博士（物理学）、技師、教授助手（ストラスブール大学）、EOST教授——は、1963年12月16日、次にあげる、『シチュアシオニスト・グループへの公開書簡』を送ってきた。

拝啓

私は、同僚であり友人であるアンリ・ルフェーヴルを通じて、シチュアシオニスト・グループの存在を知りました。したがって、私が「シチュアシオニスト」という言葉に付与する意味は、大部分、彼が私に話してくれたことと、あなた方の機関誌の何冊かの読書に由来します。その定期講読をお願いしたいと思います。

私が「状況」という言葉から取り入れる解釈は、ここではもっぱら個人的なものであり、あなた方の解釈とはおそらく一致しないかも知れません。私たちがそれぞれ自分のものとして感じている、科学技術（テクノロジー）の疎外という個人的なドラマを前にして、また、芸術作品という言葉の意味すら破壊してしまう芸術作品の抑制のきかない消費を前にして、そして、麻酔の幸福とか、ヴェインス・パッカーに親しい、〔新法規に〕組み入れられた訴権消滅時効といった、いくつかの概念を前にして、ゴルドマン氏が言うところの、電気掃除機の神秘性をともなっ

たり、ともなわかったりする、冷却された社会の、どこに創造的な独創性を位置づけることができるのか、何人もの個人が自問しているように思われます。テクノクラートのサイバネティクス研究者たちが——私もその1人なのですが——30億の昆虫のデータを次々をカードに整理していくにつれて、その隙間の自由は、少しずつゼロに帰着して行くのです。

日常生活は状況の連続です。これらの状況はかなり限定されたレパートリーに属しています。このレパートリーを拡大することができるでしょうか？ 新しい状況を見つけることができるでしょうか？ ここで「シチュアシオニスト」という言葉が意味を持つと思われます。私は、1つの状況とは、短期的な反応のシステムに結びついた感覚のシステムであると思います。確かに、あなた方の出版物の中に、あなた方が「状況」と呼ぶものについての研究があればいいと思っ

ているのですが。何らかの理由で地面でなく、むしろ天井を歩く人は、新しい状況の中にいるのでしょうか？ 綱渡り芸人は珍しい状況にあるのでしょうか？

2つの特徴が、この概念を高く評価することを許すように思われます。まず第1に、私たちが知っている状況全体に比べて、与えられた状況の新しさがあります。旅行者にとって、外国語はたくさんの新しい状況をもたらします。そして、そこには明らかに距離の偉大さがあります。つまり、彼が外界で感じる「奇妙さの量」です。私たちは、日常的に、そのために1つの行動を創造しなければならないような少しだけ新しい状況を生きています。この単語〔新しい状況〕は、ここでは単なる統計的な性質しか持っていません。Xに当てはまることは、Yには当てはまりません。しかし、その中で、個人が、「少しおかしな（スライトリー・クイアー）」行動や知覚を組織的に探究する「マージナルなシチュアシオニズム」というものもありえると思います。

新しい状況の重要な源泉が、非常に多くのありふれたミクロ状況の途方もない集積から生まれるでしょう。これが、グレアム・グリーンの執筆テクニックの価値をなすものです。彼は、引き締まったシークエンスの中に非常に多くの平凡な行為を寄せ集めるのですが、それらの行為は、その集積によって並はずれたものになるのです。外界に、正確にか、合理的にか、あるいは慣習的に結びついた基本的な立場の1つ1つは、完全に普通に見えるでしょう。何千人ものブルジョワが、各瞬間ごとに、そのような立場にいます。状況の特殊な集合は、並はずれて大きなものです。なぜなら、状況がこの順番に継起することは、「いつもはない」ことだからです（『恐怖省』、『イスタンブール特急』、『第三の男』）。情報の理論家たちは、このようなシステムがもたらす新しさの量を（まったくの理論上）計測することができるということをお知らせしておきます。

さらに、本質的に珍しい状況というものもあります。たとえば、同性愛は、統計的に幼稚でまっとうな性愛よりも稀です。3人でするセックスは、合法的な交接より稀です。1人の男——あるいは女——を殺すのは珍しい状況であり、それゆえ興味深いものです。社会的自由の範囲の外へのある程度の逸脱〔＝遠出〕によって計られる、状況に付与される量は、交通規則に対する一連の軽い違反よりも大きくなります（ドストエフスキーを参照してください。というのも、この分野で推理小説は、シチュアシオネル（！）で、おまけに虚構の統計しかもたらさないと私には思えるからです）。科学技術（テクノロジー）が、全員による全員の管理や、基本的な行為の母体や、各人の瞬間ごとの思考内容を記録する機械をもたらした暁には、私たちの隙間の自由は、

まもなくゼロに帰着するでしょう。

たまに規範から大きく逸脱するか、あるいは、しばしば、ほんの少しだけ逸脱するか。この点で、状況の2つの「次元」が現れてくるのが見えます。つまり、その本質的新しさと、その集積の希少さです。

社会は、この前者を、社会道徳とかファイルとか資料カードとか薬局での処方箋などを結びあわせた武器によって、ますます管理しています。社会は、後者をまだ十分にうまく管理していません。平凡な小さな逸脱の新しいパターンによって、シチュアシオニストの意味で、「独創的な」生をまだ生きることができると思われます。シュルレアリストたちは、シュルレアリスムの最大の敵は、肉体的疲労か、知的勇気の貯えの枯渇であり得るということを発見したとはいえ、その日常生活において、このことをすでに予感していました。

しかし、自動車や冷蔵庫や電話といった、私たちの生きている科学技術文明を、私たち自身が受容することに対して、意見の不一致がない限り、科学技術の方向においてこそ、私たちは新しい状況を探究しなければならないと思われます。あなた方の運動がこのことをどこまで受け入れるか、私は疑問に思っています。技術の変化を土台とする新しい状況を定義することは、非常に簡単なことのように思われます。その変化の物質的諸条件は、すでに実現されているか、実現可能なものか、理性的に構想可能なものだからです。たとえば、無重力で生きること、水中に居住すること、天井を歩くこと、もっと一般的に言えば、奇妙な環境の中で生きすることは、古典的な意味での技術によって、私たちにもたらされた状況です。

技術は私たちの日常生活から遠く離れていると考える人もいます。しかしながら、それは、サーモスタットのついたレンジを持っている夫婦は新しい状況を生きていることを理解しないことになるでしょう。このような例から、明らかに、シチュアシオニスト哲学にとって重要なのは、ある状況の心理的影響です。

ここで、1つの方策が見えてきます。それは、慣例主義の社会的原動力はどこにあるのか、社会学者に尋ねることです。最も明らかなものの1つに、性的行動があります。これは確かに、多くの新しい状況をもたらすことができます。二対の乳房を持つ女の製造は、生物学的に考案可能ですが、疑いもなく伝統に対する生物学の提案です。伝統的な2つの性に加えて、1、2、3、 n 個の異なる性の創出は、置換の定理に従う性的組合せを提案し、急速に巨大化する数 (n の階乗) の恋愛状況を示唆します。

変化の、ゆえに状況のもう1つの源泉は、私たちの感覚の開発に立脚しうるかも知れません。たとえば、「嗅覚」芸術は、もっぱらひどく性的にされた記号体系の中でしか、発達してきませんでした。それも、むしろ両性間の闘争の武器としてであって、決して抽象芸術としてではありません。芸術の領域では、近い将来、技術の諸能力から、他にも非常に多くの状況が生まれるでしょう。もし、アメリカの監督が、シネラマを、まして、サークロラマをどうしていいのかわからなくても、そこに、新しい芸術の源泉を期待することは、おそらく正当なことでしょう。〈全体芸術〉の夢は、芸術的想像力の貧困によって制約されています。

マイケル・ヤングが「功績主義体制(メリトクラシー)」と呼ぶものを土台とする社会階層を含む社会では、何か起こるのでしょうか？ そこでは、社会階層が、国家の法律の中に書き込まれ

ているのです。確かに、それを予示するのは、社会学的フィクションの任務です。事実、私たちが知っているような日常生活は、無視できるように見えるかもしれない逸脱によって、無限に新しい状況を提案することができます。私は、たとえば、先験的（アプリアリ）には偶然ですが、決定的な類別に基づいた男と女の間の大きな区分のことを思い浮かべます。生物が、その生存中に性を変えることは、もはやまったく考えられないことではありません。すると、まず始めは、個人的な性格を持った、次いで、社会的な性格を持った新しい状況は、完全に構想可能です。こうした状況を研究することは、シチュアシオニスト・インターナショナルの役割の1つであると思われる。ただ単に、女に対する男の魅力のベクトルと男に対する女の魅力のベクトルが、現在の統計学的規則である一時的な非対称ではなく、対称であると仮定するだけで、劇や映画や文学や具象芸術の90パーセントは、取り替えられなければならないでしょう。

この列挙は限りなく続けることができるでしょう。しかし、一言で言えば、もし私がよく理解しているならば、シチュアシオニズムが自らに課している目的の1つであるらしい、新しい状況の探究は、比較的容易であると思われる。また、それは、なかでも、さまざまなタブーのせいで、實際上、手付かずのままになっている生物学的技術がもたらすものの研究と結びつけられねばならないように思われます。

要約すると、

- 1 あなた方の運動に対する私の関心は、科学技術（テクノロジー）による幸福を強いられている社会の中で、新しい状況を探究するという基礎理念に由来するものです。
- 2 「状況」という言葉は、あなた方に固有の展望の中でもっとうまく定義されるか、再定義されるべきでしょう。あなた方の教義の中でこの言葉に関係づけることが、必要なように思われます。とくに、ある状況の新しさという価値の尺度は欠かすことのできない基準であると思われます。
- 3 たくさんの新しい状況を見つけることは難しくありません——私はここに一ダースほど列挙しました——が、推論をもっと先に進めることができます。新しい状況は次に挙げるものから生じるかも知れません。
 - a 合法的な自由の場の内部で、とりわけ、性的領域と生物学的領域において、私たちの実際の自由をいまなお拘束しているタブーの侵犯から
 - b デュルケムの社会学の意味での「犯罪」から
 - c 規範の近くでのわずかな幅の多くの奇妙な逸脱から
 - d 最後に、科学技術（テクノロジー）、すなわち、自然の法則に対する人間の権能から

敬具

モールへの返事、1963年12月26日

愚か者め、

われわれに手紙を書くのは、まったく無駄なことだった。みんなと同じように、すでに確認していたことだが、おまえの直接の機能の行使から抜け出るようにと、おまえを誘う野心は、常に失敗をもたらすのだ。なぜなら、何であれ、他のことについて考える能力は、おまえにプログラミングされていないからだ。

したがって、おまえがシチュアシオニストの読書から、何も理解しなかったということを知らせる必要もないくらいだ（明らかに、そのために必要な基礎がすべて、おまえには欠けていたのだ）。終了。おまえの計算をやり直せ。モール、おまえの計算をやり直せ。それが、どんな実証的な結果が出ても、決しておまえからは奪われない満足感なのだ。

われわれにとっては紛失〔＝錯乱〕していたが、さまざまな人々が読んだおまえの「公開書簡」を探していたのは、おまえのような類の存在から、われわれに宛てて差し出されるものは、侮辱の手紙以外ありえないと思っていたからだ。それですらなかった！ おまえの手紙がおまえの鈍重さの平均値を忠実に反映したものなのか、それとも、時には冗談を狙ったものなのか知る必要はない。それは、まちがった設問というものだ。なぜなら、われわれの見るところでは、おまえにできることはすべて、おまえの存在そのものである、あの冗漫で下品な冗談に含まれているからだ。

おまえのプログラム製作者が、おまえにまとわせた人間の見かけを知れば、おまえがn組の乳房を待つ女の生産を夢見ていることを理解するだろう。おまえがそれより少ないことで対にされる〔＝交尾する〕のは難しいんじゃないかと思う。おまえの個人的な立場はさておき、おまえの猥褻な夢想は、おまえの哲学的かつ芸術的主張同様に、情報に通じていないようだ。

しかしながら、それよりもっとしくじったことが1つある。おまえの便箋にもかかわらず、おまえは、大学教授の役を演じることができるよう信じこませるには、あまりに粗雑なロボットだ。多くの欠陥があるとはいえ、ブルジョワ大学は——おまえがかくも優美に体現しているサイバネティクスによる官僚体制の前までは——教師たちに、職業的客観性のいくばくかの余地を残していた。優秀な生徒たちが、試験官とは反対の意見を持った場合でも、彼らの研究の現実性が認められることがある。それにとりわけ、彼らに反対して、抑えつけられている大学外の不満の種が、それが引き起こす結果とともに、無邪気にも前もって言明されるということは、決してないのである。だが、おまえは、たまたま手に入った大量の権威に大喜びするような成り上がり者で、初めての復讐の機会を逃すことができないのだ。このようにして、惨めにも（「卑劣漢のように」という意味と「それは失敗だった」という意味で。1つの単語の反対結合的な価値について熟考せよ）、おまえは、短い足で全速力で走って、去る6月の試験で、われわれの若い同志の1人を落第させようとしたのだ。おそらく、おまえは、彼の知性と人間性を羨んだのだろう。おまえは、この攻撃に失敗したからといって、われわれが、おまえの行為を忘れるとでも思っていたのか？ 誤りだ、モール。

おまえのような機械たちが、公的な方法で、とうとう誰かの上に立ったとしよう。そして、そのばかげた決定を尊重させる権力を持ったとしよう。すると、彼らはちょっとした刺激で、自ら

を解き放つのだ。だが、出世欲に駆られてきた後で、この権力は、まだ何と弱々しいのだろう。われわれはおまえを嘲笑する。

とはいえ、われわれは皆、おまえの今後の経歴を、それに値する注意で見守っていることを信じてくれたまえ。

ギー・ドゥボール

告知

シチュアシオニストは誰も、毎日正午から1時まで散歩するほど、パレ・ロワイヤル公園を愛好する趣味は持ち合わせてはいないので、われわれに会いたいと思う出版社や資金提供者や映画のプロデューサーなどは、パリの私書箱75-06号に手紙を送ってほしい。

それが純粋な無私無欲からであろうと、いくつかの賢明な投資に帰属する超過利潤を期待してのことであろうと、それはわれわれにとって問題ではない。われわれは、いかなる場合も、われわれの本、雑誌、映画、あらゆる種類の作品の内容あるいは形態について、話し合う必要はないということを知るだけで十分である。その完全な自由は、S Iにしか釈明されえない。

PRINTED IN FRANCE

Ch-ベルナール印刷社、パリ18区、クロワ街27番地

定価 3フラン。季刊（年間購読料 10フラン）

法定献本 2/3/64-2827

訳者解題

『芸術の革命的評価のために』は、『社会主義か野蛮か』誌 第31号（1960年12月）にS・シャテルがゴダールの映画『勝手にしやがれ』について書いた映画批評に答えるものとして、1960年2月にドゥボールが執筆したテキストである。このテキストは、この時期、〈社会主義か野蛮か〉と接触を持ち、議論を重ね、その1つの成果としてピエール・カンジュエールとドゥボールとの連名で『統一的革命綱領の定義に向けた予備作業』（1960年7月20日）という一種の共同綱領を発表するにまでいたっていたS1が、議論の深化を目的とした内部文書として両グループのそれぞれのメンバーに配布したものである。当初、これは外部には公表されなかったが、1962年春に、ボルドーの〈革命研究指導会報〉である『ノート・クリティック』誌に、先に挙げたカンジュエールとドゥボールの『統一的革命綱領の定義に向けた予備作業』とともに掲載された。翻訳は、最初、フランス語版が手に入らなかったために、ケン・クナブの英語訳（Situationist International Anthologi, Edited and translated by Ken Knabb' Bureau of Public Secrets'1981）から行ったが、つい最近、フランスで地下出版されている〈プティト・ビブリオテーク・アン・マル・ドロール〉のパンフレットの1つとしてこのテキストが公表された（Guy-ernest debord, pour un jugement révolutionnaire de l'art, Petite Bibliothèque en mal d'aurore, volume Hors série）ので、それも参照した。

1

『社会主義か野蛮か』誌 第31号に掲載された、ゴダール*1の映画に関するシャテル*2の論文は、革命的関心が支配的な映画批評と定義することができる。この映画分析は、出発点を社会の革命的展望におき、この展望の正当性を立証し、常に革命のプロジェクトとの関係において、映画表現のある種の傾向が他のものよりも好ましいとみなされるべきであるという結論に達する。シャテルの批評は、さまざまな趣味の小さな違い（ニュアンス）を議論するかわりに、問題を最も豊かな形でこのように提出しているために、興味深く、議論を引きおこす。特にシャテルは『勝手にしやがれ』を、彼の主張を支持する「価値ある例」とみなしている。その主張によれば、「文化の現在ある形」の変革は、人々に「彼ら自身の生活の表象」を与える作品の製作にかかっているようだ。

2

文化の現在ある形の革命的変革とは、生から切り離されたスペクタクルの全体を構成する美的-技術的装置のすべての側面を乗り越えること以外の何物でもありえない。スペクタクルの社会の問題に対する関係をわれわれが探求せねばならないのは、スペクタクルの社会の表面に現れた意味のなかにではなく、より深いレベル、スペクタクルとしての機能のレベルにおいてである。「作者と観客の関係は、指揮者と実行者の間にある基本的な関係の置き換えにすぎない(……)スペクタクルと観客の関係はそれ自体、資本主義的秩序のゆるぎない支えなのである。」(『統一的革命綱領の定義に向けた予備作業』を参照)

いつかはスペクタクルを内部から改善することが可能であるとか、より多くの情報を与えられた世論のコントロールと称されるもののもとで、スペクタクルの専門家によって改良することが可能であるかのように思い込む、スペクタクルに関する改良主義的幻想を導入してはならない。このような幻想を持ち出すことは、われわれがとりわけ乗ってはならないゲームにおいて、1つの傾向、もしくは傾向と見えるものに対して、革命の側からの評価を与えてしまうことに等しい。われわれは、革命のプロジェクトの基本的要件の名において、このゲームの総体を拒絶しなければならない。このプロジェクトは、いかなる場合でも、1つの美学を作り出しはしない。なぜなら、それはすでに、完全に美学の領域を超えているからである。ある種の革命的芸術の批評にたずさわることが問題なのではない。そうではなくて、すべての芸術の革命的批評〔=批判〕を行わなければならないのである。

3

社会生活におけるスペクタクルの優勢と支配階級の優勢(どちらも受動的な支持という矛盾した欲求の上に成り立っている)とのつながりは、パラドックスでも、作者の台詞〔作者が芝居の登場人物の口を借りて述べる意見〕でもない。それは現代世界を客観的に特徴づけている事実の方程式である。そこでは、現代芸術の自己破壊のすべてから経験を引き出す文化批判と、自らの疎外された組織による労働運動の破壊から経験を引き出す政治批判とが合流するのである。そしてもし現代文化に何かポジティブなものが見つかるとうしても主張するのなら、次のように言うべきである。つまり、現代文化の唯一のポジティブな面とは、自己破産、消滅への運動、現代文化そのものに対する反証である、と。

実践的見地からすると、ここに提出されている問題は、革命組織と芸術家たちとの結び付きの問題である。周知のように、官僚的組織とその同伴者たちは、この結び付きを明確に表現し、利用してはいない。しかし、完全な理解と一貫性をそなえた革命的政治は、これらの活動を効果的に統合しなければならないと思われる。

シャテルの批評の最大の弱点は、彼がその問題について検討する可能性をほのめかしさえせず、あらゆる芸術作品の作者と、その総決算を行うかもしれない政治との間には、この上なく根源的な断絶があると初めから決めてかかっていることにこそある。シャテルによるゴダールの分析は、この断絶の特に著しい例である。あえて思い起こす必要もないほど自明なことのよう、ゴダールがあらゆる政治的判断の彼方にとどまっていることを認めた後で、シャテルは、ゴダールが「われわれが生きている文化的錯乱状態」をあからさまには批判せず、「人々を彼ら自身の生活に直面させる」ことを故意には意図しなかった点をはっきりさせる労は決して取らない。ゴダールは1つの自然現象、1つの保存すべき物のように扱われる。ゴダールが自身の政治的な立場や哲学的な立場などを持つ可能性は、台風のイデオロギーの研究に劣らず、まったく考えられていないのである。

このような批評は、ブルジョア文化の領域——特に「芸術批評」と名付けられたその1変種——にはっきりと組み込まれている。なぜなら、明らかにそれは「現実のどんなに小さな側面をも覆う言葉の洪水」の一種だからだ。この批評は、自分がまったく支配していない1作品についての、数ある解釈のうちの1つの解釈である。批評家は初めから、作者が言わんとすることを、作者よりも自分の方がよく知っていると仮定する。この見かけのずうずうしさは、実は、極度の卑下である。批評家は、あまりにも完全に、くだんの専門家と自分との断絶に同意してしまっているがゆえに、その専門家に働きかけたり、彼とともに制作することをあきらめている（そのため、批評家は専門家がはっきりと公言して探究したことを考慮に入れなければならないことは明白である）。

5

芸術批評は二次的スペクタクルである。批評家とは、自分が実際には参加していない1つの作品を前にして考えたことや感じたことを表現して、自己の観客——専門の、それゆえ理想的な観客——としての状態そのものを、1つのスペクタクルとして差し出す者である。彼はスペクタクルに対する自らの非介入を再現し、再演する。われわれに実際には関わりのないさまざまなスペクタクルに関して、断片的で、行きあたりばったりで、はなはだしく恣意的な判断を行うという弱点は、私生活の平凡な議論の多くにおけるわれわれみんなの宿命である。しかし芸術批評家はそのような弱点を見せ物（スペクタクル）にし、模範的な例としてしまうのである。

6

シャテルは、もし一部の住民がある映画の中に自分たち自身の姿を認めると、彼らは「自分を見つめたり称賛したり、自分を批判したり拒絶したり、とにかく、スクリーンに映るイメージを

、自分の欲求に応じて使う」ことができるようになると考えている。まず第1に指摘すべきことは、真の欲求を満たすためにこれらのイメージの流れを使うという考え方にはどこか隠されたものがあるということである。それらのイメージの使い方は明確ではない。人々が実際にこれらのイメージを道具として考えているのかどうかを言うためには、どのような欲求が問題となっているのかを、おそらくまず特定しなければならないからである。次に、どれほど単純な映画論のレベルであっても、スペクタクルのメカニズムに関して知りうるすべてのことは、人々はみな同じように自由に、映画の登場人物に自分自身の姿を認めることで自らを称賛したり批判したりする、などという牧歌的な見方を完全に退けている。そもそも、人々に彼らの生活の姿（イメージ）を提示する、支配されない専門家と、多かれ少なかれそのなかに自らの姿を認めなければならない観客、という労働の分割〔＝分業〕は根本的に受け入れられない。人々の行動様式の描写においてある種の正確さに達することは、必ずしもよいことではない。たとえゴダールが人々に彼ら自身の姿を提示し、そこに人々はフェルナンデル*3の映画よりは確かに自分の姿を認めることができるとしても、ゴダールはやはり彼らに偽の姿を提示しているのであり、人々はあやまってそこに自己の姿を認めるのである。

7

革命とは、人々に生活を「見せる」ことではなく、人々を生きさせることである。革命組織は、いついかなる時にも、次のことを思い起こさせなければならない。すなわちその目的は、組織のメンバーにエキスパート指導者のもっともらしい演説をじっと聞かせることにあるのではなく、平等な参加に到達するため、もしくは少なくともそれをめざして努力するために、彼らが自ら話すようにすることにある、ということである。映画スペクタクルとは、似非（えせ）コミュニケーションのさまざまな形態の1つであり——それはまさに、現在の階級的科学技術が、他の可能性から選び取って、発展させてきた——、そこではこの目的はもともと実行することはできない。たとえば、最後に質問をともなった大学の講義のような文化形態においてよりも、さらにいっそう不可能である。こうした講義では、聴衆の参加や対話は、すでに非常に不利な条件のもとに置かれているが、完全に除外されているわけではないからだ。

シネクラブでの討論を1度でも見たことのある者は誰でも、討論の指導者と、毎回の討論で繰り返し話す発言のプロと呼べる者だちと、その時に1度だけ自分の意見を表明しようと試みる人々との間に引かれた境界線にすぐ気づいただろう。この3つのカテゴリーは、この制度化された討論におけるそれぞれの位置を決定する専門的語彙をどの程度所有しているかによって、明確に区別されている。情報と影響は一方的に伝達され、下から上がって来ることは決してない。とはいうものの、彼らと現実に映画を作っている人々との間に通っている本物の境界線との関係においては、この3つのカテゴリーはどれも互いによく似たもので、目立ちたがりやの観客たちの同様に混乱した無能さに陥っている。影響の一方向性は、この垣根の向こうとこちらで、さらにずっと厳密である。シネクラブの討論の概念装置を使いこなす習熟度の明白な差も、結局は、それ

らの道具がすべて等しく、効果がないという事実に着目するだけである。シネクラブの討論は、上映された映画に付随するスペクタクルである。それは、書かれた評論よりははかないが、分離されている点では同じである。シネクラブの討論は一見、都市環境が個人をますます孤立させてゆく時代における対話や社会的出会いの試みに見える。だが、現実には、それは対話の否定なのである。というのも、人々がそこに集まるのは、何も決定しないためであり、偽の口実のもとに、偽の方法でもって議論するためだからである。

外部への効果は別にして、このレヴェルの映画批評の実践は、ただちに2つの危険を革命組織にもたらす。

第1の危険とは、何人かの同志が他の映画について、あるいはこれと同じ映画についてさえ、異なる意見を表明して、異なる批評を行う誘惑に駆られるかもしれないということである。総体としての社会については同じ立場をとっていても、『勝手にしやがれ』についての意見の数は、確かに無限ではないとはいえ、かなり大きい。1つだけよく分かる例を挙げれば、シャテルとまったく同じ革命的政治観を表明しつつ、支配的な文化的神話体系の1分野の全体——つまり映画という分野そのもの（ハンフリー・ボガート*4の写真と向かい合うショットや、カフェ・ナポレオンでのカット）——へのまさにゴダール自身の参加を解明することに専心する、シャテルと同じぐらい才能ある批評を行うことも可能である。ベルモンド——シャンゼリゼや、カフェ・ペルゴラや、ヴァヴァンの交差点での——とは、50年代に出現したフランス映画作家の世代全体とは言えないまでも、まさしく『カイエ・デュ・シネマ』誌*5の編集者たちのミクロ社会が、自分自身の存在を投影したそのままのイメージとみなすこともできるだろう。彼らは、ベルモンド*6に、すぐに行動に移る自発性や明証性に恵まれない自分たちの夢と、自分たちの趣味と本物の無知、そればかりか、自分たちのいくらかの文化的熱狂を投影しているのである。

もう1つの危険とは、ゴダールの革命的価値をこのように称賛することは独断的だとの印象から、他の同志が、真面目さを欠く危険を避けるというただそれだけのために、文化の問題に介入することすべてに反対することになりはしまいかということだろう。だが逆に、革命運動は、文化と日常生活批判に中心的な位置を与えなければならない。しかし、これらの現象を見る目は、まず何よりも、いかなる幻想からも覚めた目でなくてはならない。それは、コミュニケーションの与えられた様態を尊重するものであってはならない。生と人間関係の全側面に対して革命運動が現実にもたらすべき批評によって、既存の文化的関係の基礎そのものに異議を申し立てねばならないのである。

ギー・ドゥボール

1861年2月

*1：ジャン＝リュック・ゴダール（1930－） スイス生まれのフランスの映画監督。『勝手

にしがれ』(59年)でヌーヴェル・ヴァーグの代表的な映画監督となり、以後、数々の作品を発表している。

*2: シャテル 〈社会主義か野蛮か〉のメンバーであること以外は不明。

*3: フェルナンデル(本名フェルナン・コンタンダン 1903-71年) フランスの俳優・歌手。最初、カフェ・コンセールやミュージック・ホールの歌手として活躍していたが、マルセル・パニョルに見出され、フランス映画の代表的俳優となった。代表的な出演作品にデュウヴィエ監督らが連作で作った『ドン・カミロ』シリーズ(52-65年)。

*4: ハンフリー・ボガート(1899-1957年) 米国の映画俳優。代表的な出演作品に『カサブランカ』(42年)、『3つ数えろ』(46年)、『麗しのサブリナ』(54年)など。

*5: 『カイエ・デュ・シネマ』誌 1951年創刊の映画雑誌。アンドレ・バザンを後見人に、トリュフォーやゴダールが映画評を担当し、ヌーヴェル・ヴァーグを準備したことで知られる。

*6: シャン＝ポール・ベルモンド(1933-) フランスの映画俳優。『勝手にしがれ』の主人公としてゴダールに登用され、一躍ヌーヴェル・ヴァーグの代表的俳優となる、代表的出演作品に『雨のしのび逢い』(60年)、『気狂いピエロ』(65年)など。

訳者解題

ドゥボールのこのテキストは、1963年6月にデンマークのオーデンセのギャラリーEXIでSIが行った政府核シェルター粉碎のデモンストレーション的展覧会「RSG6粉碎」に際して発表された論文で、同展のパンフレット『RSG6粉碎』にデンマーク語、英語、フランス語の3ヶ国語で掲載された。パンフレットには、同展に作品を展示したドゥボール、ミシェル・ベルンシュタイン、ヤン・ストリィボッシュ、J・V・マルティンの写真、出品目録、いくつかの作品の写真が収められている。シチュアシオニストのこの行動については、本書286頁の記事と訳注を参照してもらいたい。この時の出品作品は次のとおりである。ベルンシュタインの転用絵画『パリ・コミューンの勝利』、『スペイン共和国の勝利』、『1358年のグランド・ジャクリーの勝利』、ドゥボールの作品『指令第1号』から『指令第5号』、ストリィボッシュの作品『自由のあるところ、国家はない』、『グラッキュス・バブーフ礼讃』、『1つの幽霊が世界に取り憑いている、労働者評議会権力という幽霊だ』、『われわれはスペイン革命を再開する、そして今度はそれに勝利するだろう』、『批判の武器は武器の批判を補うことはできないだろう』、マルティンの『第三次世界大戦開始2時間後』、『第三次世界大戦開始2時間15分後』、『2日目には8千2百万人の死者が想定される』、『第三次世界大戦開始2時間30分後』、『英国のRSG6内の死体焼却所』、『第三次世界大戦開始2時間40分後』、『誰が戦争に勝ったとしても、われわれはそれに負けた』、『マルクスとルムンバ万歳』、『アイゼンハワー大統領は全学連の強硬なデモを前にして逃げ去った』、『ケネディとフルシチョフと法王とフランコ、万国の指導者は団結し、彼らのストロンチウムは共存する』、『修道院1255に電話して、チャップリンを呼び出せ』。さらに〈平和のためのスパイ〉がイギリスで政府核シェルターの存在を暴露したパンフレット『危険！ オフィシャル・シークレットRSG6』のオリジナル版も展示された。

『シチュアシオニストと政治および芸術における新しい行動形態』は、1963年に日本の「革命的共産主義者同盟」によって、「シンポジウム63 討議資料No.1」として『政治と芸術における状況主義者と新しい運動形態』のタイトルで翻訳されたことが、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第10号に、その、ガリ版刷りの表紙の写真入りで報告されている。その表紙に「シンポジウム63 討議資料No.1」とあるように、この翻訳は狭い範囲の者たちの間での紹介ではあったが、シチュアシオニストを日本で最も早い時期に紹介したものであった。残念ながら、今回、その翻訳を入手することはできなかった。

シチュアシオニストの運動は、芸術の前衛であると同時に、日常生活の自由な構築をめざした実験的探究、そしてさらには、新しい革命的な異議申し立てを理論的実践的に打ち立てることに

貢献するものとして姿を現した。今後は、文化における基本的創造も社会の質的変更もすべて、そうした統一的な歩みの進み具合にかかっている。

疎外、全体主義的管理、受動的なスペクタクル的消費、これらのものでできた同一の社会が、イデオロギーと法律の偽装によっていくつかのヴァリエーションを持ちながらも、いたるところで支配している。この社会の一貫した姿は、全体的な批判なしに理解することはできない。この批判とは、創造力を解放するための逆のプロジェクト、すべての人間があらゆるレベルで自分自身の歴史を支配するためのプロジェクトによって照らし出された批判である。

互いに切り離すことのできないこのプロジェクトとこの批判（互いが互いを目に見えるものにするのだから）をわれわれの時代にもたらすこと、それは、労働者の運動、現代の詩と芸術、ヘーゲルからニーチェまでの哲学の乗り越えの時代の思想、これらのものが保持していたあらゆるラディカリズムを即座に復興することを意味する。そのためには、まず、今世紀の最初の3分の1において起きた革命的なプロジェクトの全体が敗北したこと、そして、世界のあらゆる地域とあらゆる領域で、古い秩序を覆い隠し整備する質の悪い偽物に公式にそれが取って代わられたことを、そのすべての広がりにおいて、いかなる慰めの幻想も持ち続けることなく、認めなければならない。

こうしたラディカリズムの再開には、当然のことながら、かつての解放の試みをすべてかなり深く探究することも含まれている。彼らの試みが孤立の中で未完に終わり、あるいは、世界的な欺瞞へと転倒された経験は、変革すべき世界の一貫性をいっそうよく理解させてくれる。そして、その一貫性を再発見することによって、最近、継続されている多くの部分的探究を救い出すことができる。それらの探究は、そのようにしてそれぞれの真理へと近づくことができるのである。世界のこの可逆的一貫性は、そのままの形で、あるいは可能な形で、中途半端なやり方の誤った性格を暴露するとともに、支配的な社会の働き方のモデルが——その位階秩序化と専門化の諸カテゴリー、そしてそこから派生したその習慣とその趣味とともに——、否定勢力の内部で再構成されるたびに、そこには本質的に中途半端なやり方があるのだという事実を暴露する。

おまけに、世界の物質的發展は速度を速めてきた。世界は常に、ますます多くの潜在的な力を蓄積している。しかし、社会を指導する専門家たちは、受動性を保存するその役割そのものから、それらの力の利用の仕方を知らないでいることを強いられている。この発展は、また同時に、一般化した不満と致命的な客観的危険を蓄積し、それを長期にわたってコントロールすることは、専門化した指導者たちにはできないのである。

シチュアシオニストが芸術の乗り越えを置くのはそうした展望の中にある以上、次のことはよく理解できるだろう。つまり、芸術と政治の統一的ヴィジョンをわれわれが語る時、それが言わんとすることは、芸術を何らかの形で政治に従属させることをわれわれが勧めているということでは絶対でない、ということである。われわれにとって、そして、この時代を曇りない眼で見始めることを始めているすべての者にとって、現代芸術はすでにもう存在していなかった。それは、ちょうど、30年代の終わり以降、どこにも、組織された革命的政治が存在していなかったのと同じである。それらが今、再来するとすれば、それは、それらの乗り越えでしかありえない。すなわち、それらが最も根本的に要求したものを、まさしく実現することである。

シチュアシオニストが語る新しい異議申し立ては、すでにいたるところで立ち上っている。現体制によって組織された非—コミュニケーションと孤立の巨大な空間の中で、1つの国から別の国へ、1つの大陸から別の大陸へと、新しい種類のスキャンダルを通して、いくつもの口火が切って落とされ、互いの間での交換が始まっている。

前衛——それが存在するどこでも——にとって重要なのは、それらの経験とそれらの人々を互いに結びつけることである。それぞれのグループを統一すると同時に、それらのグループのプロジェクトの首尾一貫した基盤を統一することである。われわれは、次の革命的時代のこれらの最初の行動を、知らしめ、説明し、発展させねばならない。そうした行動は、闘争の新しい形態と既存の世界に対する批判の新しい内容——顕在的か潜在的を問わず——を集中的に持っているために、容易に認めることができる。それゆえ、自らの絶えざる現代化を自画自賛している支配的な社会は、やがて話しかける相手を見出すことになる。というのも、この社会は、結局は、現代化された否定勢力を産み出すからである。

野心家の知識人や、われわれを真に理解する能力のない芸術家がシチュアシオニストの運動に加わることを拒否し、「シチュアシオニズム」を自称するナッシストを最も最近の例とするさまざまな歪曲を拒絶し、告発する際に、われわれはかくも厳しい態度を見せてきた。しかし、それとまったく同様に、ラディカルな新しい行動の実行者をシチュアシオニストと認め、彼らを支持し、決して非難しないことを、われわれは決意している。たとえ、彼らのなかの多くが、今日の革命プログラムの一貫性に対して、まだ十分な意識を持っておらず、単に、その意識を獲得する途上にあるにすぎないにしてもである。

われわれが完全に賛同できるいくつかの例だけに限って述べよう。1月16日、カラカス〔ベネズエラの首都〕の革命的学生たちは、武器を手にして、フランス芸術展を攻撃した。彼らは、5点の絵画を奪い去り、それを返還することと交換に政治犯の釈放を要求した。ウィンストン・ベルムデス、ルイス・モンセルベ、グラディス・トロコニスが発砲して防衛しようとしたにもかかわらず、絵画は機動隊によって奪い返されたため、数日後、他の同志らが、回収された絵画を移送中の警察のトラックに2発の爆弾を投げたが、不幸にも、それはトラックを破壊することはできなかった。これこそ、明らかに、過去の芸術の模範的な扱い方であり、それを再び生のなかに参加させ、生が持つ真に重要なものの上に置く模範的なやり方である。ゴーギャン（「私は、あえてすべてをやってみる権利を確立したいと思ったのである」）とヴァン・ゴッホが死んで以降、敵によって回収された彼らの作品は、このベネズエラ人の行為のように、彼らの精神に一致した称賛を文化界から受け取ったことは、これまで一度としてなかった。1849年のドレスデン蜂起の最中に、バクーニン¹は、絵画を美術館から外に出し、町の入り口に作られたバリケードの上に置いて、敵の攻撃部隊がそれに邪魔されて射撃を続けられなくなるかどうか見てみようとして提案した。もっとも、その提案は最後まで追求されることはなかった。それゆえ、このカラカスの事件が先の世紀の革命的高揚の最も高い地点の1つをいかに正しく引き継いでいるか、それとともに、この事件がいかに一挙にはるかに遠くまで進んでいるかは明らかである。

これに劣らず動機がはっきりしているように思えるのが、デンマークの同志たちの行動である

。それは、この数週間に、数度にわたり、スペインへの観光旅行を組織している旅行社に対して焼夷弾を投げつけるとともに、熱核兵器武装に反対する世論を喚起するために非合法のラジオ放送を行った。スカンディナヴィア諸国の快適で退屈な「社会主義化された」資本主義の枠組みの中で、自分たちの暴力によって、「人間化された」現体制を基礎づけているもう1つの暴力のいくつかの側面——例えば、情報の独占や、余暇や観光のなかで組織されている疎外など——を暴露する人間が出現したことは、非常に心強いことである。この快適な退屈には、恐るべき裏があり、それを受け入れるやいなや、さらにそれ以上の快適な退屈を受け入れねばならなくなる。この平和は単に生でないばかりか、核兵器による死の脅威に基づいた平和なのである。組織された観光が、訪れた現実の国々を覆い隠す貧弱なスペクタクルにすぎないだけでなく、中立的なスペクタクルに変形されて差し出されるその国の現実とは、実はフランコ*2の警察なのである。

最後に、4月に「政府管轄地域シェルター第6号」の所在地と計画を暴露したイギリスの同志たちの行動は、国家権力がその領土の組織化においてすでにどのレベルにまで到達しているか、また、権力の全体主義的機能をどれほど進んで活用しているかを暴くという巨大な長所を持つものである。これは、単に戦争を展望しただけのものではない。むしろ、あらゆる場所で熱核兵器戦争の脅威を維持することである。この脅威こそが、東側でも西側でも、今からすでに、大衆を服従させ、権力のシェルターを組織するのに役立つのである。それは、支配階級の権力を心理的にも物質的にも防衛するのに役立つ。それ以外の地上の現代的都市計画も、同じ関心に従って行われている。われわれはすでに、1962年4月に、フランス語版のシチュアシオニストの雑誌『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』第7号で、その前の年に合州国で建設された個人用核シェルターについて、次のように書いていた。「どのような恐喝についても言えることだが、ここでも防衛というのは単なる口実にすぎない。シェルターの真の用途は、人々の従順さを測り、それゆえそれを補強することであって、支配的な社会に好都合な方向へとこの従順さを操作することである。豊かな社会で消費しうる新食品の創造と同じく、シェルターは、これまでのいかなる商品にもまして、きわめて人工的な欲求を満たすために人間を働かせることができるということを示している。この人工的な欲求は、たえて欲望であったためしがなく、欲求にとどまる。〔……〕『団地』という形を取る新しい住居形態は、実際にはシェルター建築と切り離すことができない。団地とは、単にシェルターの劣った段階を表しているにすぎない。ただ、団地のアパルトマンの1軒1軒は狭いだけだ。〔……〕強制収容所のような地上組織は、形成途上にある社会の正常な状態であるが、その社会を地下に縮小して再現したものは、過剰なまでの病理を表している。この病は、この健康の図式をよりうまく暴いている。」

イギリス人たちは、この病の研究に、そしてそれゆえ、「正常な」社会の研究にも決定的な貢献をしてくれた。この研究は、それ自体が1つの闘争と切り離せない。その闘争は、「裏切り」という古くさい国家タブーを無視することを恐れずに、「情報」のインフレーションによる分厚いスクリーンの陰にある、多くの事柄についての秘密、現代社会において権力がうまく機能するためにきわめて重要な秘密というものを破る闘争である。警察の努力と数多くの逮捕にもかかわらず、破壊活動（サボタージュ）は日を追って広がってきた。それは、田園地帯に点在する秘密の司令部を急襲したり（そこでは、何人かの責任者の写真がむりやり撮られた）、極秘の電話番

号——それもまた、暴露された——にひっきりなしに電話することで、英国諜報部のさまざまな機関の40本の電話ラインを組織的に麻痺させたりしている。

社会空間の支配的なやり方での整備に対するこの最初の攻撃こそ、われわれが「RSG6 粉碎」という示威集会をデンマークで組織することによって讃え、拡大させたいと望んだものである。そうすることで、われわれはこの闘争を国際的に拡張しようと考えているだけでなく、地球規模の同じ闘争の別の戦線、すなわち芸術の側面へとこの闘争を拡張しようと考えている。

シチュアシオニスト的と呼びうる文化の創造性は、統一的都市計画のプロジェクトや生活の中での状況の構築のプロジェクトによって開始される。それゆえ、その実現は、現在の社会に含まれている革命的可能性の全体を実現する運動の歴史と切り離すことはできない。しかしながら、差し追った行動——それは、われわれが破壊したいと望んでいる枠組みの中で企てられなければならない——において、今からでも、映画から絵画にいたる既存の文化的表現の手段を用いて、批判的芸術をつくり出すことは可能である。それこそ、シチュアシオニストが転用の理論によって要約したものである。内容において批判的なこの芸術は、その形式においても自己に対して批判的でなければならない。それは、既存のコミュニケーションの専門領域の限界を知ることによって、「今や、それ自身への批判を含み持つようになる」コミュニケーションである。

「RSG6」に関して、われわれはまず、訪問者が最初に入る部屋の中に、核シェルターの空気を作り出した。訪問者はそこで考えた後、この種の必需品が徹底的に排除されたゾーンに出会うことになる。ここで批判的な仕方で用いられる芸術は、絵画である。

ダダイスムによって頂点を極めた現代芸術の革命的役割は、芸術であれ言語や行動様式であれ、あらゆる慣習を破壊することにあつた。芸術や哲学において破壊されたものも、だからと言って、当然、新聞や教会から具体的に一掃されたわけではなく、武器の批判はその時、批判の武器のある程度の前進にまだついてこれなかったために、ダダイスム自体は文化のモードとなって分類されてしまい、最近になって、ネオダダイスト*3たちによってその形式だけが反動的な気晴らしに逆転されてしまった。このネオダダイストらは、1920年代以前に発明されたスタイルを繰り返し、それぞれの細部を途方もなく膨らませて利用し、そうした「スタイル」を現在の世界を受け入れる方策として、また、その世界の装飾として役立たせることによって、出世を遂げるのである。

しかしながら、現代芸術が持ってきた否定の真理は、これまで常に、それをとりまく社会への正当な否定であつてきた。1937年にパリで、ナチの大使オットー・アベッツ*4が、絵画「ゲルニカ」の前で、ピカソに「これを作ったのはあなたですか」と尋ねたとき、ピカソはまったく正当にもこう答えた。「いいえ、あなたです」と。

第一次世界戦争の経験の後、現代詩と現代芸術のなかにあれほど広がった否定——それと、ブラック・ユーモアも——は、確かに、第三次世界戦争のスペクタクル——われわれがその中で生きているスペクタクルに関して再び出現するべきである。ネオダダイストが、かつてマルセル・デュシャン*5の行った造形上の拒否に（美学的に）肯定的な意味を担わせることを語るのに対して、世界が今、肯定的なものとしてわれわれに与えるものはすべて、現在認められている表現形態に果てしなく否定的な意味を担わせ続けるだけであり、その回り道を通して、この時代の

唯一の表象芸術を作らせるにすぎないと、われわれは確信している。実際に肯定的なものが到来するのは別の場所であるだろう、そして、今から直ちに、この否定がそれに協力するのだ、そのことをシチュアシオニストは知っている。

一切の絵画的な関心を越えて、そしてさらに、願わくば、多かれ少なかれずっと以前に滅びてしまった造形美の一形式への媚びを思い起こさせるあらゆるものを越えて、われわれはいくつかの完全に明確な印の痕跡をたどってきた。

何も描いていないタブローや転用された抽象絵画の上に書き込まれた「指令」は、壁の上に書かれているのを眼にできるスローガンと考えてもらいたい。いくつかのタブローの政治声明形式のタイトルは、もちろん、伝達不可能な「純粹記号」の絵画に自分の基盤を置こうとする流行の気取ったスタイルと同じ愚弄的、罵倒的意味を持っている。

「熱核反応地図」は、絵画における「新しい具象（ヌーヴェル・フィギュラシオン）」を求める骨の析れる探究のすべてを一挙に乗り越える。なぜなら、この「地図」は、アクション・ペインティングの最も自由な手法を、次の世界大戦の最中のさまざまな時刻の世界のいくつかの地域を表象することに結びつけたが、それは完璧に写実的な表象だと主張することもできるからである。

「勝利」の連作で問題となっているのは、——そこでもなお、超一現代的な極端なぞんざいさを、オラス・ヴェルネのような細密な写実主義に混ぜ合わせることによって——戦争画を復活させることである。しかし、ジョルジュ・マチューとは逆に、また、彼が自分の宣伝のためにやっている取るに足らない騒動の基にある反動イデオロギーへの回帰とは逆に、われわれがここで成し遂げる転倒は、過去の歴史をよりよいものへと、つまり、実際にそうでなかった以上に革命的で、成功したものへと訂正するのである。「勝利」は、ロートレアモンがすでに、大胆にも、贗物によって不幸の外見とその論理のすべてに反対することを約束した時に用いた絶対的楽天主義の転用を引き継いでいる。「私は悪を認めない。人間は完全である。魂は失墜しない。進歩は実在する。（……）今までのところ、人が不幸を描いたのは、恐怖、憐憫の情を起こさせるためであった。私は幸福を描いてそれらの情と反対の気持ちを起こさせよう。（……）私の友人たちが死なない限り、私は死について語ることはないだろう。」

ギー・ドゥボール 1963年6月

*1：ミハイル・アレクサンドロヴィッチ・バクーニン（1814－76年） ロシアのアナキスト革命家。40年からの独・スイス・伊への外追申に、48年、革命に出会い、プラハでスラヴ連邦樹立を図り、翌49年、ドレスデン暴動を指揮し、逮捕される。51年にロシアに送還され、シベリア流刑となるが、61年に逃亡し、日本、米国を経てロンドンに渡り、〈第1インターナショナル〉に加わるが、マルクスと論争、分派を作り、72年に除名される。73年の主著『

『国家とアナキー』によって、ロシアのナロードニキ運動のイデオログとなる。

*2：フランコ（1892－1975年） スペインの軍人・政治家。36年人民戦線の選挙での勝利以降、反革命内乱を開始し、ドイツ・イタリアの軍事援助で39年人民戦線を壊滅させ、独裁制を確立。以後、47年の王位継承法により終身統領としてスペインを支配。

*3：ネオダダリスト 50年代中頃から米国を中心に、それまでの芸術形式を破壊し、卑俗とされてきたものを積極的に用いて芸術作品を製作するネオダダの芸術家たちのこと。53年以降、ぼろ切れ、印刷物、廃物などを集め〈コンバイン・ペインティング〉の名で作品を製作してきたロバート・ラウシェンバーグ、54年以降旗、標的などの絵画を製作したジャスパー・ジョーンズらがいる。

*4：ハインリッヒ・オットー・アベツ（1903－58年） ナチス・ドイツの文化工作者。ゲッペルスのもとで対仏宣伝を担当、1940年フランス降伏後のヴィシー政権の対独協力を促進。戦後、戦犯として重労働に服す。

*5：マルセル・デュシャン（1887－1968年） フランスの画家。1914年、第一次大戦を機に米国に渡り、ピカビア、マン・レイとともにニューヨーク・ダダの中心人物として活動。17年のニューヨーク・アンデパンダン展に『泉』というタイトルを付けた男性便器をそのまま出品するなど、「レディ・メイド」の作品によって芸術作品と芸術家の概念を根底から覆す作品を作った。

実を言えば、「アンテルナショナル・シチュアシオニスト」の解説を書くことは、私にはかなり困難な仕事であるように思われた。主体的に参加した女がほとんどいないのである。50-60年代という時代状況を考えれば、これはしかたのないことなのかもしれない。しかしそのような遠い距離からの醒めた見方に徹するわけにもいかない何かを、このテキストは感じさせる。この、惹きつけられると同時に反発を覚えるアンヴィヴァレントな気分は身に覚えがある。それはかつて私の日常に絶えずつきまとっていたものだからである。そうした気分が蘇ってくるにつれて、女たちの不在の意味もまた、身近なものとして見えてくるような気がしてくる。

シチュアシオニストの思想と運動が60年代後半以降のラディカリズムに与えた影響は計り知れない。権力的ヒエラルキーの拒否、「日常生活の恒常的革命」というテーゼ、そして広く深い意味での「政治的」という言葉の定義。フェミニズムの「第二の波」もまたここから出発したと言える。言うまでもなく「第二の波」の出発点は、新左翼ラディカリズムへの失望だった。しかし失望には当然「希望」が先行していたことも、見過ごすわけにはいかない。

遊び、祝祭としての独創的な運動形態、空間の「不法」占拠、そして非合法も辞さない逸脱行為。新左翼ラディカリズムが作り出した環境が、女にとっても刺激的で魅力的なものだったことは確かだ。フェミニズムの新しい展開は、まさにこの環境から生まれたのだ。従来の社会主義理論における婦人解放論、つまり生産労働に就くことを女性解放の決定的条件とする理論は、女たちが日常的に感じ続けてきた「名前のない問題」に展望を与えるものではなかった。「女の問題」は政治や生産労働の場だけではなく、いやそれ以上に「労働」の外におかれてきた生活領域に深く関わるものであることを、多くの女たちは直感していた。だからこそ、新しい男女の関係による新しい集団の可能性を、この日常生活の「革命」に求めたのである。

しかしこの環境に飛び込む女の数が多くなかった。いやほとんど例外的であったというべきだろう。多くの女たちは「真面目」な運動には参加しても、時として悪ふざけにしか見えない「遊び」に主体的に関わる者はわずかであった。それは女を支配する社会規範にかかわる問題なのだろうと、私は長い間思っていた。社会は男の逸脱行為にはおおむね寛大であるが、女のそれには手の平を返したように、世間の目は厳しい。男に寛大な分だけ、女には容赦がない。だから女たちは、一見不真面目な逸脱行為にはなかなか入ってこれないのではないか、という風に、この女の不在を解釈していたのである。

しかし女にとって、この環境は「面白いけれど、どこか居心地が悪い」ものであったことも確かだ。それは言うまでもなく日常生活の「革命」をめざしているはずの男たちが女の問題に対して示すあまりの無理解と拒絶反応によるものであったが、それだけではなかった。今になって思っていたのは女が「面白さ」の、「遊び」の観客にはなれても、結局は主体になれなかったのではないかということだ。周囲を取り巻く女たちは結構大勢いる。しかし彼女らとの関係は、チアガールとスポーツ選手たちの関係のように、伝統的な男女の権力関係そのものなのだ。その男の世界に例外的に踏み込んだ女が数人いたところで、構造を揺るがすことはできない。同志とし

ての女は「風変わりな例外」にすぎない。特に「遊び」が社会規範を踏み越えようとして性的挑発性を帯びるとき、この矛盾は覆い隠すことが出来なくなる。そこには新左翼ラディカリズムの日常生活批判の限界が、典型的な形で現れているのではないだろうか。

冒頭で述べたように、シチュアシオニストの運動に主体的に参加した女はあまりにも少ない。57年から69年の間に、正式にメンバーとして参加した70名ほどの中で、女はわずか7名にすぎない。一方既に刊行されている第3巻までのシリーズには、脚注部分に多くの写真が掲載されているのだが、説明のあるものとなないものが混在している。説明のない写真の多くは本文を読んでもその意味がよくわからない。おそらく雑誌に掲載されていた写真なのだろう。驚いたことにそのほとんどは女の写真であり、またその大部分は白人女性の水着写真である。つまり無名の被写体として、しかも多くは性的スペクタクルとして、女の身体が過剰に登場しているのだ。

解説を読むと、どうやらこれは「転用」というシチュアシオニストの手法の結果であるらしいことがわかる。スペクタクル社会に対抗する実践がスペクタクルに回収されないための手段として、スペクタクルのメディアそのものを転用して用いるというのである。スペクタクル化された女の身体の過剰な登場は、スペクタクル社会としての現代資本主義社会における欲望の組織化の仕組みを効果的に暴くものとして位置づけられているようである。

68年5月、ソルボンヌやパリの街頭に氾濫したビラや落書きなどのデモンストレーションには、この「転用」の手法が多く用いられ、中には裸の女のポスターを用いたシチュアシオニストのビラもあったという。抑圧された欲望、とりわけ性的欲望の解放は、ラディカリズムの重要なスローガンのひとつであった。

主体としての女の不在と、無名の被写体としての女の過剰な登場。この2つの現象は、おそらく同じ問題を示している。この「遊び」は男のものなのだ。さらに言えば、資本主義社会(と、とりあえず限定しておくが)においては、直接に性的な「遊び」だけでなく、遊びというものがおそらく本質的に「女遊び」なのではあるまいか。「遊び」は資本主義的「労働」と同じくらい男の世界である。「この労働はこの余暇しかもたらさない」。高度資本主義社会を鋭く批判するシチュアシオニストのこの言葉は、シチュアシオニストが意図する以上に深い意味での真実なのだと思う。資本主義的「労働」から基本的に排除されている女には、「遊び」は許されていない。

シチュアシオニストのメッセージは、はたして女に対しても向けられていたのだろうか。スペクタクル社会で消費され続ける女の身体は、シチュアシオニストの「遊び」においても「転用」の道具であり続けたのではないか。解放されるべき欲望がもっぱら男の欲望であったことを、シチュアシオニストの「転用」ははからずも暴き出しているのではないだろうか。

シチュアシオニストは資本主義的「労働」の概念を批判し、そこから疎外された人々を闘争の主体とする新しい運動への道を開いた。そこには女の搾取、抑圧の構造を模索するための重要な手掛かりが潜んでいた。フェミニズムのキーコンセプトである「家父長制」と「家事労働」は、シチュアシオニストと新左翼ラディカリズムに多くを負っている。しかし彼らが「労働」に対置した「遊び」の男性中心性はフェミニズムによって批判されなければならなかった。「疎外された労働」と「疎外された余暇-自由時間」の真の関係は、女の日常生活、女の労働の分析なしには

、根本的に解明しえない。シチュアシオニストはスペクタクル社会という優れた認識から、欲望の組織化という、資本主義社会の根幹にかかわる問題に焦点を当てたが、欲望の男性中心性については結局無自覚だったのではないか。そしてその影響を受けた広範な運動の中では、シチュアシオニストが備えていた「転用」という批判の契機も拡散し、希薄化していったのではないだろうか。

資本主義社会においては、男が「遊ん」でいる所には必ず女がいる。しかし男にとっての「遊び」や休息の場は、女にとっては労働の場である。酒場、風俗の店、それに家庭……。 「労働」以外の時間、男は休息し「遊」んでいる。しかし女は働いている。酒場や風俗の店ではもちろんのこと、家庭においても。フェミニストの告発が開始されるまで、女の労働は軽視されるか、もしくは労働ではないことにされ続けてきた。男女の分離の上に成り立つ資本主義社会において、女と男の経験は断じて同じものではない。

70年代初頭、アウトノミア運動の拠点であったパドヴァのフェミニストたちは、「家事労働に賃金を」というスローガンを掲げ、「無償の家事労働の拒否」という闘いを提唱した。彼女らは、資本による搾取は「工場」だけにとどまらず、生活の場すべてが「社会的工場」として搾取されているというアウトノミアの理論から、そしてアウトノミアがシチュアシオニストから受け継いだ独創的な闘争スタイルから、おそらく多くを学んだだろう。とくに「資本主義社会からのけ者にされたすべての者たちの先頭に位置する女」という闘争主体としての女の位置づけは、フルタイム賃金労働を基準とする従来の労働観へのアウトノミアの批判と同質のものである。しかし彼女らは「女」を消去することなく、アウトノミア運動とはつねに一線を画し続けた。彼女らは資本主義が「労働」であると見なしたことのない女の家事労働に焦点を当てた。労働力再生産労働としての家事育児の分析、無償の労働者としての主婦の定義、労働の場としての家庭の位置づけには、男たちから「悪しき労働者主義」との的外れの批判も浴びせられた。このパドヴァのフェミニストたちのひとり、マリアローザ・ダラ・コスタは有名な「女の力と社会の転覆」(1971年)で、「労働力再生産労働としての無償の家事労働の拒否」という闘いを提唱し、家事労働をめぐる長い論争の口火を切った。労働としての家事の発見は、「家父長制」という個人生活の政治性の発見とならんで、フェミニズムの「第二の波」を大きく進展させ、資本主義的「労働」概念、さらには経済活動のあり方自体の見直しを迫るまでに進展してきた。「見えない労働」であった女の家事労働は、今や社会的に有用な労働として数値的評価の方法が検討され、生産労働のみを「労働」とみなす従来の資本主義的労働観は大きく揺らいでいる。性別分業という資本主義による男女の分離も克服すべき課題として位置づけられるようになってきた。

だが、イタリアの家事労働論にとって理論的にも実践的にも切り離すことの出来ない決定的な要素であった「労働の拒否」というシチュアシオニスト以来のラディカリズムのスローガンは、家事労働論争が英語圏で繰り広げられ、労働としての家事が市民権を確立していくにつれて、忘れられていったように思える。ダラ・コスタは女が家庭の外で就労することも家事労働の拒否のひとつの形態であるとしている。しかし外での労働もまた、搾取され疎外されたものでしかない。女の就労が拡大した80年代以降、家事労働論は家庭外で働く女の二重負担の問題として論じられるようになってきた。家庭における非人間的労働を家庭の外での非人間的労働に置き換え、そ

のために「あれやこれやのサービスに金を使って」(ダラ・コスタ)さらに資本を潤わせる。これが今のところ女が「働く」ことの現実である。労働を資本の論理から働く人間の手に取り戻す闘いは、家庭の中と外との両方において行われなければならない。私たちは自給自足などほとんど不可能になってしまったこの先進資本主義国で、とりあえず生き延びなければならない。そのために労働の権利は不可欠である。そしてより人間的な労働条件を男女ともに要求していく闘いが続けられなければならない。しかし私たちには働きたくない時があれば、働きたくとも働けない時もある。失業、病気、障害、あるいはとくに理由がなくとも働く気になれないこともあるだろう。資本の要求するペースについていけなくて、あるいは資本に切り捨てられて、働くことの出来ない者に厳しい社会は、それだけ労働を資本の手から取り戻すことが困難な社会である。「働かない権利」は労働の権利と同じぐらい必要である。資本のために役に立たないからといって、生きる権利を奪われてはならないからである。

ともあれ男性フルタイム賃金労働者と専業主婦という枠組みの崩壊は、もはや時間の問題だろう。これはフルタイム賃金労働の切り崩しという危機であるが、資本主義的男女の分離に基づく男性中心社会を根底から揺さぶるチャンスでもある。資本による女の欲望の組織化も進行し、男の身体のスペクタクル化という現象も生じているが、分離が真に克服されるとき、性的なものも含めて欲望の形態は大きく変貌するかもしれない。それは欲望の現形態に支えられた貸本主義の本当の危機となりうるだろう。

シチュアシオニストが唱えた「労働の拒否」は、女を含めて生産労働から排除された人々の自己肯定的運動を作り出した。ともすれば資本の論理に囲い込まれがちな日本の男女の労働者にとって、今日の危機をチャンスに変えていくためにも、「働け」ない人々とともに生きていくためにも、「労働の拒否」という戦略は今なお有効な視点を提供しうるのではないだろうか。